以下については、公開対象から除いています。

五二～六〇頁
Ⅵ　自然科学的分析
一　花粉分析
二　珪藻分析

図版二五

埼玉古墳群発掘調査報告書　第二集

鉄砲山古墳

埼玉県教育委員会

序

埼玉県は、全国に先がけて、史跡「埼玉古墳群」の広域保存と環境整備を図る目的で、さきたま風土記の丘の建設計画を立てました。

埼玉県教育委員会では、この計画にもとづいて、昭和四十三年の稲荷山古墳にはじまる継続的な発掘調査を実施してまいりました。そして、その成果にもとづいて環境整備を促進する一方、昭和四十四年にはさきたま資料館を開館し、資料の収蔵・展示の充実に鋭意努力してまいりました。

本書で報告する鉄砲山古墳は、埼玉古墳群中、二子山古墳、稲荷山古墳に次ぐ全長約百十二㍍の前方後円墳であります。昭和五十四年度及び五十八年度の二回にわたる発掘調査で、稲荷山古墳と同様の長方形にめぐる二重堀が発見され、この堀からは、かつて墳丘に樹立されていた貴重な埴輪の破片が多数出土しております。

本書は、昭和五十五年度刊行の「埼玉稲荷山古墳」に次ぐ埼玉古墳群発掘調査報告書第二集でありますが、埼玉古墳群に関する基礎資料として広く御活用いただき、教育、学術、文化の振興に役立つことができれば幸いであります。

最後になりますが、本書の刊行に至るまで多大の御指導・御協力を賜りました文化庁をはじめとする関係各機関並びに関係者各位に対して、深く感謝の意を表します。

昭和六十年三月

埼玉県教育委員会教育長

長　井　五　郎

目次

序
例言
調査の組織
Ⅰ 調査に至る経過……1
Ⅱ 調査の経過……1
一 前方部西側調査区……1
二 後円部東側調査区……2
Ⅲ 遺跡の立地と環境……4
Ⅳ 調査の成果……8
一 遺構……8
㈠ 前方部西側調査区……8
㈡ 後円部東側調査区……12
二 遺物……20
㈠ 埴輪……20
㈡ 土師器及び須恵器……22
出土遺物観察表……37
Ⅴ まとめ……50
Ⅵ 自然科学的分析……52
一 花粉分析……52
㈠ 試料……52
㈡ 分析方法……52
㈢ 分析結果及び考察……52
二 珪藻分析……53
㈠ 試料……53
㈡ 分析方法……53
㈢ 分析結果及び考察……53
付図 さきたま古墳群全測図

挿図目次

第1図　鉄砲山古墳の位置とその周辺の遺跡……5
第2図　前方部西側調査区及び後円部東側調査区の位置……9
第3図　前方部西側調査区全測図……10
第4図　前方部西側調査区東壁土層断面図……11
第5図　後円部東側調査区全測図……15
第6図　後円部東側調査区遺構配置図……16
第7図　後円部東側調査区西壁及び北壁土層断面図……17
第8図　後円部東側調査区溝実測図……18
第9図　後円部東側調査区土壙実測図……19
第10図　前方部西側調査区出土遺物実測図1（1～9）……23
第11図　〃　2（10～23）……24
第12図　〃　3（24～40）……25
第13図　〃　4（41～67）……26
第14図　〃　5（68～76）……27
第15図　〃　6（77～92）……28
第16図　後円部東側調査区出土遺物実測図1（1～11）……29
第17図　〃　2（12～37）……30
第18図　〃　3（38～56）……31
第19図　〃　4（57～86）……32
第20図　〃　5（87～110）……33
第21図　〃　6（111～124）……34
第22図　〃　7（125～137）……35
第23図　〃　8（138～165）……36
第24図　主要花粉及び胞子化石ダイヤグラム……59
第25図　主要珪藻化石ダイヤグラム……60

表目次

第1表　試料採取地点及び土質一覧表……52
第2表　後円部東側調査区試料花粉分析結果……56、57
第3表　後円部東側調査区試料珪藻分析結果……58

図版目次

図版一　鉄砲山古墳の埼玉古墳群内の位置
図版二　1　鉄砲山古墳近景
　　2　〃
図版三　1　前方部西側調査区全景
　　2　〃
図版四　1　前方部西側調査区内堀全景
　　2　〃
図版五　1　前方部西側調査区墳裾
　　2　前方部西側調査区中堤
図版六　1　後円部東側調査区全景
　　2　〃
図版七　1　後円部東側調査区全景
　　2　後円部東側調査区内堀
図版八　1　後円部東側調査区内堀底
　　2　後円部東側調査区内堀底西部
図版九　1　後円部東側調査区内堀中堤側立上り及び中堤肩部
　　2　後円部東側調査区内堀側立上り
図版一〇　1　後円部東側調査区中堤
　　2　後円部東側調査区外堀全景
図版一一　1　後円部東側調査区外堀東部
　　2　後円部東側調査区外堀外側立上り
図版一二　1　後円部東側調査区外堀南部
　　2　後円部東側調査区外堀底円筒埴輪出土状況
図版一三　後円部東側調査区西壁土層断面
図版一四　1　後円部東側調査区西壁土層断面（墳裾部分）
　　2　後円部東側調査区北壁土層断面（墳裾部分）
　　3　後円部東側調査区北壁土層断面
図版一五　1　後円部東側調査区土壙（SH011）
　　2　〃（SH033）
　　3　〃（SH035）
図版一六　1　前方部西側調査区出土遺物1（1）
　　2　〃（2～15）
図版一七　1　〃（16～23）
　　2　〃（24～40）
図版一八　1　〃（41～67）
　　2　〃（68～75）
図版一九　1　〃（77～86）
　　2　〃（87～93）
図版二〇　1　後円部東側調査区出土遺物1（1）
　　2　〃（2～20）
図版二一　1　〃（21～37）
　　2　〃（38～56）
図版二二　1　〃（57～86）
　　2　〃（87～110）
図版二三　1　〃（111～124）
　　2　〃（125～137）
図版二四　1　〃（138～145）
　　2　〃（146～165）
図版二五　1　後円部東側調査区試料花粉・胞子化石顕微鏡写真
　　2　後円部東側調査区試料珪藻化石顕微鏡写真

例言

一　本書は埼玉県行田市埼玉（さきたま）五二六七、他に所在する埼玉鉄砲山古墳周堀の発掘調査報告書である。

二　発掘調査は昭和五四年度（前方部西側）、及び昭和五八年度（後円部東側）、整理は昭和五九年度に実施した。
昭和五四年度調査期間　昭和五四年十一月二七日～昭和五五年一月十一日、（担当者、小川良祐、今泉泰之、金子真土）
昭和五八年度調査期間　昭和五八年七月一日～十二月二二日、（担当者梅沢太久夫、中島宏、杉崎茂樹）

三　昭和五八年度、五九年度事業については文化庁国庫補助事業として実施した。

四　各事業の組織は別表に掲げるとおりである。

五　出土品の整理及び本書の図版作成は主に杉崎茂樹が当り、小久保徹、中島宏の協力を得た。

六　本書の執筆は各文末に記したとおり行ったが、全体について横川好富が加除筆を行った。

七　写真撮影は、出土遺物については杉崎茂樹が行ったが、遺構については各担当者が行った。

八　遺構の名称を、挿図中では以下のように略して表示した。
SA：内堀、SB：中堤、SC：外堀、SD：溝、SH：土壙。

九　花粉及び珪藻分析は（株）パリノ・サーベイに委託し、写真撮影の一部（航空写真）及び調査区内の基準点及び水準点の設定は中央航業（株）に委託したものである。

十　発掘調査から整理、報告に至るまで、左記の方々及び各機関から御指導、御協力を賜わった。

発掘調査

青代　清一　秋山　時三　秋山　ハル　岩崎　いく　伊藤　清子
大沢　伸啓　太田　博之　大野　かく　大野　鶴枝　大野　りん
大山　光枝　加相　なか　加相　松江　金沢　恵子　川島　なつ
木村　あさ　菊地　きん　小林　計治　小林　志乃　坂本　孝則
坂本　和重　沢田　百代　島田　進　島崎しづ子　島田とし子
柴崎　友子　志村　ミツ　関　義則　関口　かつ　関口喜美恵
関口美代子　関口　ヨシ　田中　正夫　多田　健二　土橋貴代司
内藤　貞　西田耕太郎　萩原　太郎　萩原　なつ　萩原せい子
松葉　利男　武笠　勝利　諸貫　千代　山崎美栄子

整理・報告

太田　博之　河辺美津江　掛川智恵子　木村　俊彦　小島　清一
坂本　和重　坂本　孝則　白井　照子　島田　益江　鈴木須美江
関口　広子　多田　健二　浜中　紀子　橋本　一江　三田あけみ
市毛　勲　井上　裕一　岩崎　卓也　大塚　初重　金子　正之
亀井　正道　車崎　正彦　斉藤　国夫　田中　一郎　田部井　功
寺社下　博　中島　利治　増田　逸朗　柳田　敏司　山崎　武
吉川　国男　若松　良一

行田市教育委員会　熊谷市教育委員会　鴻巣市教育委員会

調査の組織

主体者　埼玉県教育委員会

教育長　石田正利（昭和五四年度）
同　長井五郎（昭和五八、五九年度）
教育次長　下總昇（昭和五四年度）
同　岩上進（昭和五八、五九年度）

事務局（企画・調整）埼玉県教育局文化財保護課

課長　杉山泰之（昭和五四年度）
同　金井塚良一（昭和五八、五九年度）
課長補佐兼庶務係長　奥泉信（昭和五四年度）
課長補佐　木戸一恵（昭和五四年度）
課長補佐兼庶務係長　町田勝義（昭和五八、五九年度）
課長補佐　大村進（昭和五八年度）
同　早川智明（昭和五九年度）
庶務係　太田和夫（昭和五四年度）
同　千村修平（〃）
同　畔上敦志（〃）
同　柚木博（昭和五八、五九年度）
同　亀田孝（〃）
文化財第二係長　栗原文蔵（昭和五四年度）
埋蔵文化財係長　塩野博（昭和五八年度）
同　梅沢太久夫（昭和五九年度）
文化財係　柿沼幹夫（昭和五四年度）
同　駒宮史朗（〃）
同　井上尚明（〃）
同　宮崎朝雄（昭和五八、五九年度）
同　鈴木秀雄（昭和五九年度）

事務局（発掘調査・整理）埼玉県立さきたま資料館

館長　野村鍋一（昭和五四年度）
同　坂巻正一（昭和五八、五九年度）
副館長兼庶務課長　八木原巌（昭和五四年度）
同　原田家次（昭和五八年度）
副館長　横川好富（昭和五九年度）
庶務課長　風間俊克（昭和五九年度）
庶務係　島村昌子（昭和五四年度）
同　橋本克己（昭和五八年度）
同　鈴木廣子（昭和五八、五九年度）
同　川崎栄一（昭和五四、五八、五九年度）
学芸課長　小川良祐（昭和五四年度）
同　梅沢太久夫（昭和五八年度）
同　小久保徹（昭和五九年度）
学芸員　今泉泰之（昭和五四年度）

同　金子真土（　〃　）
同　中島　宏（昭和五八、五九年度）
同　杉崎茂樹（昭和五八、五九年度）
同　岡本一雄（　〃　）
嘱託　大熊達雄（　〃　）

Ⅰ　調査に至る経過

埼玉古墳群は昭和一三年八月八日付文部省告示をもって国の指定史跡になっているが、周辺地域を含めて発掘調査が行なわれたのは最近のことである。それまでは遺物の出土は知られているが、その状況が不明なものがほとんどである。昭和四〇年に文化庁の前身である文化財保護委員会では、考古、民俗、古文書等の文化財を、その地域の特色ある風土と一体化して保存と活用をはかるための「風土記の丘」建設構想が発表され、それをうけて埼玉県では昭和四二年に埼玉古墳群を中心とした「さきたま風土紀の丘」建設事業が開始された。そして同年二月に二子山古墳周堀復原の事前調査が始まり、以後昭和四九年度までは主として周堀復原工事のためのトレンチ発掘による確認調査が実施されて、二子山、稲荷山、丸墓山、奥の山の各古墳の周堀が復原されている。稲荷山古墳については昭和四三年に主体部の調査が行なわれて報告書も刊行されている。昭和五五年度から国庫補助事業として埼玉古墳群の発掘調査および出土遺物の整理が毎年実施され現在に至っている。これは史跡整備に先行して各古墳の堀や墳丘の範囲を確認するものである。国庫補助金事業の発掘調査については、鉄砲山古墳に関しては二回実施している。昭和五四年度は、前方部西隅付近の墳裾部と周堀の確認のため、同年一一月二七日から、昭和五八年度は後円部東側の墳裾部と周堀の確認のため、同年七月一日から発掘調査を開始した。

（小久保　徹）

Ⅱ　調査の経過

一　前方部西側調査区（昭和五四年度）

昭和五四年度の埼玉古墳群の史跡整備のための発掘調査は、鉄砲山古墳の他に、瓦塚古墳の前方部東南側周堀の範囲確認調査も実施しており、鉄砲山古墳前方部西側地区の調査は、瓦塚古墳の調査に引き続き、昭和五四年一一月二七日から開始した。

調査予定地及びその付近は草地となっており、開始にあたり若干の除草を行い、座標北を軸とするグリッドを設定、発掘に着手し、まず、表土除去にあたった。

数日を経ずして、中堤の存在を予想した部分の表土下約三〇センチにローム土を検出した。このため、このローム土を検出したレベルで、調査区全体を平坦にし、中堤の遺存状況、及び内堀、外堀の覆土部分の範囲確認作業を行ったが、中堤は比較的遺存状況が良好と思われた。

ローム検出面での遺構確認の後、直ちに、内堀、外堀の覆土部分の発掘作業に着手したが、一二月中旬には覆土をほぼ除去し終えた。この間に、墳裾の覆土や墳丘寄りの内堀覆土中からは、比較的多数の埴輪片が出土したが、

これらは墳丘上方から転落してきたものと理解された。

内、外堀の覆土除去後、堀底の精査に移ったが、内堀からは六基、外堀からは二基、都合八基の溝を発見したが、覆土の状況からして、これらはいずれも耕作土中からの掘込みであり、新しい時期のもので、古墳と直接係りを持つと思われるものではなかった。一二月中には周堀を含め、これらの遺構の発掘作業は終了した。

年明け後は一月一一日に、調査区全体及び各遺構の写真撮影を実施し、翌日からは実測図の作成作業に入った。

図面の作成には数日を要し、その後、遺構の埋戻作業を行った。まず、遺構を保護する目的で、調査区全体に厚さ約一〇㌢で川砂を敷き、次に調査の排土で埋戻して、転圧、整地し、作業を終了した。

こうして一月下旬には埋戻作業も終え、調査用の機材を撤収して全ての現場作業を終了したが、瓦塚古墳の調査との兼ね合いもあり、調査期間は約一ケ月と短かく、また調査面積も二二〇㎡と小規模なものにとどまった。

二　後円部東側調査区（昭和五八年度）

昭和五八年度の調査は、後円部東側部分の周堀の形態及び範囲確認を目的とし、約一、一〇〇㎡を対象として実施した。

調査予定地付近は公園化に伴い、陸田であったものを客土、整地して芝地としたということであったので、まず試掘を実施し、遺構面までの状況を把握することにした。

七月一日、調査予定地に二×二㍍の試掘グリッドを八箇所に設定し試掘を開始した。同月六日には中堤と予想される部分でローム土を検出、内、外堀部分ではその覆土の状況が明らかになった。土層断面の観察では、付近には芝地とした際に山砂と人頭大の砂岩により、厚いところで六〇㌢客土されており、その下に約二〇㌢厚で耕作土と思われる灰色系の粘土が存在し、さらにその下には中堤部分ではローム土が、内、外堀部分ではその覆土である黒色系の土が存在していることが判明した。

試掘の成果をもとに七月七日から三日をかけ、重機を利用し、客土を排除した。その後、一三、一四日の両日で、南北を基軸とした基準点及び水準点を設置、同時に遺構復元整備に利用する目的で、コンクリート製の遺跡原点杭を調査区外に三本埋設した。

七月一九日に、ベルトコンベアーを利用し耕作土の除去を開始、八月の上旬には調査区全体でのローム層上面の遺構の遺存状況を確認したが、中堤は灰色系の粘土を充埋する溝で破壊を被っている状況が明らかとなり、埴輪の樹立痕でも発見できれば、という期待もあったが、その可能性も薄らいだ。

その後、台風による降雨のため、数日間調査を中断したが、八月二二日より調査区西方の内堀部分から、人力により堀の覆土の除去を開始した。湧水のため作業がなかなかはかどらず、内堀覆土の除去作業だけで九月上旬までを要した。

内堀の覆土除去後、直ちに堀底の精査を開始した。中堤付近では、ローム層上面での確認作業で存在が判明していた溝が中堤の肩部を予想以上に破壊しており、立上り部分も遺存が良くない状況が判明した。堀底には中堤と平行、あるいは直角の溝や、後円墳丘に沿うような溝、そして小規模な土壙も発見されたが、多くは耕作土から掘り込まれたと思われる灰色系の粘土等を

覆土としており、古墳との係りのある可能性を有するものは少なかったが、堀のほぼ中程で、中堤と平行する形で発見されたSD003は、覆土下層と同様な土砂が堆積しており、割口部分のあまり磨滅していない、大形の埴輪破片を出土するもので、内堀の時期と比較的近い時期に開削されたことを予想させるものであった。また、墳丘裾付近の堀底からも、後円部墳丘に沿うように弧を描く溝（SD004、SD006、SD011、SD012）が発見され、これらはいずれも浅いものであったが、SD003と同様な土を覆土としており、注意をひくものであった。

内堀の覆土除去作業中に、埴輪片が多数出土、墳丘寄りでは点数も特に多かったが、円筒埴輪の破片が大部分であった。この他、小破片であるが、型式を考定可能な須恵器及び土師器片も出土した。

一〇月五日に内堀の発掘を終え、翌六日から外堀部分に着手。この頃には地下水位も下がったためか、湧水も少なく、作業は順調に進行した。

中堤の裾は内堀側と同様、遺存が悪く、また、外堀外方の立上りは、調査区南部付近では抜根による攪乱で破損がひどく、遺存が悪いが、東部付近では比較的良好な状態で検出することができ、ほぼ直線的な状況であることが明らかとなった。

一〇月一二日からは覆土の除去と並行し、堀底の精査を進め、溝や土壙を発見したが、内堀と同様耕作に係る可能性の大きいものが大半で、内堀で発見されたSD003と同様な溝は発見されなかった。一五日には覆土の除去を終えた。

外堀覆土中からの遺物の出土量は内堀と比較すると少ないが、調査区内西部の堀底からは、中位以上を失った円筒埴輪が潰れて細片となった状態で出土。付近の中堤は遺存が良くないが、推定では約八〇センチメートル程の距離であり、かつて、中堤に樹立されたものが転落した状況と推察された。

一〇月一七日には外堀の発掘を終え、中堤部分の精査に移った。調査区西半部は抜根と思われる攪乱により破損され、方形、円形の井戸と思われる土壙もあったが、覆土の様子から古墳に係るものではなく、また、中央付近で発見された、外堀方向に「コ」字に配された箱薬研の溝（SD017）は比較的深いものだが、ガラス瓶、アルミ銭等が出土、ごく新しい時期のものであった。結局、中堤は、東の部分の上面部分の遺存が比較的良いだけで、両肩、裾部の破損がひどく、全体に遺存の悪い状況が明らかとなった。

一〇月一九日には中堤の精査も終了し、同二〇日には地上から、二四日には航空機より写真撮影を実施した。写真撮影後、二五日より二九日まで実測図の作成作業を行い、三〇日には実質的調査を終了した。

一二月六日からは調査区の埋戻し作業に着手した。調査区全体に遺構保護用の川砂を約十センチメートル厚に敷き、一三日から重機を使用し調査排土で埋戻した。

こうして、一二月一六日には埋戻しを完了し、調査用の資材等も撤収し、四ヶ月半に及んだ、発掘作業を全て終了した。

（杉崎　茂樹）

Ⅲ　遺跡の立地と環境

鉄砲山古墳は埼玉県行田市埼玉（さきたま）に所在する埼玉（さきたま）古墳群に属する前方後円墳である。江戸時代から明治・大正に至るまで「御風呂山」と呼ばれていた。昭和一〇年代には、旧忍藩の砲術練習場になっていたことに由来するとして「鉄砲山」の名称があらわれ現在に至っている。墳丘は後円部西側から鞍部の裾が土取りされているが他は良好に残っている。埼玉古墳群内では二子山古墳、稲荷山古墳に次ぐ三位の軸長をもち、全長一一二㍍、後円部径五六㍍、同高さ九、〇㍍、前方部幅七三㍍、同高さ一四・六五㍍、主軸方向角は座標北―三三・五度―東である。墳丘内部の調査は行なわれていない。

埼玉古墳群は、北関東地方の赤城・榛名・妙義の山地と秩父山地に囲まれた利根川中流域の低地帯に立地する。その位置は、後世武蔵国と呼ばれた地域の北辺になる。埼玉県北部の利根川右岸一帯は北西―南東へ傾斜する沖積低地であるが、行田市周辺以東は加須低地と呼ばれ、大宮台地北部が沈降して沖積面下埋没した埋没ローム台地や自然堤防、河畔砂丘、後背湿地などの地形が多く認められる。[註1] 埼玉古墳群地域も、現在は標高一八㍍の低平地であるが、地表下にローム層が確認される。現在の水田地帯にも古墳が埋没していたり、[註2] 古墳時代集落が発見されるなど、[註3] 当時の地形状況は、かなり異っていたと思われる。遺跡の埋没例や関東造盆地運動による地盤沈下を考えても、埋没ローム台地の微高地は、当時はかなりの高燥地と考えてもよいであろう。

埼玉古墳群の主体は、前方後円墳八基、大形円墳一基と小円墳を含む地域である（第1図参照）が、分布は更に南北に広がっている。[註4] 奥の山古墳南側から武蔵水路にかけて小円墳と前方後円墳らしい大人塚（ウシ）が知られ、中の山古墳の東側に、地籍図から前方後円墳らしい戸場口山古墳がある。稲荷山古墳から二子山古墳にかけての空間地に麿梅塚・ボッチ山・天王山・天祥寺裏・山宮古墳他の小円墳がある。稲荷山古墳の北東部一帯に白山古墳（径三〇㍍）、神明山古墳（周堀外径四五㍍、航空写真による）などの中形円墳や小円墳（跡）、更に白山古墳北方に径四〇㍍程の円丘（古墳か？迅測図による）があったらしい。稲荷山古墳北方の旧忍川は後世の開削で、これらは地形的には同一平地と考えられる。

このように、古墳跡と推定されるものも含めて、前方後円墳一〇基（推定二）、円墳三八基前後の総数五〇基程度の古墳が一・五×〇・八キロ㍍の範囲に広がっていたことが知られる。しかし、古墳群の主体は大形古墳が集中する東西六〇〇㍍、南北九〇〇㍍の地域である。ここに現存する前方後円墳については、前方部の向きを一定にし、主軸の方向角、形態、規模がいくつかの群に分かれることが指摘されている。[註5] 今までの調査で前方後円墳で長方形周堀をもつ例が、稲荷山、鉄砲山、愛宕山の各古墳で確認され、二子山もその可能性がある。また、堀を含めると相互にかなり密接していることが知られる。発掘調査により、五世紀末には築造されていたと考えられ稲荷山古墳の南側空間地で六世紀前半の小古墳が調査されている。[註4⑧] 今までの調査では、稲荷山古墳が最も古く、以後南側に継続的に作られていることが推定される。東・南側に同一平地をもちながら、分布域が散在せず、密接しているのは高

1 埼玉古墳群
2 若王子古墳群
3 若小玉古墳群
4 小見古墳群
5 斉条古墳群
6 酒巻古墳群
7 新郷古墳群
8 羽生古墳群
9 佐間古墳群
10 鉄砲山古墳
11 若王子古墳
12 八幡山古墳
13 愛宕山塚古墳
14 荒神山塚古墳
15 地蔵塚古墳
16 小見真観寺古墳
17 虚空蔵山古墳
18 とやま古墳
19 酒巻1号墳
20 大稲荷1号墳
21 毘沙門山古墳
22 真名板高山古墳
23 小針鎧塚古墳
24 大日塚古墳
25 袋・台遺跡、古墳
26 小針遺跡
27 陣場遺跡
28 鴻池遺跡
29 武良内遺跡
30 高畑遺跡
31 長野神明遺跡
32 長野中学校々庭遺跡
33 星宮皿尾遺跡
34 池守中里地区遺跡

第1図　鉄砲山古墳の位置とその周辺の遺跡

度な規制があり、計画、規格性を認めてよいであろう。将軍山古墳は甲冑、銅鋺、装飾大刀、金銅装馬具、蛇行状鉄器、金製玉類、須恵器などを出土した。[註6] 全長一〇一・五㍍の前方後円墳で、七世紀前後には作られていたと考えられ、墳形なども新しいタイプである。したがって大形前方後円墳は六世紀代に集中して作られ、なお七世紀前後にも一〇〇㍍級の前方後円墳をもつという特色がある。辛亥銘の金象嵌銘文をもつ鉄剣や鏡、勾玉、帯金具の他、豊富な武器、武具、馬具、工具類などを出土した稲荷山古墳の他は主体部出土品が知られるのは将軍山古墳のみであるが、これらを含めた大形墳の形態、規模、密接分布など、埼玉古墳群の特異性は極立っている。

埼玉古墳群周辺には、低平な同一平地でありながら最遠でも三・五キロ㍍程度離れ、大形前方後円墳を含む特色ある古墳群が近接して存在する。

若王子古墳群は、埼玉古墳群の東方約一キロ㍍にあり、前方後円墳一、小円墳一〇が知られている。若王子古墳は現存しないが、全長九五㍍、後円部高七、四㍍の前方後円墳であり、幅二、七㍍の横穴式石室内に石棺があり、鏡、甲冑、刀剣類、馬具、須恵器などが出土したと伝えられている。[註4] 六世紀後半の古墳と考えられる。小円墳も現存しないが、六世紀前半のものが調査されている。[註7]

若小玉古墳群は埼玉古墳群の北方約二キロ㍍にある。八幡山古墳や地蔵塚古墳が現存するが、かつては前方後円墳があり、全長七二・五㍍、高さ五・四㍍の愛宕山塚古墳や荒神山古墳の他に数基の円墳があったとされている。[註8] 八幡山古墳は直径七四㍍の大形円墳で、旧地表上三・七㍍の高さを床面とする全長一六・七㍍の三室構造の大形横穴式石室をもつ。銅鋺、漆棺片と付属金具、装飾大刀、銀製弓弭金物・須恵器などが検出され七世紀後半に比定されている。[註8] 地蔵塚古墳は線刻壁画をもつ横穴式石室があり、一辺二八㍍の方墳である。[註9] 若小玉古墳群は地割から前方後円墳らしいもの（五五㍍程度）を含めて前方後円墳三、円墳六、方墳一の構成で、六世紀後半頃に成立し、七世紀後半の新しい時期にまで継続していたと考えられる。

小見古墳群は埼玉古墳群の北方三・五キロ㍍にあり、前方後円墳二、円墳二が現存する。小見真観寺古墳は全長一一二㍍の前方後円墳で後円部と鞍部に緑泥片岩一枚石使用の横穴式石室がある。鞍部石室から銅鋺、甲冑、鉄鏃、装飾大刀などが発見されている。[註10] 隣接して虚空蔵山古墳があり、全長四〇～五〇㍍の前方後円墳と推定され埴輪片が出土している。[註11] 小見真観寺古墳は七世紀後半代とされてきたが、年代を引き上げる考えも出されている。[註12] 七世紀前後には前方後円墳が成立していたと考えられる。

以上は埼玉古墳群とその周辺に近接する、大形前方後円墳を含む古墳群の概要である。年代の不明な部分もあるが、特に六世紀後半から七世紀前後の大形前方後円墳の存在や、八幡山古墳のような巨大石室をもつ大形円墳（埴輪はない）、地蔵塚古墳のような方墳の存在は注目される。出土品も鏡、銅鋺、甲冑、装飾大刀、金製玉類、蛇行状鉄器、銀製弓弭金物、漆棺片などの特色ある遺物が検出されている。若王子古墳石室と八幡山古墳石室の石材使用法と加工法が類似するという指摘[註12]や漆棺は畿内の出土例から高貴な人や政治的に高位の人の墓に使用されるという指摘もある。[註13] このように特色ある古墳が近接していることは、埼玉、若王子、及び若小玉、小見古墳群が相互に全く独立して築造されたとは考えにくい。古墳分布とその被葬者一族の勢力範囲との関係は明らかになっていないが、これらは行田市東方古墳群としてその動向が探られるべきものと考えられる。しかし埼玉古墳群の特色は、六

世紀初頭前後から七世紀前後まで継続し、相互に密接して、計画的大形古墳が作られていることである。しかも大形古墳集中分布地域外も大小の円墳が群在して広い地域が古墳分布地としてまとまっている。このような古墳分布は後世武蔵国と称された地域では唯一であり、行田市周辺地域のみを支配した豪族の奥津城とは考えられない。埼玉、若王子、若小玉、小見の各古墳群を一体として考える所以であるが、古墳分布からは七世紀代に変動がある。若小玉古墳群の八幡山古墳は大形墳丘、巨大石室や漆棺の存在など極めて注目すべき内容をもつ。埼玉古墳群が主体を占めていた大形古墳造営の系統は、最も新しい時期には隣接の若小玉古墳群の八幡山古墳で終る。

なお行田市東方の四古墳群の他にも古墳が多く存在する。真名板高山古墳[註14]は全長九〇・五㍍の前方後円墳で埴輪が検出されている。利根川に近い地域に酒巻・斉条古墳群がある。酒巻一号墳[註15]は全長四九㍍の前方後円墳で埴輪列が巡り、横穴式石室から須恵器が出土しており、七世紀代に比定される。隣接する、とやま古墳[註16]も全長六九㍍の前方後円墳で六世紀初頭に比定される。羽生市内にも全長六三㍍の前方後円墳（毘沙門山古墳[註17]）がある。六世紀前半の円墳としては大稲荷一号墳[註18]や大日塚古墳[註19]がある。

県北部の利根川右岸の沖積低地帯には熊谷・行田・羽生・加須の各市域に古墳群が多く認められる。利根川の氾濫を受け易い地域であることは、以後の沖積層が厚いことで知られるが、古墳時代にあっては生産性の高い地域であったと考えられる。左岸の群馬県側は上毛野地方の古墳密集地域が続いている。利根川中流域は東山道域にあたり西方文化の回廊でもあり、行田市周辺は下毛野と房総地方への交通路の分岐点にもあたる。以上の諸要素は埼玉古墳群の成立と発展の背景である。

（小久保　徹）

註1　堀口萬吉、他『埼玉県市町村誌第20巻』埼玉県教育委員会　昭和五五年
註2　『斉条五号墳発掘調査報告』行田市教育委員会　昭和三十九年
註3　『小針遺跡の調査A地区』行田市教育委員会　昭和五一年
註4　①　埼玉村地籍図　②　明治一七年測量迅測図（行田町）　③　柴田常恵、他「埼玉村古墳群調査表」　昭和一〇年　④　高木豊三郎『史蹟埼玉』昭和一一年　⑤　『埼玉県史第一巻』　埼玉県　昭和二六年　⑥　昭和四三年撮影航空写真　⑦　『埼玉県遺跡地図・地名表』　埼玉県教育委員会　昭和五〇年　⑧「天王山・梅塚古墳他周堀発掘調査概要」『資料館報№6』　埼玉県立さきたま資料館　昭和五〇年　⑨　『野合遺跡・原第Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　行田市教育委員会　昭和五四年　⑩　『埼玉県埋蔵文化財発掘調査年報昭和五六年度』　埼玉県教育委員会　昭和五八年
註5　①　『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会　昭和五五年　②　増田逸朗「辛亥銘鉄剣出土古墳の概要と埼玉古墳群」『考古学ジャーナル一〇一号』　昭和五七年
註6　柴田常恵「武蔵埼玉郡将軍塚」『人類学雑誌二〇―二三一号』　明治三九年
註7　「愛宕通遺跡」『年報四』埼玉県埋蔵文化財調査事業団　昭和五九年
註8　『八幡山古墳石室復原報告書』　埼玉県教育委員会　昭和五五年
註9　「地蔵塚古墳」　『新編埼玉県史資料編二』　埼玉県　昭和五七年
註10　「小見真観寺古墳」『文部省史蹟調査報告第七輯』文部省　昭和一〇年
註11　「虚空蔵山古墳」　行田市教育委員会　昭和五九年
註12　小川良祐、他「各地域における最後の前方後円墳―埼玉古墳群周辺地域―」『古代学研究第一〇六号』　昭和五九年
註13　中里寿克「八幡山古墳出土漆棺断片」　註10文献に同じ
註14　田中一郎「真名板高山古墳」『埼玉県指定文化財調査報告書第一集』昭和五一年
註15　栗原文蔵「行田市酒巻古墳群について」『埼玉県地域研究会発表要旨』昭和四四年
註16　柳田敏司、他『とやま古墳』昭和四二年
註17　『古墳調査報告書北埼玉地区』埼玉県教育委員会　昭和三八年
註18　栗原文蔵、他　「大稲荷古墳群について」『埼玉考古一一号』昭和四九年
註19　『大日種子板石塔婆および古墳の調査』行田市教育委員会　昭和五三年

Ⅳ 調査の成果

一 遺構

(一) 前方部西側調査区(昭和五四年度)

昭和五四年度の調査区は、前方部の北西コーナー北側の墳裾及び周溝部分の確認を目的として実施したものであり、調査対象面積は約二二〇平方メートルであった。鉄砲山古墳の周溝については、かつて昭和四三年に前方部北方地区等にトレンチを数本設定し、ごく小規模な調査を実施した経緯があるが、周堀の状況は判然とせず、二重の周堀を具体的に確認したのは、昭和五四年度の調査が最初である。

先述したとおり、昭和五四年度は、瓦塚古墳の周堀についても調査を実施しており、その兼合いもあって本、鉄砲山古墳の調査面積は約二二〇平方メートルと小規模なものとなり、墳丘裾と道路沿いにかけての三角形の部分を調査区とした。なお、調査地付近は草地となっており、標高は約一八・四㍍であった。

周堀及び中堤

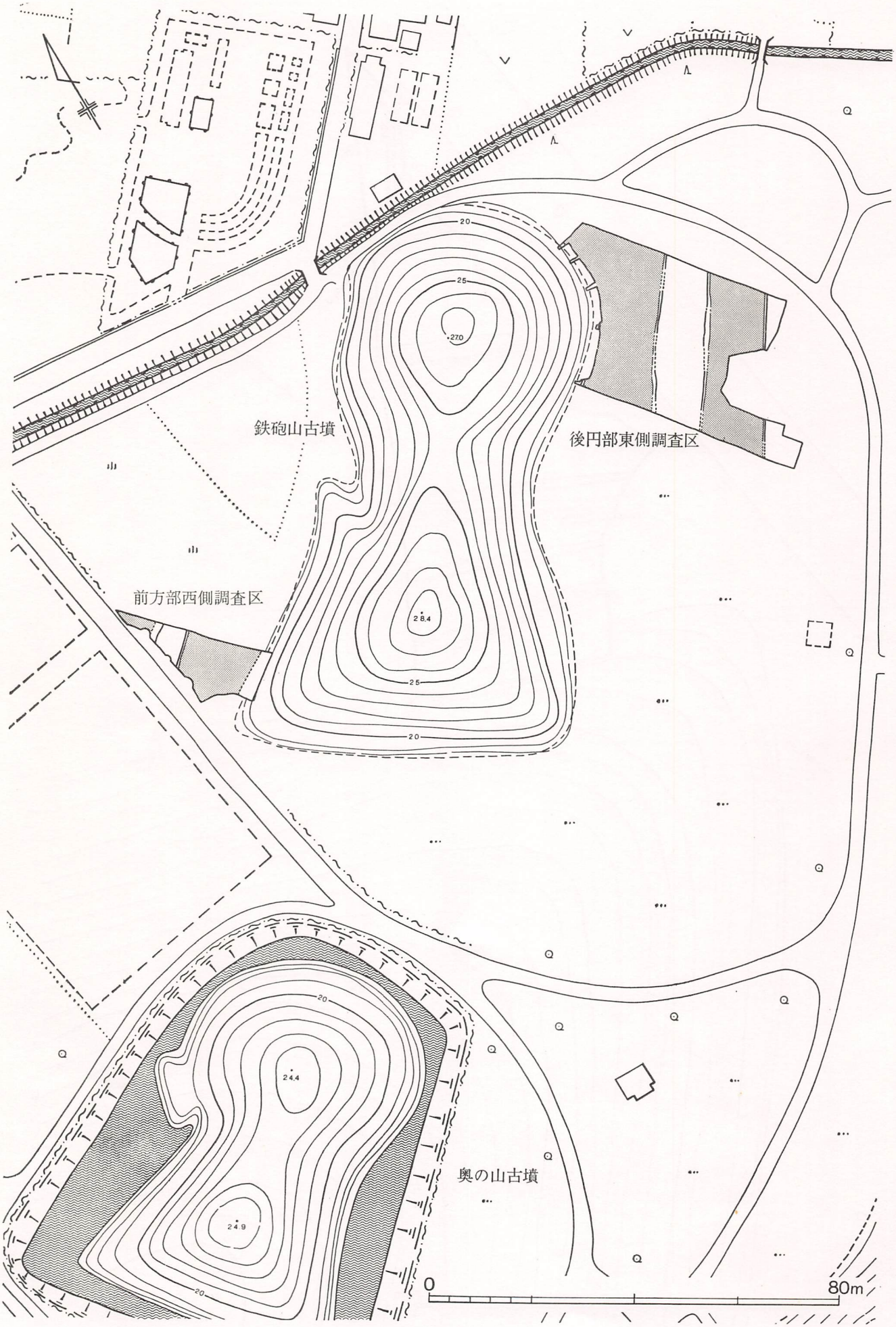
内堀(SA)は調査区東南側の約半分の範囲で確認された。幅は、調査区北壁の部分の堀底で一四・六㍍を測る。立上りの状況は、墳丘側では約三〇度、中堤側は上方でやや屈曲し傾斜は弱まるが、約六〇度の角度で立上がっている。外堀(SC)は調査区内北西の狭い範囲で確認したが、外側の立上りまでは確認できなかった。各堀の深さについては、中堤上面(ローム検出面)から、内堀で六〇～九〇センチ、外堀で七〇～八〇センチを測るが、内堀は中堤寄りがふくらみを持つように、また、墳丘寄りの部分はなだらかに浅くなる傾向が認められるが、その他の堀底では部分的に十数センチ程度の凹凸があるものの、極端に段が付いたりする部分はない。外堀は中堤寄り約三㍍の部分は外方とごくわずかな段を有し、序々に浅くなる傾向が認められる。

内、外堀の覆土の状況(第4図)は、検出面以下、約二〇センチの厚さでやや粘性のある褐色土、その下に約三〇センチの厚さで少量のローム粒を含む暗褐色土、最下層は有機物やロームブロックを含む暗褐色土、又はロームブロック、ローム粒を多量に含む茶褐色が堆積しているのが標準的な状況であった。

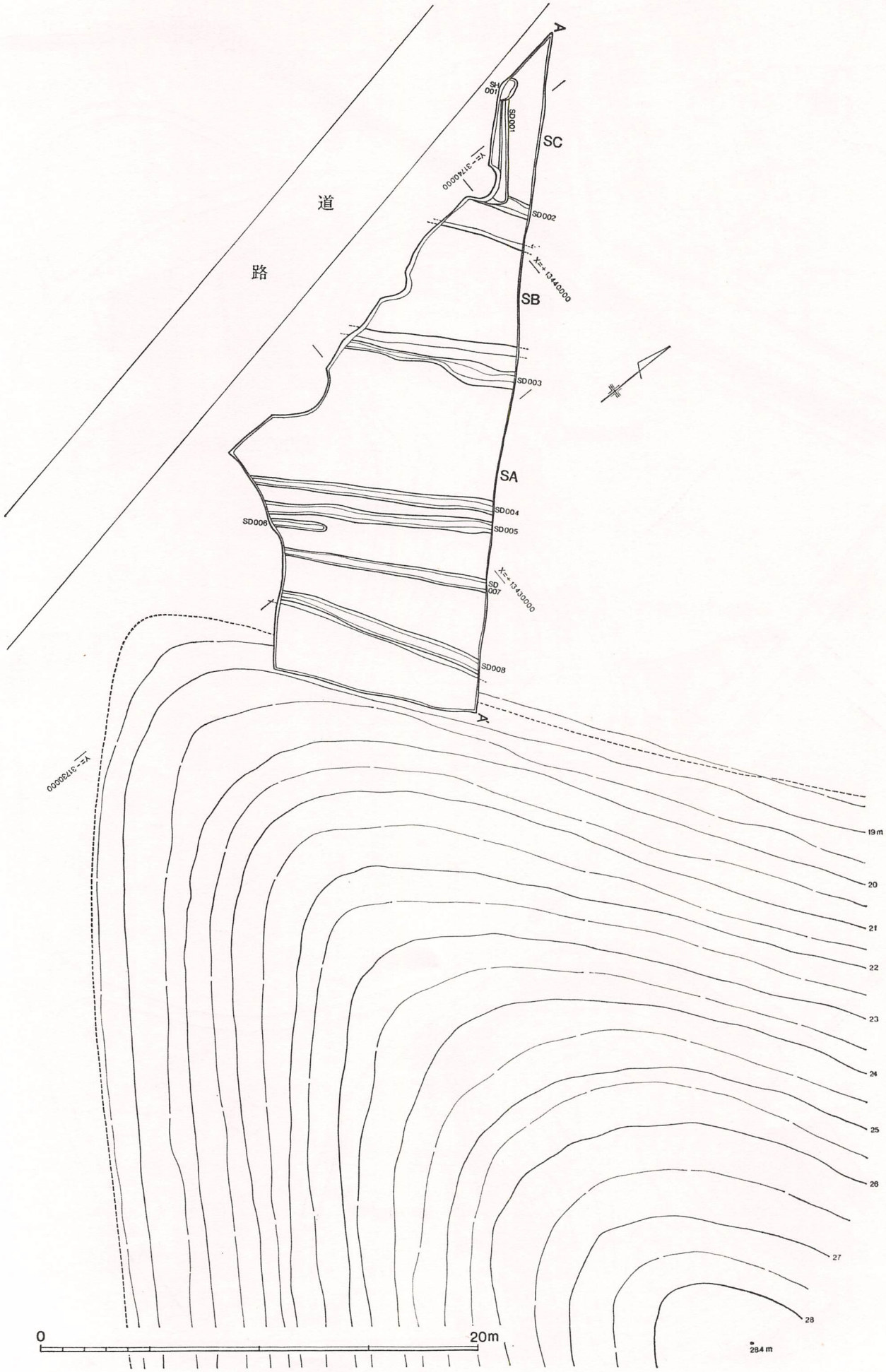
中堤(SB)は検出面で幅五㍍、基部で七・五㍍であるが、後円部東側(昭和五八年度)調査区での中堤の検出幅とは大分差があり、内堀底の中堤寄りの部分がふくらみを持つような状況や外堀底の中堤寄りの部分がわずかに段差を持ち浅くなることは、中堤が崩壊し、本来的な形状でないことを物語っている可能性もある。

その他の遺構

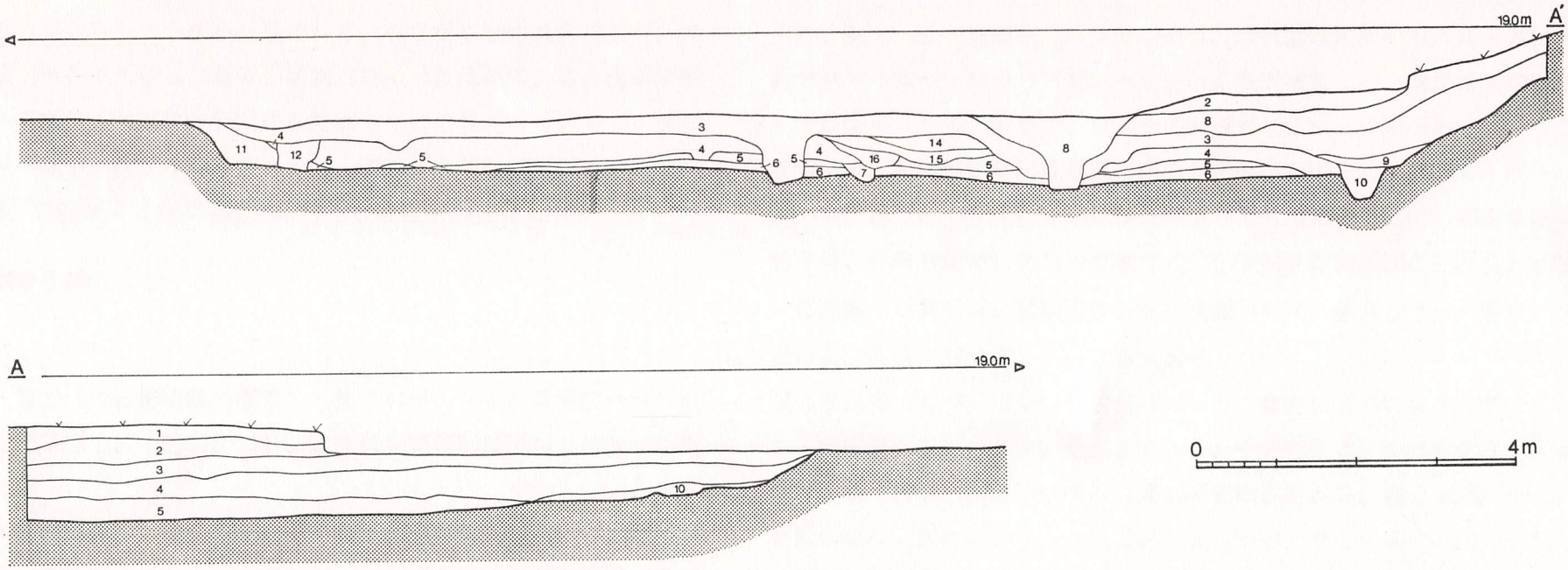
周堀及び中堤以外の遺構では、小規模な溝(SD)があり、内堀底から六基(SD003～008)外堀底から二基(SD001～002)合計八基が発見された。(SD008)は直線的で四五～六五センチの幅を持ち、深さは二〇～三〇センチ墳裾寄りの内堀底で発見されたものだが、根切溝等の可能性がある。その他、(SD003)は幅が狭いところで三〇センチ広いところで一・三㍍を測り、ごく浅いものである。その他、SD001～002等は、検出面での幅は五〇



第２図　前方部西側調査区及び後円部東側調査区の位置（１／1000）



第3図　前方部西側調査区全測図



1．暗褐色土(表土層)
2．褐色土(耕作土、多量の砂粒を含む)
3．褐色土(少量の炭化物を含む、粘性あり)
4．暗褐色土(多量のローム粒を含む)
5．暗褐色土(黒色の有機質、わずかなロームブロックを含む)
6．茶褐色土(ロームブロック、ローム粒を多量に含む。中堤の崩壊土か)
7．暗褐色土(ローム粒を含む)
8．褐色土(墳丘表土及び耕作土下部層)
9．茶褐色土(ローム粒をわずかに含みしまりを欠く)
10．茶褐色土(有機質を多く含み粘性あり)
11．黄褐色土(多量のローム土を含む。中堤の崩壊土か)
12．褐色土(有機質を含む均質土)
13．灰褐色土(多量の粘土を含む)
14．褐色土(砂粒、ローム粒を含む)
15．褐色土(砂粒、ローム粒を含む。やや粘性あり)
16．褐色土(ローム粒を含む)
(砂粒、ローム粒、粘土を含む)

第4図　前方部西側調査区東壁土層断面図（1／80）

センチメートル前後で、直線的なあり方を示しており、深さは検出面から、深いもので五〇センチメートル、浅いもので数センチメートルである。

以上、溝についてはいづれも、周堀覆土中から掘り込まれたものが周堀底に達したものであり、その時期は一定しておらず、直接古墳に関連する可能性はほとんどない。

(二) 後円部東側調査区(昭和五八年度)

後円部東側の調査は、かつて実施した昭和五四年度の前方部西側の調査で、鉄砲山古墳が二重周堀を有することが確実となったが、それが稲荷山古墳など同様、長方形の平面形態なのか否かを確認するのを主目的として実施したものである。

調査対象面積は約一、一〇〇平方メートルで、調査地付近は芝地となっており、標高は約一八・四メートル(前方部西側と同様)であったが、かつては陸田として利用されていた。

周堀及び中堤

内堀(SA)は調査区の墳丘側約三分の一の範囲で確認された。

堀底に達する溝や土壙が各所に発見され、内堀と近い時期と思われる溝もあるが、多くは耕作土と同様な灰色系の粘質土あるいはロームブロックを含む黒色土を覆土とするもので、耕作や開墾に係ると判断され、特に調査区南半部分に多かった。こうした溝や土壙のため、全体的な遺存状況は決して良好とはいえなかった。また、中提(SB)の立上り部分も、これらの溝、土壙の他、自然の崩壊によるものか、遺存も良くないが、全体的に見れば、ほぼ直線的な状況が看取され、後述するが、外堀(SC)の内外各立上り部分も同様で、その直線的な状況を併せ考えれば、盾形、周溝であれば湾曲を描いてしかるべき部分の調査区であるので本古墳の周堀が二重かつ長方形であると判断するに十分な状況であると言える。

墳丘側の立上りについては、墳裾部に設定した五基の小規模なトレンチ(1〜5 Tre)により確認を試みたが、根切溝と思われる溝に破壊されている部分もあり、4、5 Tre内では比較的良好に検出できたが、1〜3 Tre内では明確にできなかった。

内堀の幅については、中堤と後円部間の最も狭くなる部分の堀底で約一〇、七メートルを測る。深さは、ローム検出面(中堤上面)から、深い部分で約八〇センチメートル、浅い部分で約六〇センチメートルで、調査区内東の部分は、他の部分より一〇センチメートル前後浅くなっており、中堤付近では、中堤に向い、ゆるやかに浅くなる傾向が認められる。こうした状況はあるが、極端な段差は認められず、全体的には、ほぼ平坦と言ってよい状況であった。

内堀覆土の状況は、調査区の西壁で観察した(外堀についても同様)。上部には、各所で厚さは異なるが最高六〇センチメートル芝地整備の際の山砂など砂岩の客土が存在し、その下に陸田の耕作土と思われる粘土が約三〇センチメートルの厚さで存在する。さらにその下には灰茶褐色及び灰褐色土が、それぞれ一五〜二〇センチメートルの厚さに堆積しており、これから下が本来的な堀の覆土である。この二層をまとめ覆土上層としたが、その下では暗灰茶褐色土、及び黒灰色土が存在し、覆土下層土を形成している。また、最大層の黒灰色土には部分的にローム粒を多量に含む部分が見受けられた。以上が標準的な堆積状況であるが、各所に大小の攪乱坑の落ち込みが認められた。

外堀（SC）は調査区の東～南部にかけて確認された。内堀と同様の溝や土壙が見られるが、数は少なく、堀底の遺存状況は内堀に比べ良好と言える。中堤側の立上りは、溝による破損の他、内堀同様、自然に崩壊を起こしているものと思われ、遺存は良くない。外堀の外側の立上りも調査区南部で、抜根と思われる攪乱坑により遺存状況は良くないが、東部では比較的良好に遺存していた。

外堀の幅は堀底で約一〇・六㍍で各部分ほぼ一定しており、内堀の後円部との最も狭い部分及び中堤基部の幅の数値と近似する数値である。

外堀の深さは検出面（中堤ローム層上面）から五〇～六〇㌢を測り、調査区東半部分でやや浅くなり、また、内堀と比較すると、最高一五㌢程浅くなっている。中堤寄りは内堀と同様、わずかにゆるやかに浅くなる傾向が認められ、外側立上り付近でも、なだらかに浅くなっており、部分的に膨らみを持つように浅くなる部分が認められ、やや粗雑な掘り込み方の部分がある。

なお、外堀の外方部分は発掘できた面積はわずかであったが、埴輪等の樹立痕は検出されなかった。

外堀の覆土は客土及び耕作土が上部にあり、その下が本来的な覆土となっている。上から灰褐色土覆土上層、暗灰茶褐色土、黒灰色土覆土下層の順となっているが、内堀では覆土上層の上半分を形成していた灰茶褐色土は見当らず、また、各所に攪乱坑や溝、土壙がかかり、良好な状態で堆積状況を観察できる部分は少なかった。

中堤（SB）表土から浅い位置に存在するためか、溝や土壙により、かなり破壊を受けている。内堀側肩部は少なくとも五回程度の掘り直しの認められる溝（SD001）があり、北の部分では抜根と思われる攪乱坑も存在する。外堀側は内堀側ほどではないが、同様に溝（SD014、019）により破壊されており、遺存はよくなく、南の部分は自然崩壊によるものか、基部（立上り部分）のレベルまでロームが失なわれている。中堤の幅は、このような状況であったため、最も遺存状況の良い、調査区中程の基部で一一・〇㍍であった。また、調査区西部中堤寄りの外堀底から転落し潰れた状況で出土した円筒埴輪は、かつて中堤上に樹立されていた可能性を物語るものである。

その他の遺構

周堀及び中堤以外の遺構としては多数の溝（SD）及び土壙（SH）があるが、多くは、耕作土中から掘込まれ、直接古墳と係わりを持つとは思われない。検出された総数は溝約二〇基、土壙約四〇基である。以下、それらのいくつかについて記述する。

発見された溝の中で古墳と近い時期と思われる溝や土壙が何基か存在し注目される。

SD003は内堀の中央に、中堤と平行に発見され、検出面（堀底）での幅約六〇㌢、底面幅約三〇㌢、深さ約三〇～四五㌢で、断面は縦長の逆台形を呈する。調査区内では中堤と墳丘の中ほどにあって直線的な状況であるが東に至ってわずかに中堤側に屈曲気味である。

これは内堀覆土下層と同様の土であり、あまり磨滅の見られない埴輪の大形の破片を出土することから、内堀が土砂で埋まり始める頃にはすでに開削されていたものである。

SD004、006は内堀底の墳丘寄りで発見されたもので墳丘に沿うよう

に弧を描く平面形態を有するものである。ＳＤ００４は検出面での幅約三〇四〇㌢、底面幅一五～三〇㌢、ＨＤ００６は検出面での幅約四〇～五〇㌢で、底面幅は約二〇～三〇㌢、深さは両者ともごく浅い。覆土は、ＳＤ００３と同様、堀覆土下層と同様の黒灰色であり、時期とも同様と判断されるものである。ＳＤ０１１、０１２は調査区の北部内堀底で発見され、ＳＤ００４、００６と同様墳丘に沿い弧を描く溝である。ＳＤ０１１は検出面での幅二〇～六〇㌢、深さは最高一〇㌢で底部に凹凸があり、不整形のピットを伴うようであり、ＳＤ０１２は検出面での幅約四〇㌢、深さは一〇㌢、長さは約六㍍である。ＳＤ０１１、０１２の覆土もＳＤ００３と同様であった。この他墳裾部に設定した１～５Tre内で発見された溝の中には、根切溝に加え、これらと同様の覆土を有するものがあった。

この他、各所で発見された溝は耕作土から掘り込まれており、耕作土と同様の灰色系の粘質土を主体とし、いずれも新しい時期のものと判断され、付近がかって陸田として利用されていたということから、用排水路や井戸跡の可能性の高いものである。

ＳＤ００１は、中堤肩部を破壊して耕作土中から開削されており、少なくとも五回前後の掘り直しが行なわれており、上端の最大幅は約二㍍、平均約一・八㍍で、深さは中堤上面（ローム検出面）から、深いところで一・二㍍のり、ローム層下の乳灰色の粘土層にまで達している。

ＳＤ０１７は上端幅一・三～一・五㍍、底面幅約五〇㌢の断面箱薬研状あ溝を「コ」の字形に三基連結させ、中堤上の外堀側肩部を破壊して配置されている。これも、耕作土中から掘込まれたもので粘土、ローム土をブロック状に含む粘土を覆土としていた。

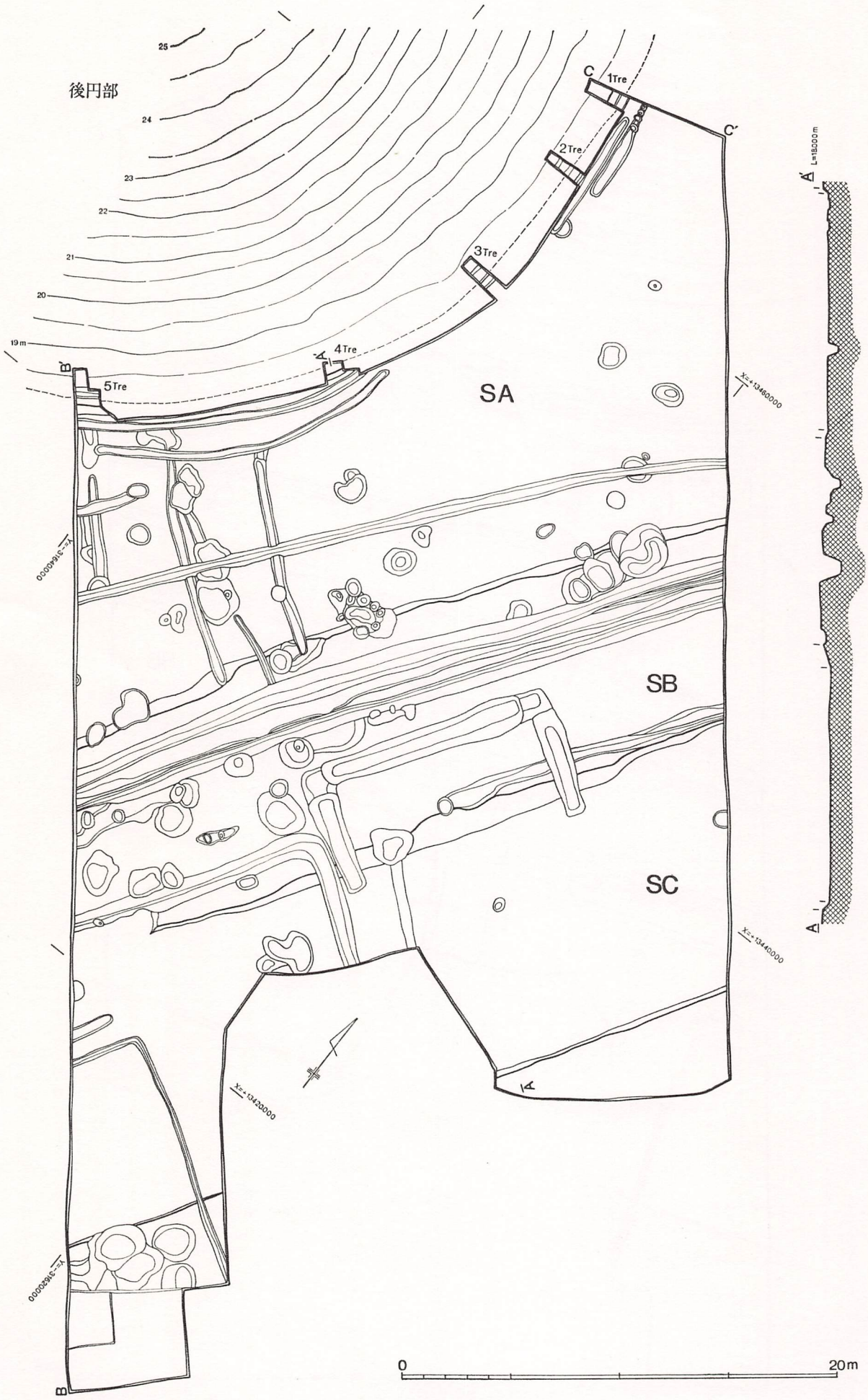
土壙は調査区各所で認められたが、一部の溝のように周堀の時期に近いと判断されるものはごくわずかである。ＳＨ００１、００２は内堀内西部で発見されたもので、ＳＨ００１は長軸長約一㍍の楕円形、ＳＨ００２は直径約一㍍の不整円形である。ＳＨ００５はＳＤ００５と切り合うもので、直径約七〇㌢、深さは六〇㌢である。ＳＨ００８は内堀内、中堤寄りで発見された最大一・五㍍の不整円形でダラダラとした掘込みである。ＳＨ０１１は内堀内東部で発見されたもので長軸長一・五㍍の楕円形の平面プランを有し、深さは約八〇㌢である。覆土は内堀覆土下層に近い色調で、その埋没時期は内堀に近いものと思われるが、埴輪片を出土するので先行する可能性はない。

ＳＨ０１５、０１６も内堀調査区東部で発見された。ＳＨ０１５は直径約八〇㌢の円形で袋状の掘込みであり、ＳＨ０１６はＳＨ００３を切る。

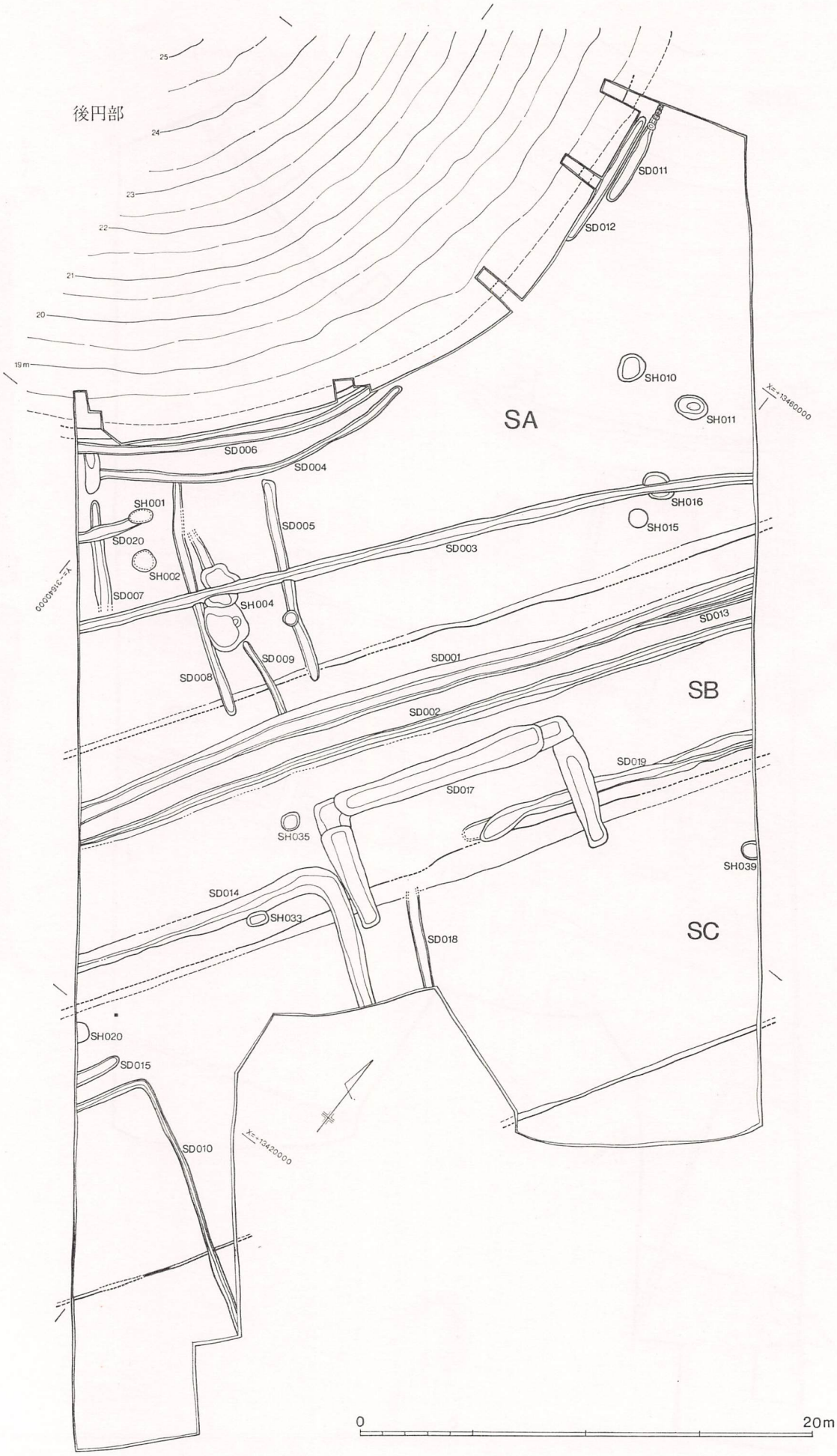
ＨＳ０３５は中堤上で発見されたもので直径約八〇㌢、底径は六五㌢、深さは約一㍍である。ＳＨ０３９は外堀内調査区東部で発見された。直径約八〇㌢の楕円形と思われる。

以上土壙についてはＳＨ０１１を除き大部分が耕作土同様、灰色系の粘土を覆土としており、確実に古墳に関連するものは発見されなかった。

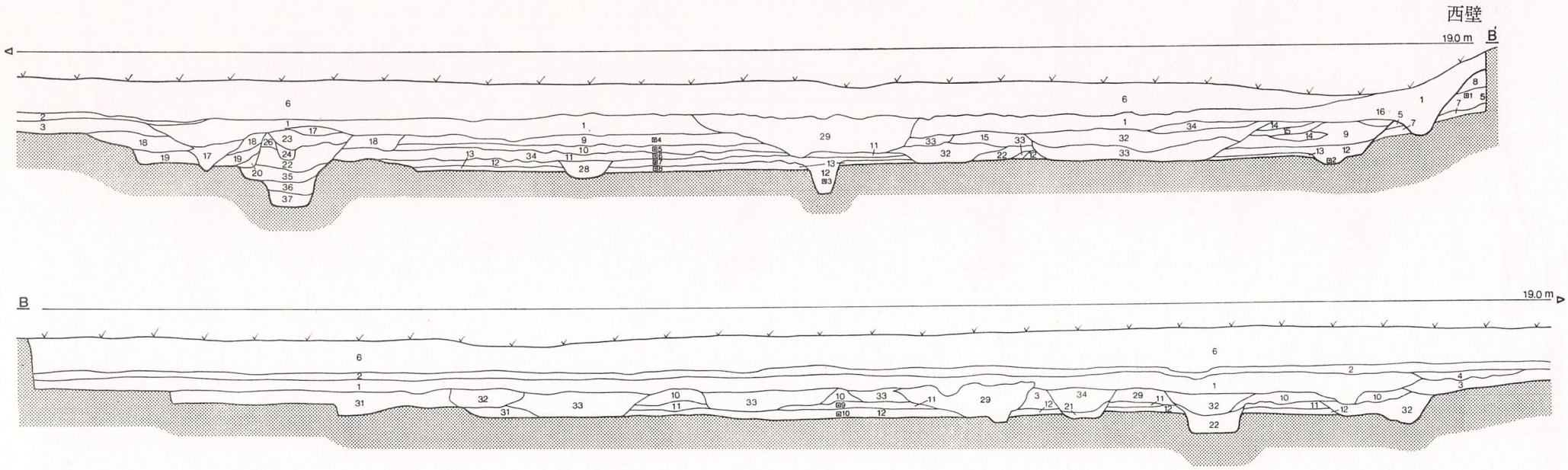
（杉崎　茂樹）

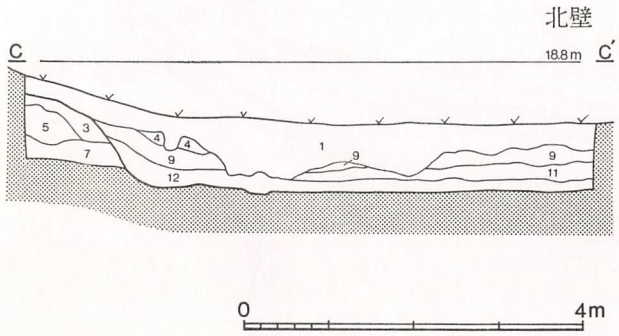


第５図　後円部東側調査区全測図（１／250）



第６図　後円部東側調査区遺構配置図（１／250）

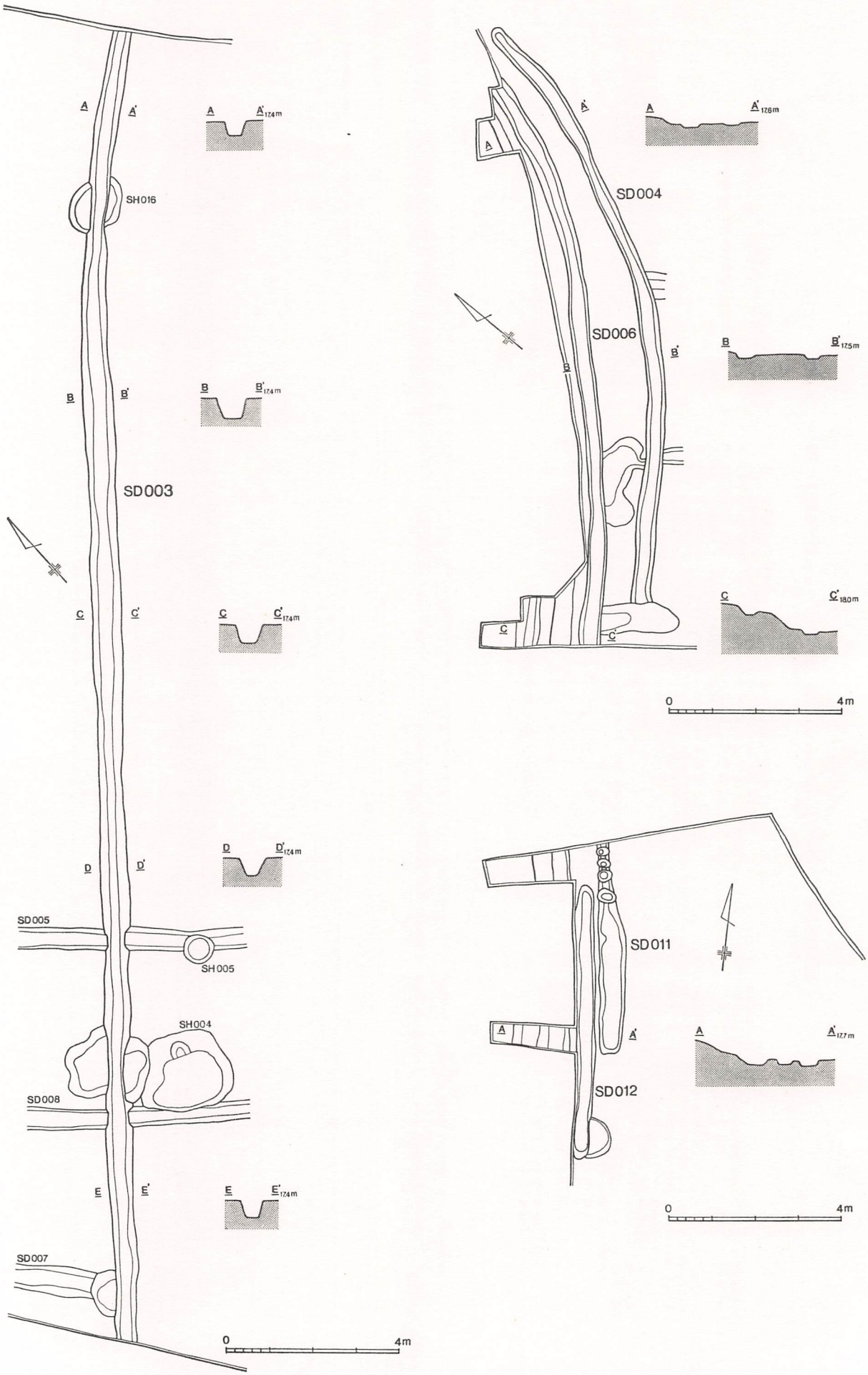




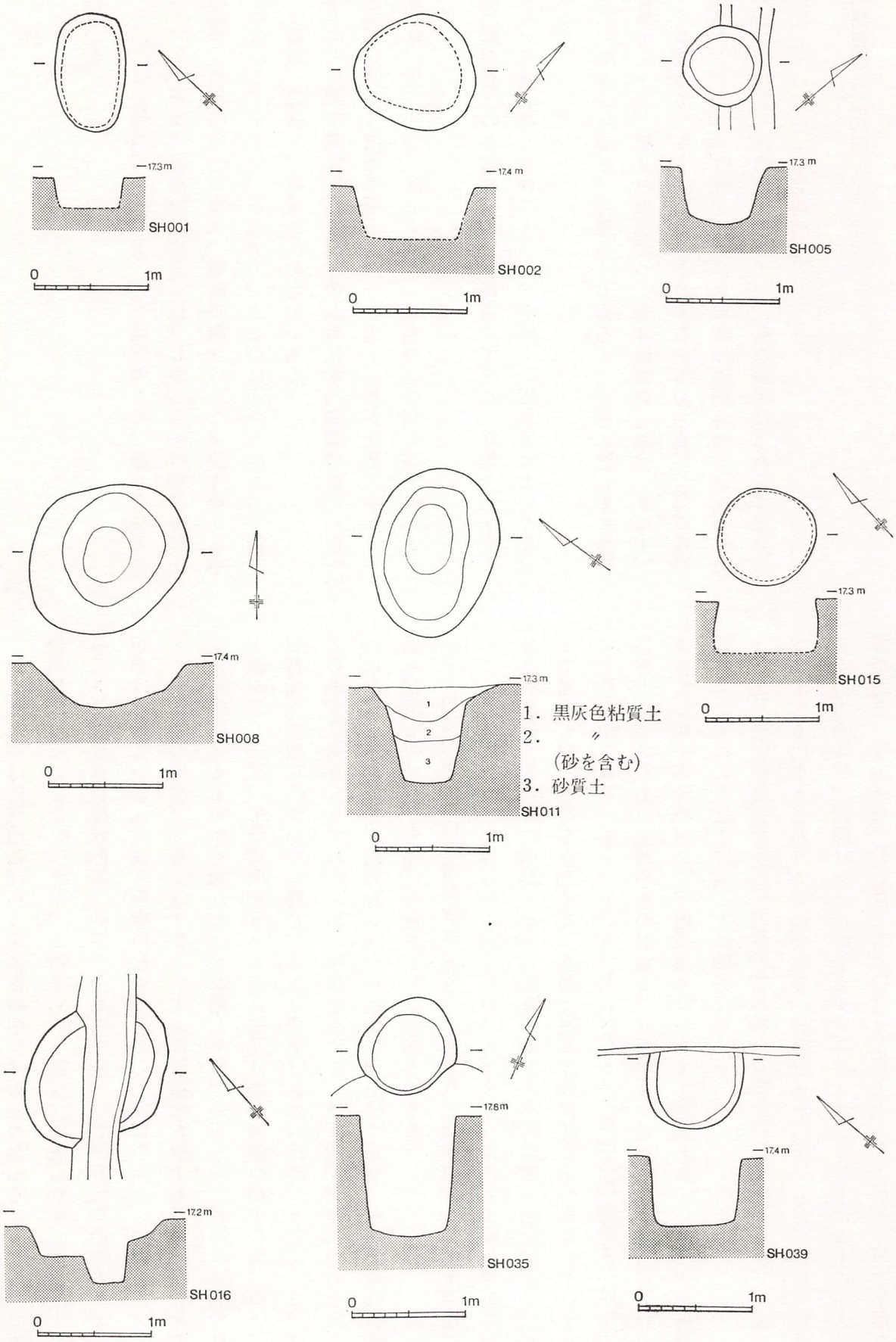
▣：花粉及び胞子、珪藻分析試料採取部分

1．茶褐色ないし灰褐色土（墳丘表土及び旧耕作土）
2．青灰色粘土
3．茶褐色土（ロームブロック、パミス含む）
4．茶褐色土（堅くしまりパミスを含む）
5．黒茶褐色土（墳丘下旧表土、ややしまりがある）
6．客土（芝地造成時に般入されたもので山砂が主体）
7．暗黄褐色土（旧表土→ソフトローム漸移層）
8．茶褐色土（墳丘盛土、ロームをわずかに含みしまりを欠く）
9．灰茶褐色土（周堀覆土上層、しまる）
10．灰褐色土（周堀覆土上層、粘性強くしまる）
11．暗灰茶褐色土（周堀覆土下層、ローム粒を含みしまる）
12．黒灰色土（周堀覆土下層、ローム粒を含み、しまる）
13．茶灰色土（周堀覆土下層、粘質土でローム粒を含む部分あり）
14．灰茶褐色土（多量の粘土ブロックを含む）
15．灰褐色土（暗灰色の粘土を含む）
16．灰茶褐色土（くずれたロームブロックを含みしまりを欠く）
17．灰褐色土（くずれたロームブロックをわずかに含む）
18．灰褐色土（茶褐色土、ロームブロックを含む）
19．灰褐色土（ロームブロックを多量に含む）
20．茶灰色土（ロームブロックを含む）
21．茶灰色土（ロームブロックを多量に含む）
22．灰色粘土
23．淡茶灰色土（しまりを欠く粘質土）
24．茶灰色土（しまりを欠く粘質土）
25．茶褐色土（ロームブロックを含む）
26．暗灰茶褐色土（くずれた灰色粘土を含む）
27．黒灰茶褐色土（くずれたロームブロックを含む）
28．黒灰褐色土（くずれたロームブロックを含む）
29．攪乱土（くずれた粘土を主体とする）
30．攪乱土（大形の粘土ブロックを含む）
31．攪乱土（くずれた粘土、ロームブロックを含む）
32．攪乱土（しまりを欠き、粘土ブロックを含む）
33．攪乱土（しまりを欠き、粘土ブロック、ロームブロックを含む）
34．攪乱土（灰色粘土ブロックを含む）
35．灰茶色土（やや粘性があり、ローム、砂粒を含む）
36．暗灰色土（粘性があり茶褐色の砂粒を含む）
37．暗灰色土（粘質土）

第７図　後円部東側調査区西壁及び北壁土層断面図（各壁面の位置については第５図を参照）



第８図　後円部東側調査区溝実測図（１／125）



第９図　後円部東側調査区土壙実測図（１／60）

二　遺物

㈠　埴輪

前方部西側及び後円部東側両調査区で出土した遺物のうち、最も点数も多かったのが埴輪片、とりわけ、円筒埴輪であった。しかしながら両調査区とも、大部分が周堀部分からの出土であり、埴輪の樹立された可能性のある中堤上に、その痕跡もなく、全てが、墳丘上方、あるいは中堤上にかつて樹立されていたものが破損、転落し、埋蔵されたものである。

前方部調査区では、内堀の墳丘寄りの覆土中から比較的多数の破片が出土、また、後円部東側調査区でも内堀の墳丘寄りでの出土点数が比較的多かったが、これらの破片は、墳丘上方に樹立されていたものが破損し落ち込んだものと理解できる。

また、後円部東側調査区の外堀底、西部中堤寄りで潰れた状態で出土した体部上位以上を欠く円筒埴輪（第16図1）は、中堤上に樹立されていたと思われるものである。

こうした出土状況であったから、完形品はもちろん、完形に近い形に復元可能なものは皆無であった。個々の細部については観察表（38ページ以下）に記したとおりであるので、以下観察表と重複する箇所もあるが、図の番号の順を追って概述する。なお、口縁端部及びタガ部分は例外なくヨコナデで仕上げる（実測図では断面、細線の範囲）ので、観察表ではこれらの部分のヨコナデによる仕上げの記述は一切省略した。

前方部西側調査区（第10図～第15図）

出土したのは円筒埴輪ばかり（多数の中には形象の台部もあろうが）で形象埴輪はほとんどない。また、このうちある程度、形態の判明したのは1のみである。復原口縁径約四〇㌢、上から2段目、3段目に楕円形のスカシがあけられている（比較的形態のわかる上から二段目のスカシは九・五×八・〇㌢の楕円形）。外面はタテハケメ（口縁部は右傾するので、左ききの工人の手によるものかも知れない）を施した後、一一～一二㌢の間隔で粘土紐を貼り付け、その周囲をヨコナデ（範囲は断面図横の細線の間、以下、口縁部等の破片についても同じ）により仕上げタガ（凸帯）としている。タガの断面は偏平でくずれた「M」字形を呈する。口縁部は、体部からなめらかに外反気味に開き、内外をヨコナデにより仕上げており、わずかに凹む端面を形成している。全体に粗雑さが目立つ作りである。

2～15は円筒埴輪口縁部の破片である。4、5、7、8のように1と同様、わずかに外反気味になめらかに開くもの、2、3、9、12のようにわずかに屈曲気味に開くものの二者が大半を占めるが6のように端部が水平に近い位にまで屈曲し開くものも存在する。端面は凹み方の程度に差があるが、いずれにも作り出される。また、6、8、12、15のように端面の両端部または片方が外方に小さく突出気味のものがある。外面のタテハケメは4、5、6、14のように左傾するものがあり、内面はヨコハケメを基調としている。端部内外はヨコナデにより仕上げることに例外はない。

16～67は円筒埴輪体部破片である。スカシの部分の破片があるが、スカシはいずれも円形と思われるものである。外面はタテハケメ（わずかに左傾するものもある）、内面はヨコないしナナメハケメにより仕上げるものが大部分である。タガは18、21、22のように、ごく偏平で、くずれた「M」字形を

呈するものが多いが、17、23、34のようにごく偏平な台形を呈するもの、19、20のように台形の片側（下側）の斜辺が潰れたようなもの、さらに、その延長上の形態と理解したいが、33のように偏平な三角形を呈するものも散見する。

68～86は円筒埴輪底部の破片である。外面はタテハケメ、内面はナナメハケメのものが多いが、71、77、78等は最下部にユビオサエ痕を残す。タガは体部の記述部分で述べた以外の形態のものはないが、最下位のタガと底面間に着目すると、68、71、73などのように八～一〇センチのものや、69、76のように五センチ以下のものなど、バリエーションがある。底面には、69、76、82のように、禾本科植物の茎と思われる棒状の圧痕が残されるものが多い。

後円部東側調査区（第16図～第23図）

後円部調査区では円筒埴輪（1～140）の他に形象埴輪が数点があるが、種類の判明するものはほとんどなく、また円筒埴輪でも、ある程度形態の判明したものは、わずかに一個体にすぎない。

1がその数少ない一個体であり、調査区内西部の外堀底から出土したものである（第16図参照）。復元底径約二八センチ、底部から高さ四四センチ遺存しており、下から三段目に一対の、さらに一段あけ五段目に三段目と対称位置に円形のスカシがあけられている。遺存している部分ら復元すると径は約5センチと思われる。外面はタテハケメを施し、粘土紐を八～一〇センチ間隔に貼り付けヨコナデを行い断面が偏平の「M」字形のタガに仕上げている。内面はナナメハケメによる仕上げ、底面には禾本科植物の茎と思われる棒状の圧痕が残されている。灰～茶褐色を呈しており、茶褐色を呈する。前方部西側出土の第10図1の埴輪とは明らかに形態、胎土、色調の点で異なる。

2～37は円筒埴輪口縁部破片であるが、2～20は内堀覆土内、21～33は外堀覆土内、34～37は堀底の溝覆土内の出土である。

外面は4、7、21のように左傾するものもあるが、タテハケメ、内面はヨコハケメを施し、端部内外をヨコナデして仕上げる。口縁の開き方は、7、8、12のように、わずかに外反気味になめらかに開くもの、3、10、17、36のように小さく屈曲気味に開くものがあるが、その両者の中間的なものもあり、単純に分類しきれない。

端面は、わずかに凹むものが大部であるが、その両端部が4、5、7のように突出気味のものと、3、16、26のように比較的平坦なものもあり、また、10、17のように端面がほぼ平坦で、端部が丸味を持つものなど、処理の仕方にバリエーションがある。

38～120は円筒埴輪体部破片である。39～86は内堀覆土内、38、87～102は外堀覆土内、103～110は堀底の溝覆土内の出土である。外面は57、79のように左右へのわずかな傾斜が認められるものもあるが、タテハケメ、内面はヨコないしナナメハケメを施すのが大部分である。

タガは40、41、42など、ごく偏平で、くずれた「M」字形を呈するものを主体とし、45、46、53のようにごく偏平な台形のものや、50、90のように三角形となるものもわずかにある。

スカシは確認できる範囲では、円形と思われるものばかりである。

111～137は円筒埴輪底部の破片である。111～123は内堀覆土内、124～133は外堀覆土内、134～137は堀底の溝覆土内の出土である。外面はタテハケメ、内面はヨコないしナナメハケメを施し仕上げるが、112、121、124、126のように最下部にオ

サエ痕を残すものも多い。タガの貼付位置は125、132では下端から九㌢の位置であるが、114、126、137は五㌢と、低い位置に付けられている。

底面には棒状の圧痕がほとんど例外なく認められている。

以上、前方部西側、後円部東側の両調査区を通じ、普通円筒埴輪については全容の判明するものが無かったが、各調査区で各一点ずつ出土した比較的形態の明らかなものは、七～八段凸帯の円筒埴輪と思われ、他の破片についても大部分が同様な円筒埴輪の一部と推定される。

この他、円筒埴輪では朝顔円筒埴輪の肩部と思われる破片（138～140）があり、形象埴輪では紐の結び目の表現と思われる部分の破片（141）が外堀から出土している。

(二) 土師器及び須恵器

土師器、須恵器は、出土点数も少なく、図示に耐え得るものも少ない。しかしながら、後円部調査区では小破片ながら器形のある程度判明するものもあり、本古墳の年代等を考定するうえであまりにも資料の少ない現状を踏まえ、やや難は残るが小破片も極力作図、掲載した。

前方部西側調査区（第15図）

土師器は図示に耐えるものがなく、須恵器のみ掲載しておく。87は大形の甕の頸部で、外面に断面四角形の補強用の凸帯が認められる。93は薄い作りで小形の壺と思われる口縁部破片で、櫛描波状文が認められる。88～92は甕の体部破片である。外面は平行タタキメまたは、格子風タタキメが、内面には同心円タタキメが認められる。

後円部東側調査区（第23図）

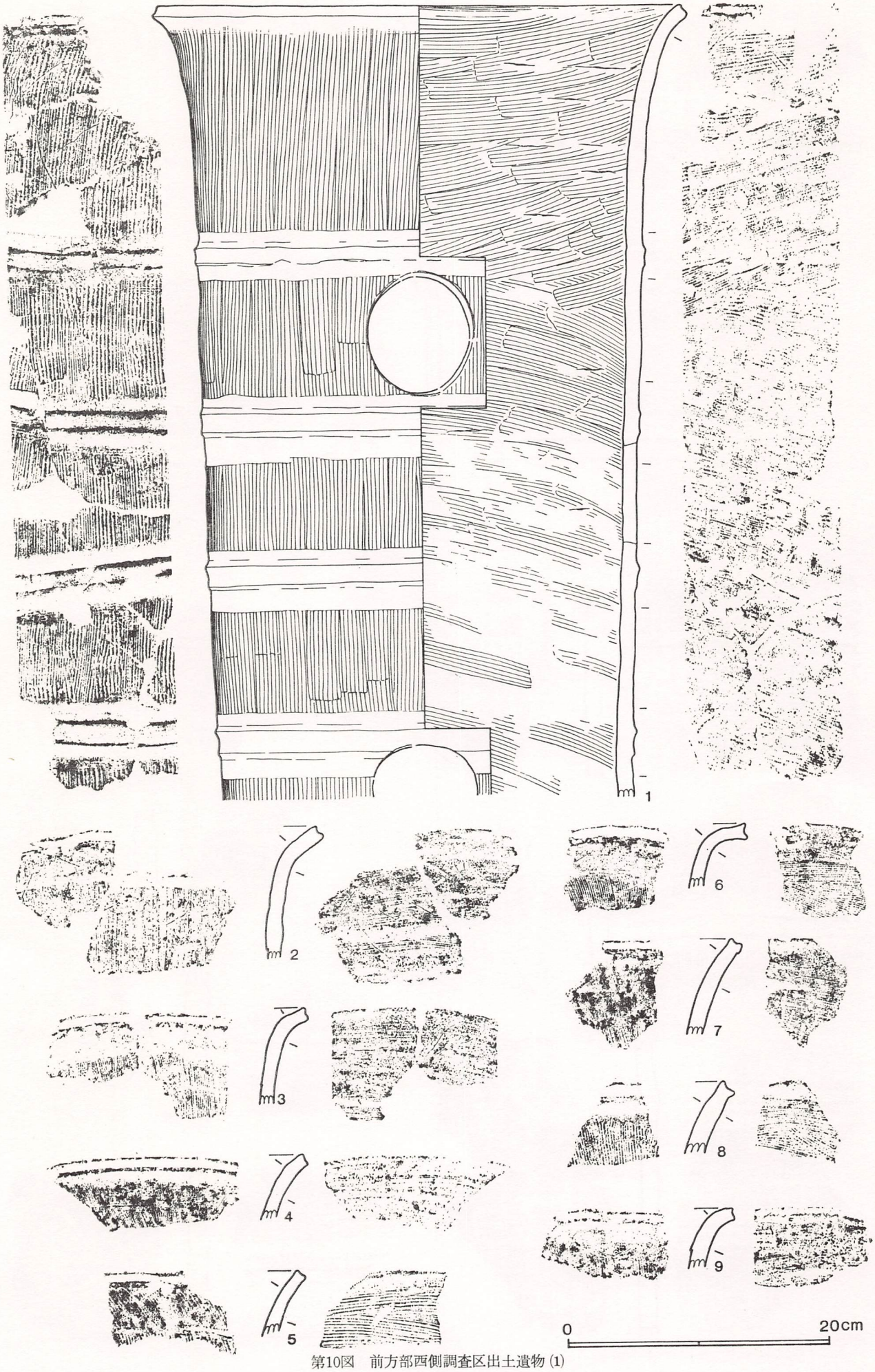
土師器は約十片の破片が出土しただけで、器種の判断するものとして杯や、坩の口縁部と思われるものがあった。142、143は杯の破片で、いずれも内堀の調査区中程の墳裾部分から数㍍離れた堀底より出土したものである。所謂「模倣杯」と呼ばれ、須恵器を模倣し製作されたもので、丁寧な作りで、焼成も良い。復元口縁径はいずれも約一六㌢、高さは約五・五㌢と思われる。

須恵器は比較的多くの破片が出土しているが、大部分は甕の体部である（146～147）。外面は平行タタキメまたは格子風タタキメが施され、内面は例外なく同心円タタキメが残されている。これらのうち外面のタタキメの上に三～四条の平行沈線文が施されるもの（146、153、161）もある。145も甕の口縁部の破片で、外面は無文、内外ヨコナデにより仕上げている。

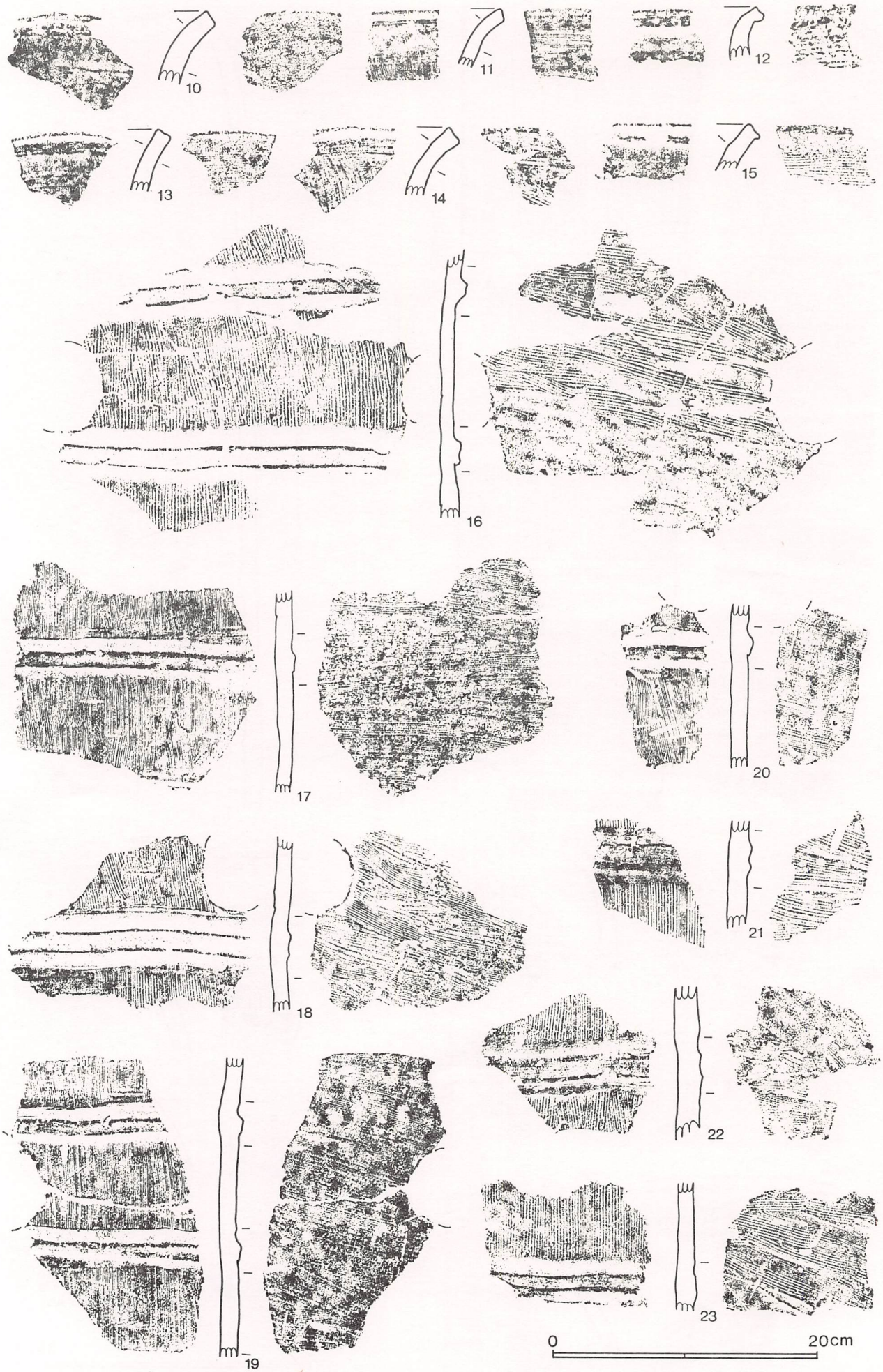
甕の他には小破片であるが杯の破片（144、あるいは高杯の可能性もある）がある。小破片とはいえ、型式がある程度考定できるものである。口縁径は約一三・五㌢と推定される。

以上、須恵器については、大部分が内堀覆土内の出土である。

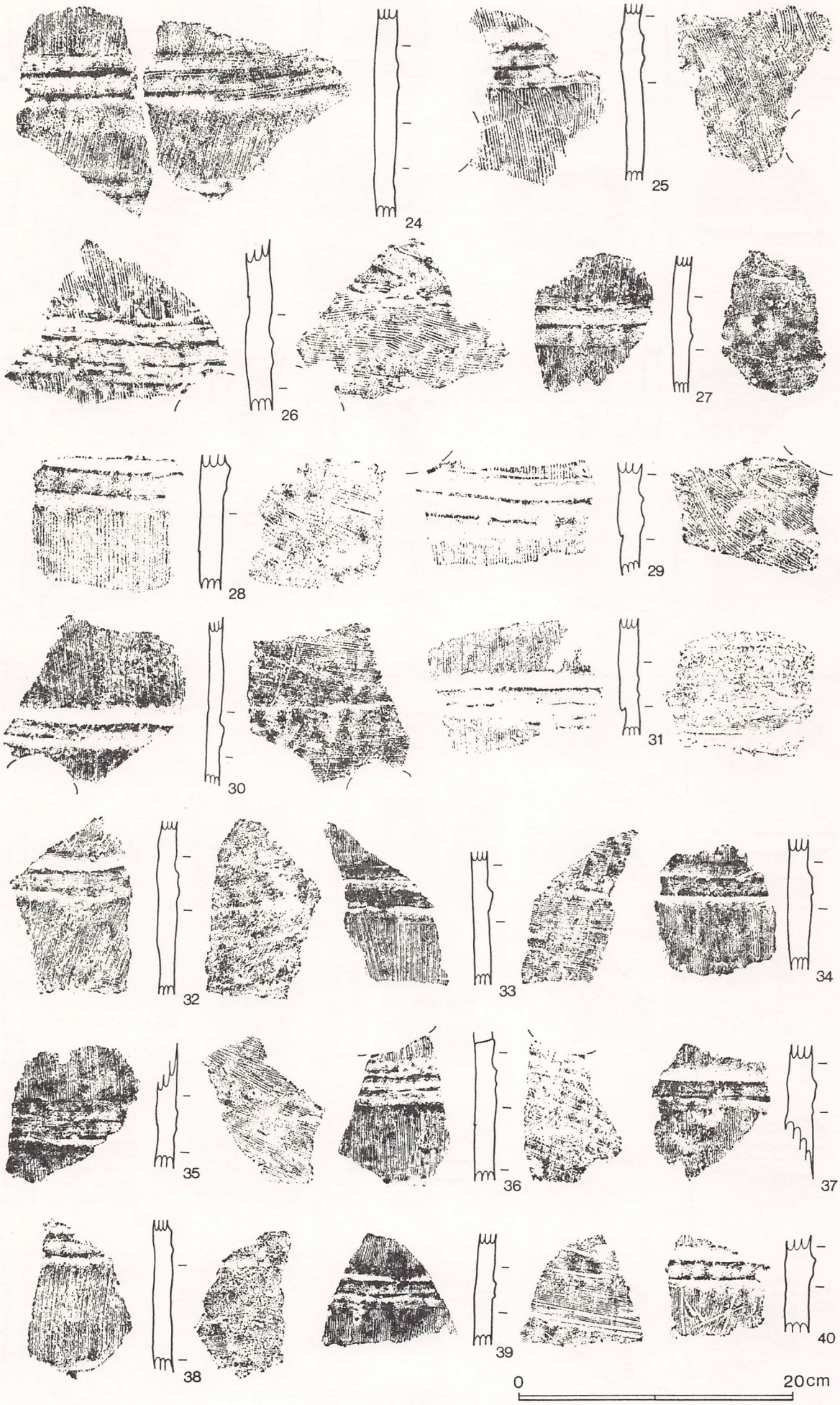
（杉崎　茂樹）



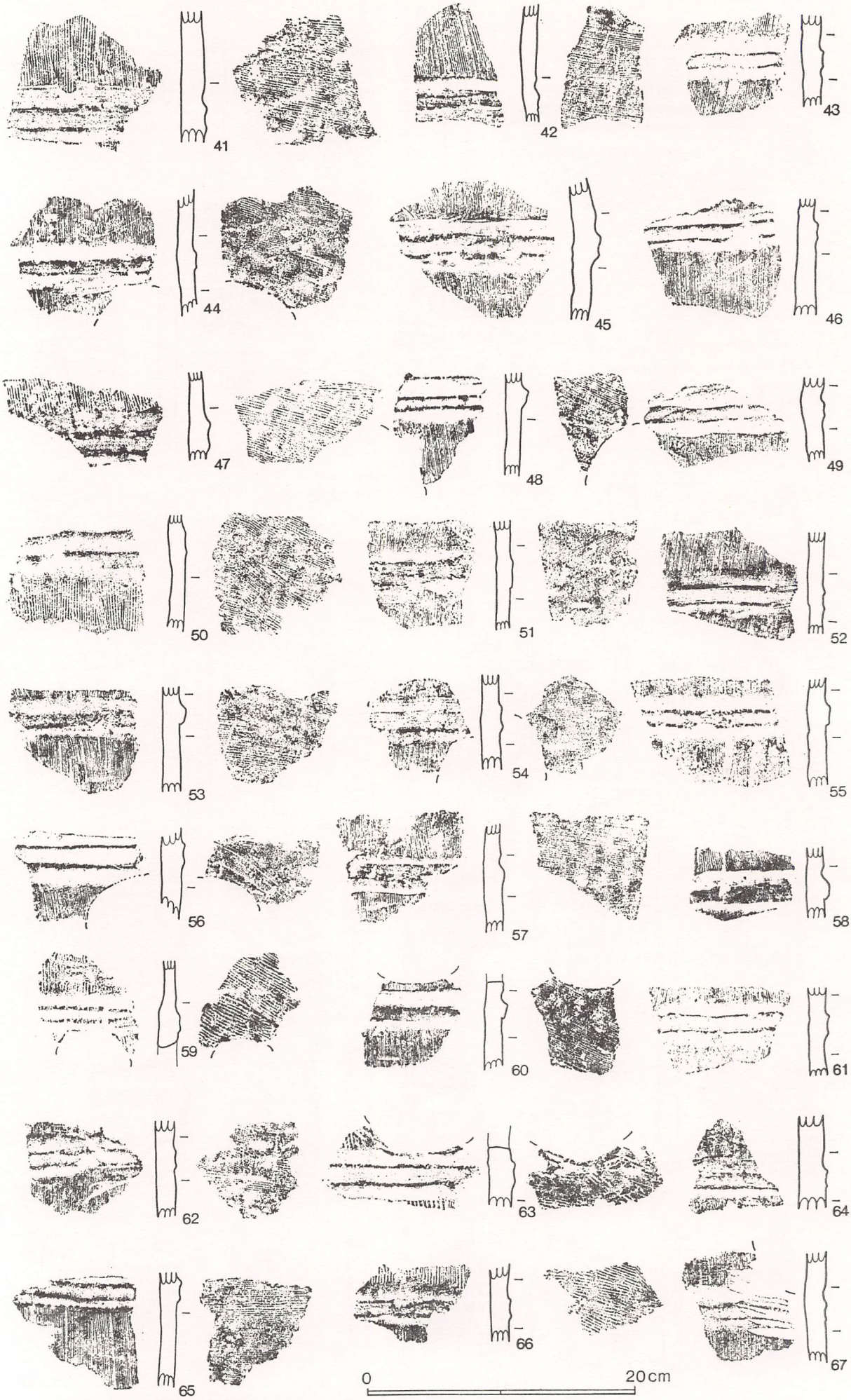
第10図　前方部西側調査区出土遺物 (1)



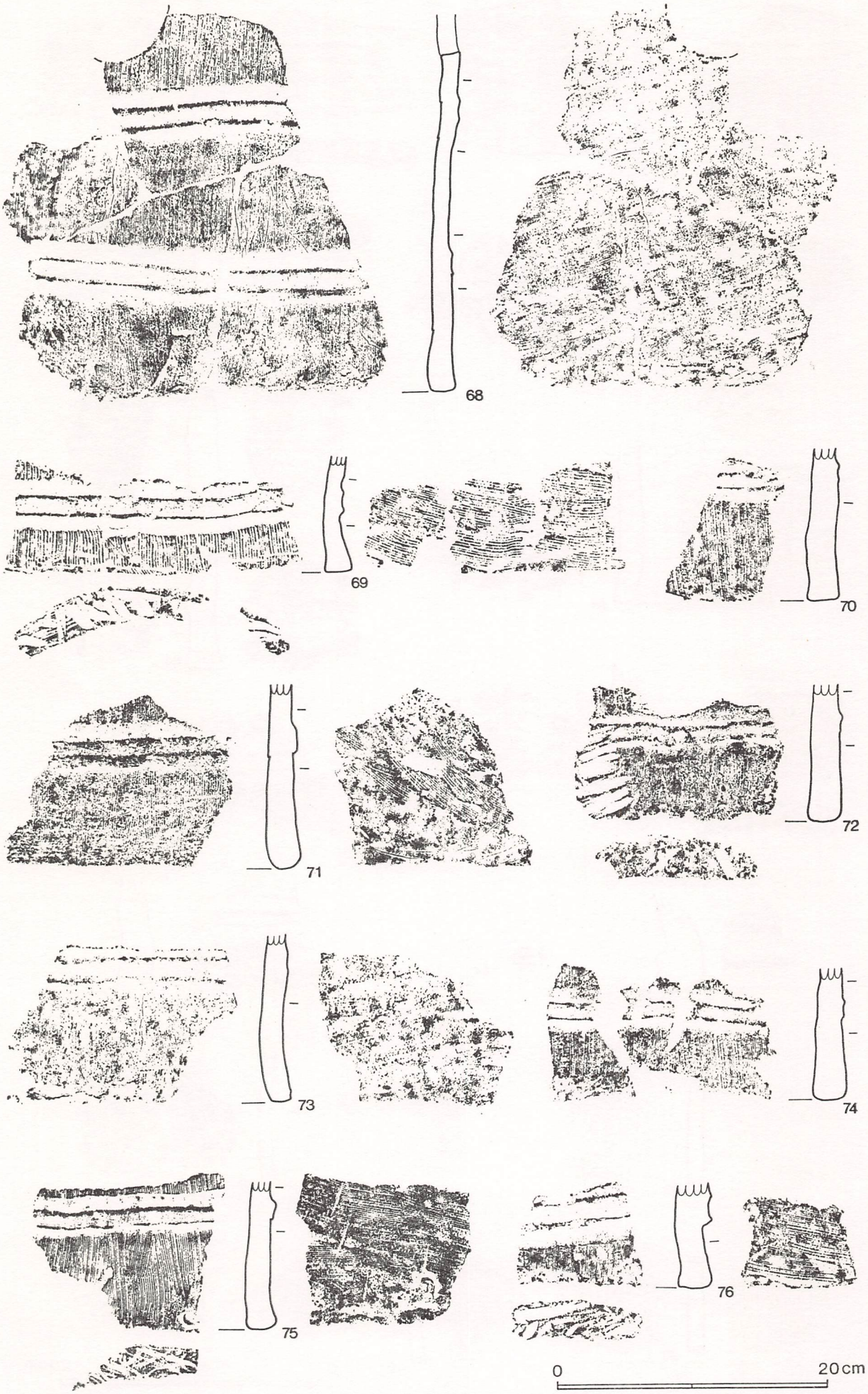
第11図　前方部西側調査区出土遺物 (2)



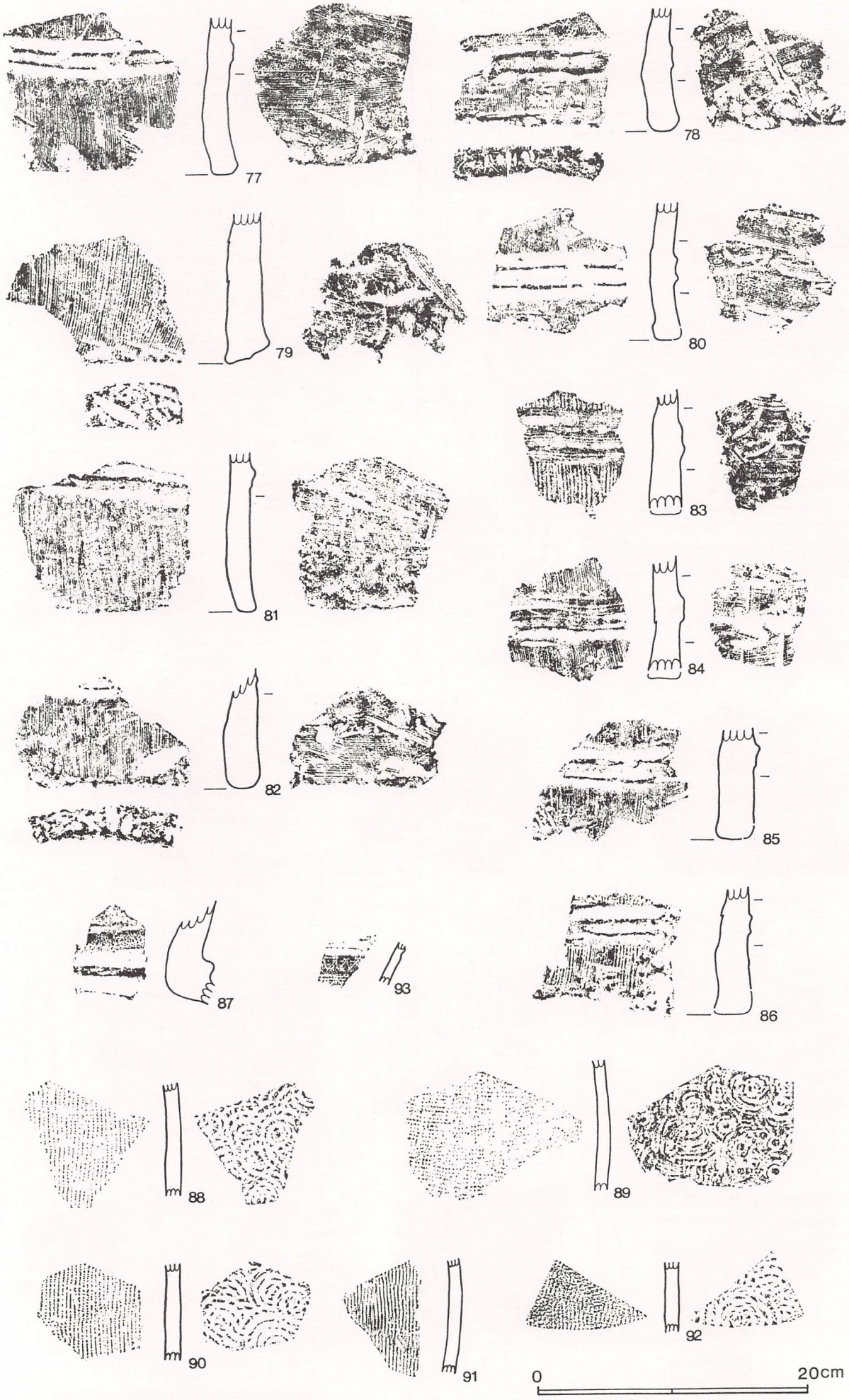
第12図　前方部西側調査区出土遺物 (3)



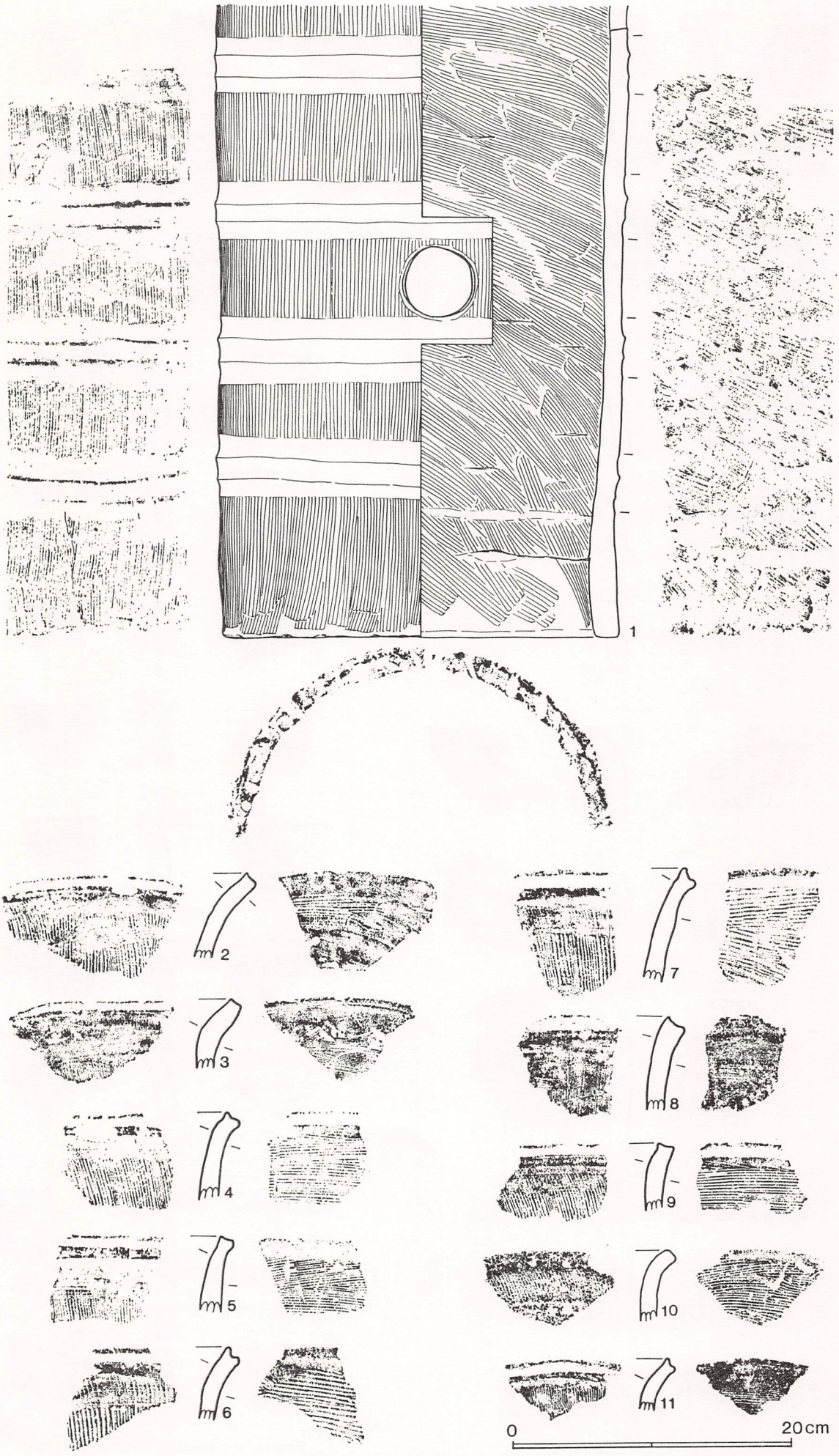
第13図　前方部西側調査区出土遺物 (4)



第14図　前方部西側調査区出土遺物 (5)

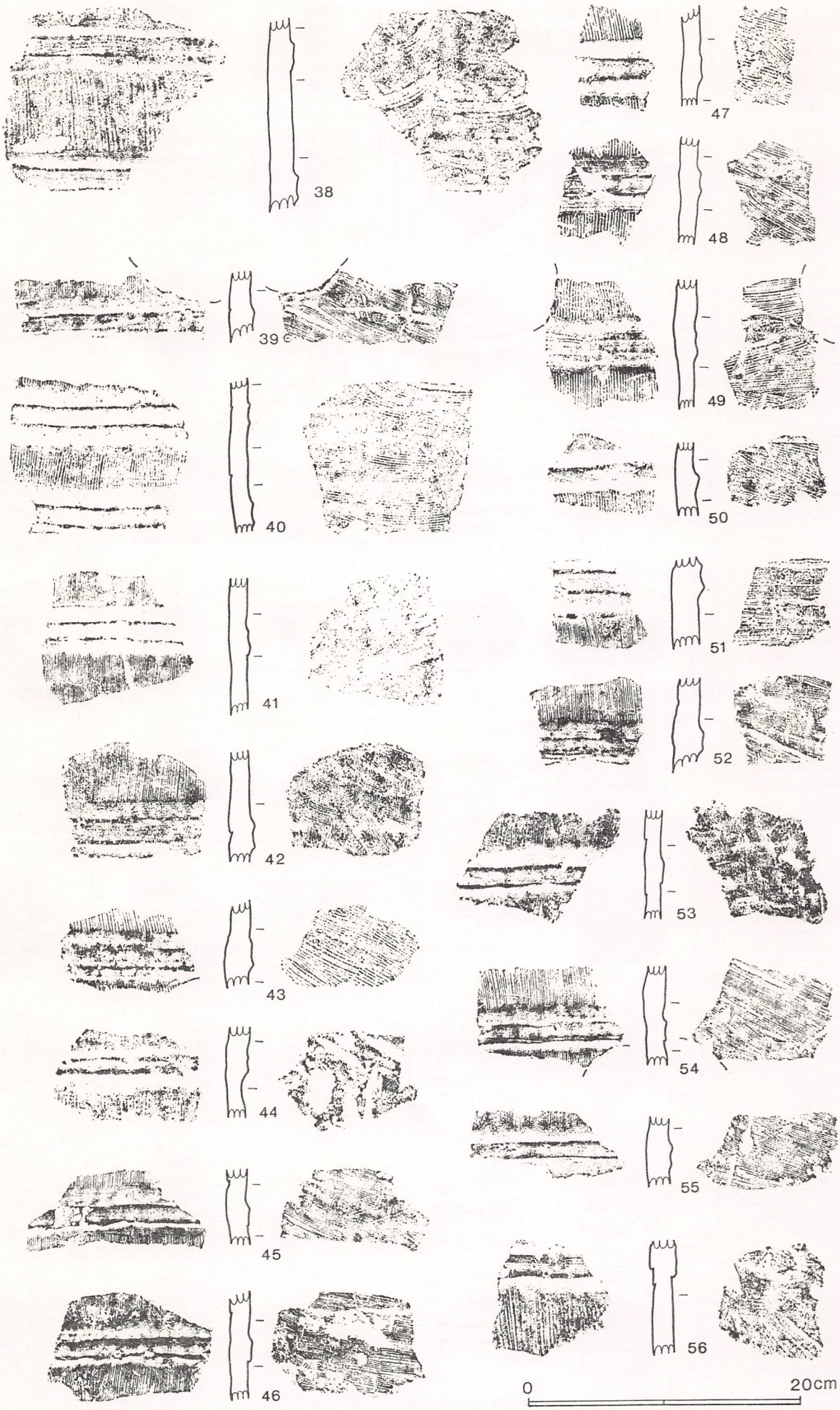


第15図　前方部西側調査区出土遺物 (6)

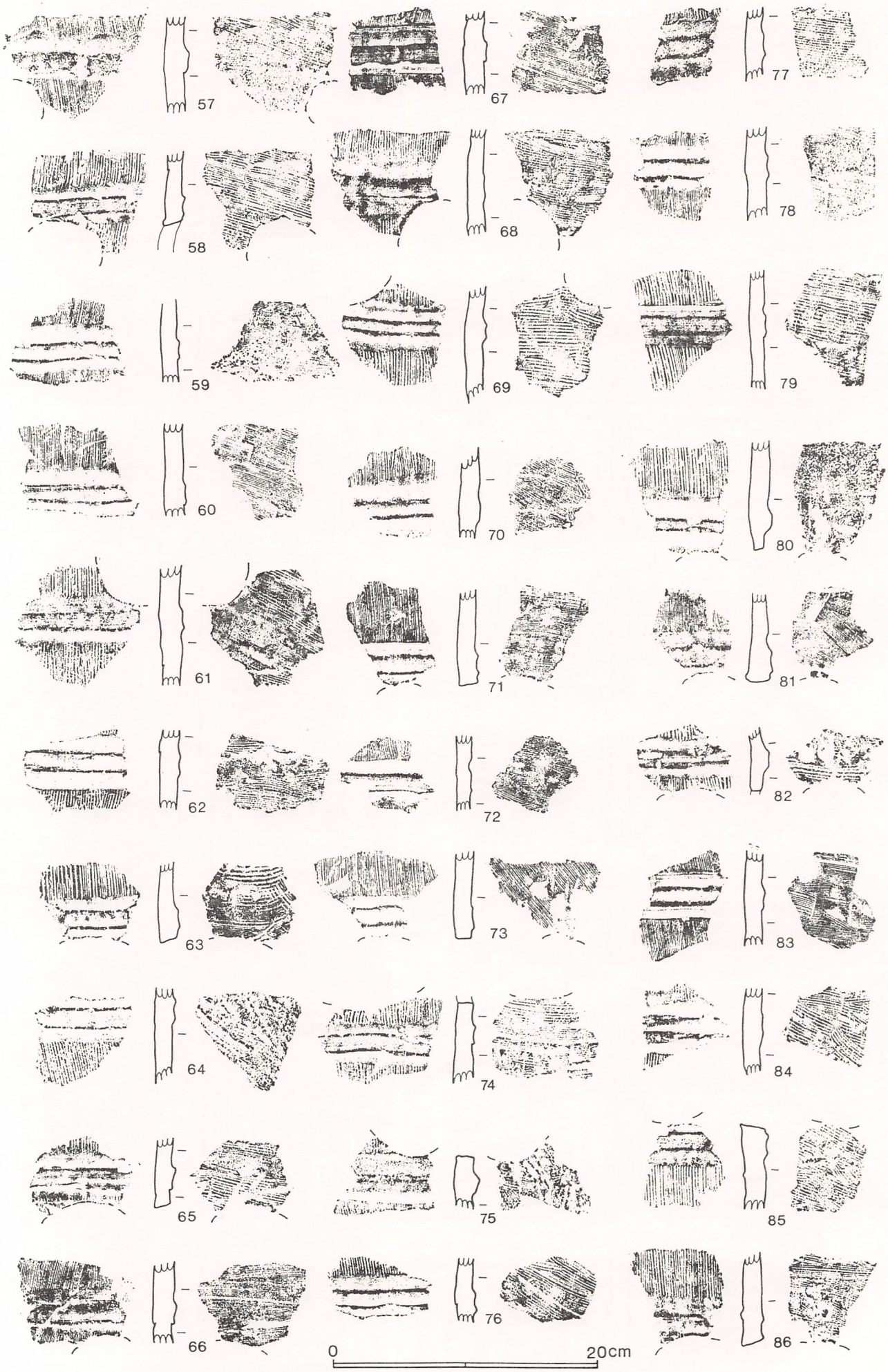


第16図　後円部東側調査区出土遺物 (1)

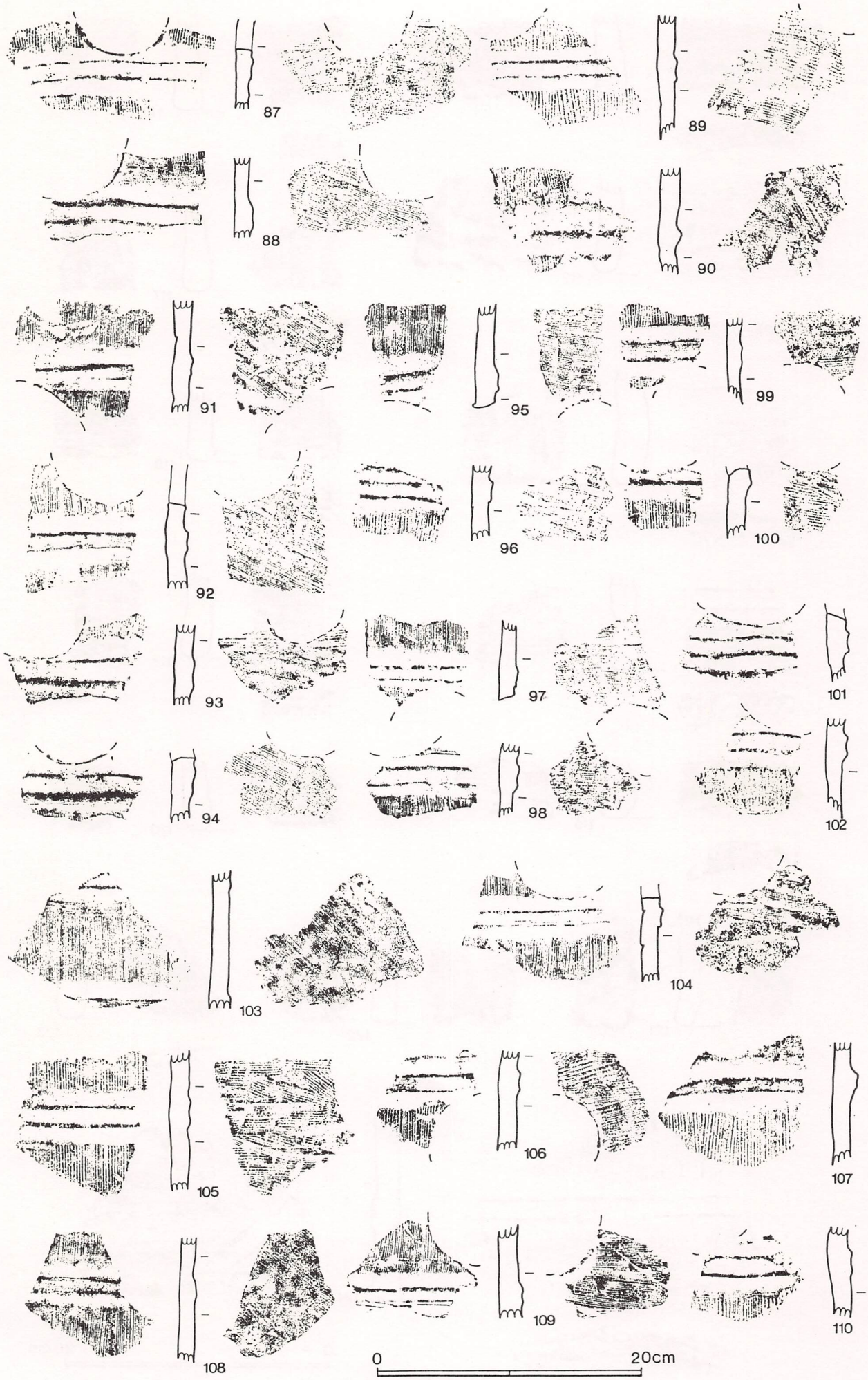
第17図　後円部東側調査区出土遺物 (2)



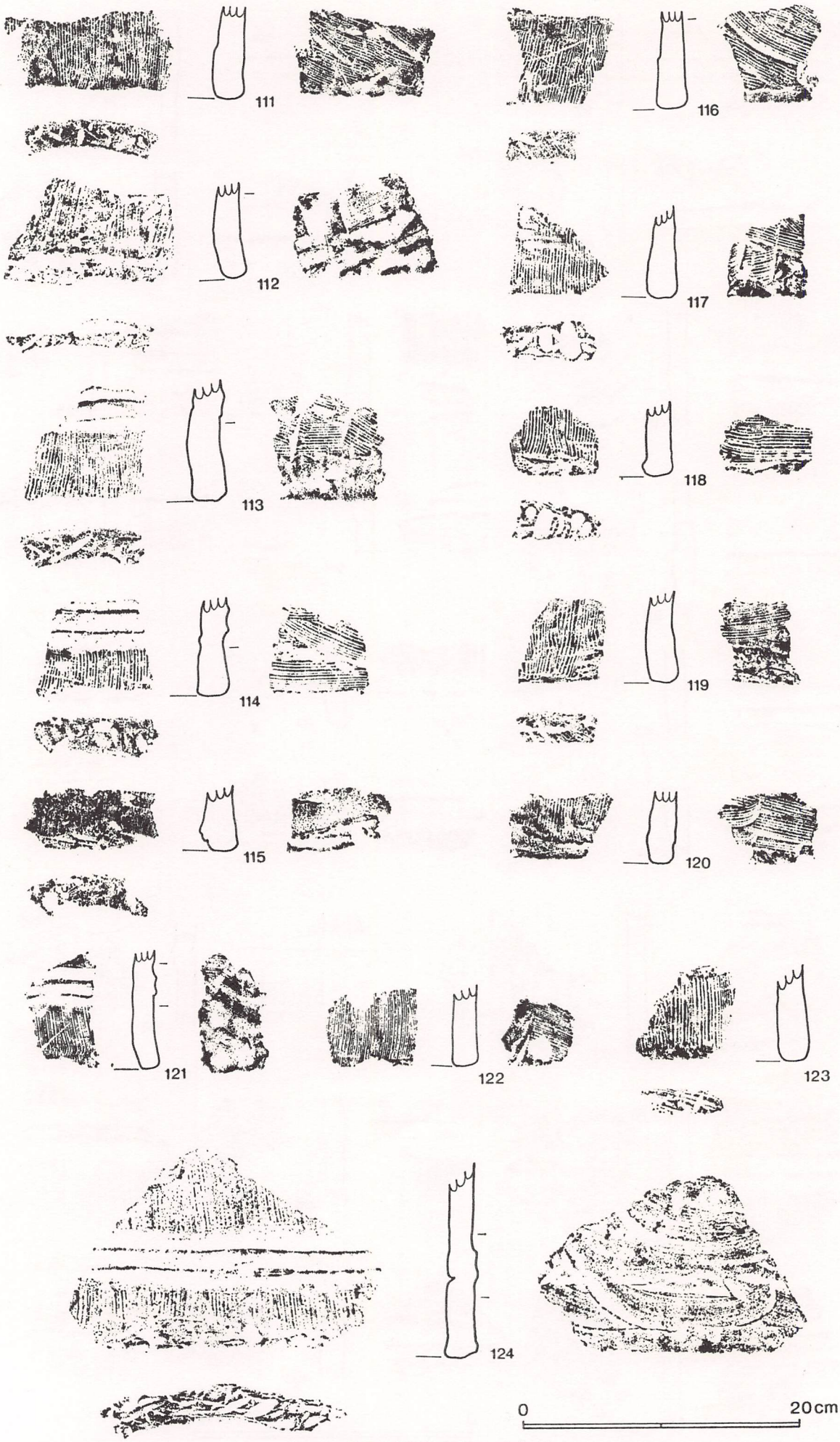
第18図　後円部東側調査区出土遺物 (3)



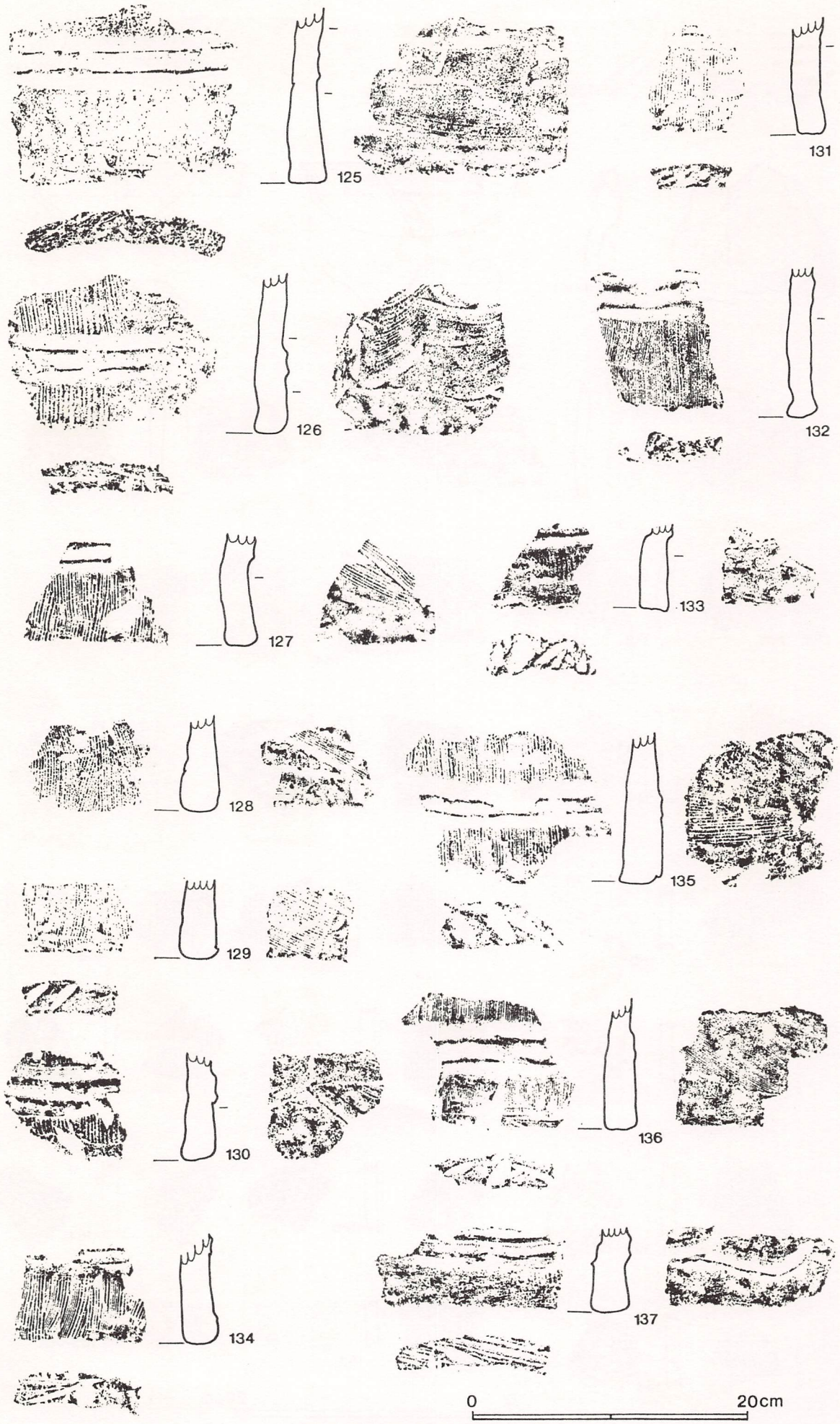
第19図　後円部東側調査区出土遺物 (4)



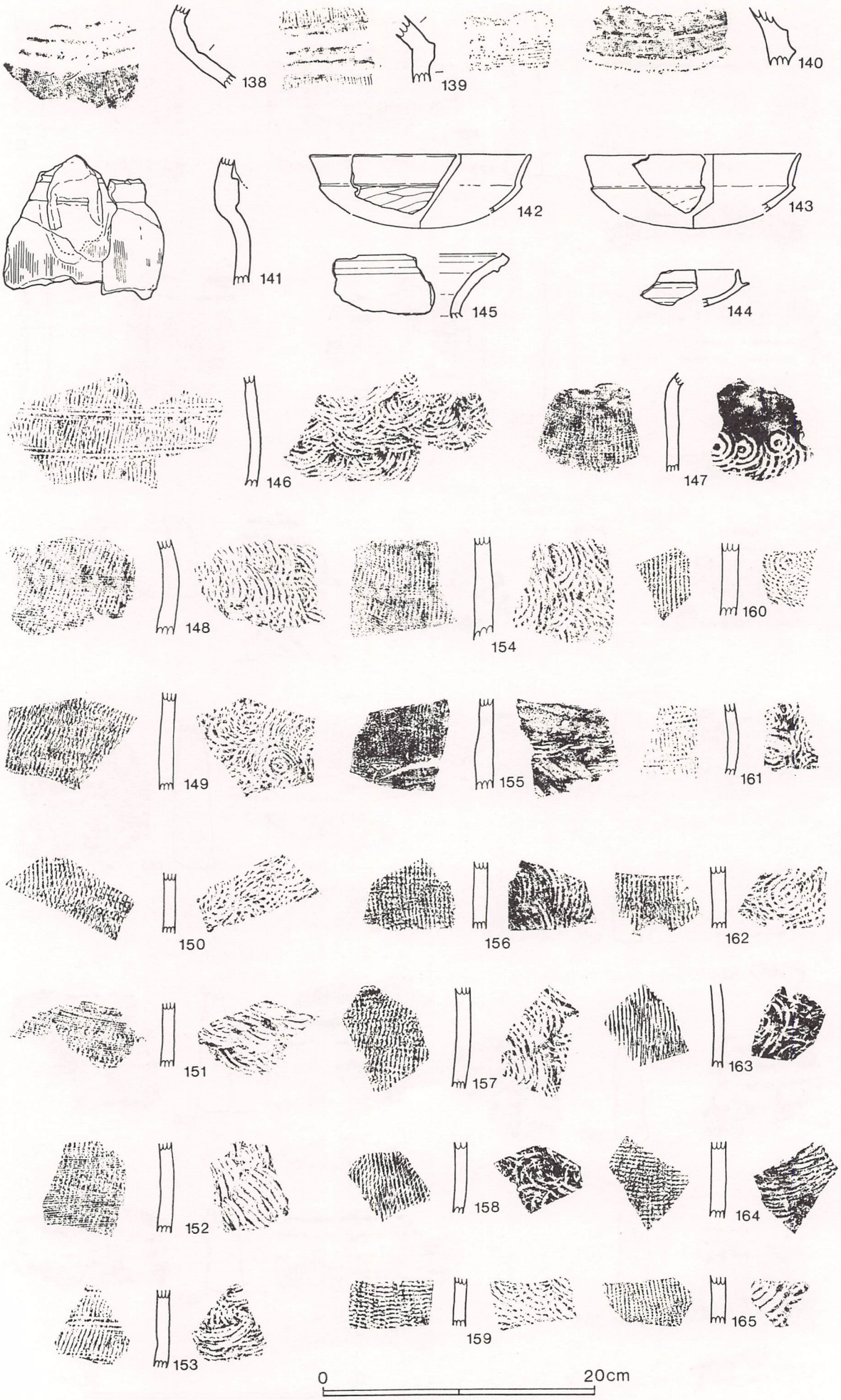
第20図　後円部東側調査区出土遺物 (5)



第21図　後円部東側調査区出土遺物 (6)



第22図　後円部東側調査区出土遺物 (7)



第23図　後円部東側調査区出土遺物 (8)

前方部西側調査区　出土遺物観察表

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成等の特徴	ハケメ（10本/cm）	備　　考
1	円筒埴輪口縁～体部中位	多段凸帯（タガ）の大形品、体部から口縁部にかけ径を増し、口縁部は外反気味に開く、端部には凹面を作り出す。外面はタテハケメの後、偏平な断面「M」字形のタガを貼付けヨコナデして仕上げる。 内面はナナメないしヨコハケメ（接合痕を各所に残す）、中位は部分的にナデを加える。口縁端部内外面ヨコナデ。 スカシは口縁部から2、3段目、5段目に各々2個、対称位置に、やや縦長の円形のものがあけられており、穿孔後、内側を部分的にナデて仕上げる。 全体にやや粗雑な作り。	荒砂を含む。 内外共茶褐色を呈し、比較的堅緻に焼き上がっている。	3.0 1.4 2種類使用	推定口縁径約40cm。タガは8本前後と思われる。墳裾出土の破片が接合したもので、墳丘上方から転落してきた可能性が強い。
2	円筒　口縁部	屈曲気味に開き、端部は凹む面を作り出す。外面はタテハケメ、内面はヨコハケメ及びナデ。端部内外面はヨコナデで仕上げる。	荒砂を多量に含む。内外面は黄褐色、断面は灰褐色。	1.1	墳裾出土。
3	〃	屈曲気味に開き、端部は凹面を形成する。内面端部直下はやや凹む。外面はタテハケメ、内面はヨコナデ又はヨコハケメ、端部内外面はヨコナデで仕上げる。	〃	1.2	〃
4	〃	外反気味に開き、端部にわずかに凹む面を作り出す。内面はヨコハケメ又はヨコへのナデ、外面はタテハケメ、端部内外面ヨコナデで仕上げ。	荒砂を含み茶褐色を呈する。	1.3	内堀墳丘寄り出土。
5	〃	外反気味に開き、端部に凹面が作り出される。外面は左上方へのタテハケメ、内面はヨコハケメ、端部内外ヨコナデ。	内外面は茶褐色、断面は灰色を呈している。 砂粒含む。	1.9	内堀覆土中（墳丘寄り）出土。
6	〃	強く屈曲して開き、端部に凹面を形成する。外面はタテハケメ、内面はヨコナデ、端部内外面ヨコナデ。	内外面、断面共灰色を呈する。 堅緻に焼き上がる。	1.4	
7	〃	外反気味に開く、端部に凹面を形成し、外面直下に粘土の余分がわずかに付着する。内面はヨコハケメ、外面はタテハケメ、端部は内外をヨコナデで仕上げる。	砂粒を含み、内外面茶褐色、断面は灰色。	0.8	墳裾出土。
8	〃	やや厚手で、わずかに外反気味に開く。端部に凹面を作り出し、直下は内外共わずかに凹む。外面はタテハケメ、内面はヨコハケメ、端部内外面ヨコナデ。	荒砂を含み、内外面茶褐色、断面は灰色。	1.9	〃
9	〃	屈曲気味に開く。端部にわずかに凹む面を形成する。内面はヨコハケメの後ヨコにナデ、外面はタテハケメ、端部内外はヨコナデ。	内外面共、茶味のある灰色を呈する。断面は暗褐色	1.6	〃
10	〃	やや厚手で、わずかに外反気味に開く。わずかに凹む端面を有する。内面は磨滅するがヨコハケメが認められる。外面はタテハケメ、端部内外はヨコナデ。	砂粒を含み、内外共茶褐色	1.1	〃
11	〃	外反気味に開く。内面はヨコハケメの後ヨコにナデ、外面はタテハケメ、端部は内外をヨコナデ。	砂粒を含み、内外共、茶褐色	1.2	〃
12	〃	屈曲気味に開く。端部に凹面を作り出し、外面側は突出気味に肥厚する。内面は磨滅するが、ヨコハケメが認められる。端部内外はヨコナデ。	砂粒を含み、内外茶褐色を呈する。	1.1	墳裾出土。

番号	部位、種別	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成等の特徴	ハケメ(10本/cm)	備　　考
13	〃	わずかに外反気味に開き、端部にわずかな凹面を作り出す。内面ヨコハケメ、外面タテハケメ、端部内外ヨコナデで仕上げる。	砂粒を多量に含む。		〃
14	〃	わずかに屈曲気味に開く、端部はやや肥厚し、わずかに凹む面を作り出す。内面ヨコハケメ、外面タテハケメ、端部内外はヨコナデ。	砂粒を含み、内外茶褐色。	2.0	〃
15	〃	わずかに凹む端面は外方側が小さく突出する。内面はヨコハケメ、端部内外面ヨコナデ、外面にはタテハケメが残る。	荒砂、小石粒を含む。茶褐色。	1.1	〃
16	円筒　体部	円形のスカシ部分を含む破片、外面タテハケメ内面は左上りのヨコハケメ及びナデ、接合痕が部分的に残る。タガはややくずれた「M」字ないし台形。	内外面共茶褐色、断面灰色。小石粒、多量の砂粒を含む。	2.3	内堀墳丘寄り出土。
17	〃	外面タテハケメ、内面はヨコハケメ、タガは偏平な「M」字形。	砂粒を含み、茶褐色を呈する。	1.0	内堀墳丘寄り出土。
18	〃	円形のスカシ部分の破片、外面タテハケメ、内面は左上りのナナメハケメ。タガは偏平な「M」字形。	砂粒を含み、内外茶褐色、断面暗褐色、比較的堅緻。	内1.6 外2.0	
19	〃	円形のスカシ部分のある破片、外面タテハケメ、内面左上りのナナメハケメ。タガ部分の内面側にユビオサエ痕残る。タガは下方がつぶれたような台形(三角形に近い)。	荒砂を多量に含み、茶褐色を呈する。	1.2	墳裾出土。
20	〃	外面タテハケメ、内面左上よりのナナメハケメ。タガは下方がつぶれたような台形をしており、三角形に近い。	砂粒を含み、茶褐色。	内1.3 外1.0	内堀覆土中（墳丘寄り）出土。
21	〃	外面タテハケメ、内面ヨコないしナナメハケメ。タガは偏平な「M」字形。	内外茶褐色、断面暗茶褐色。	2.0	
22	〃	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ、部分的にナナメにナデ。タガは偏平な「M」字形。	荒砂を含み、灰褐色。	内1.4 外1.7	墳裾出土。
23	〃	外面タテハケメ、内面左上りのナナメハケメ。タガは偏平な「M」字形。	砂粒を含み、黄灰色。	1.8	〃
24	〃	外面はタテ及びやや右に傾斜するタテハケメ、内面はナナメハケの後、部分的にナデ。タガは偏平な「M」字形。	砂粒を含み、茶褐色。	1.8	墳裾出土。
25	〃	外面はわずかに左に傾くタテハケメ、内面も同様。タガは偏平な「M」字形。	細砂をわずかに含み、茶褐色。	2.0	内堀中堤寄り出土。
26	〃	外面タテハケメ、内面はヨコハケメ及びナデ、接合痕残る。タガは偏平な「M」字形。	砂粒、小石粒を含み、灰茶褐色。	1.5	墳裾出土。
27	〃	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ、タガは偏平な「M」字形	砂粒を多量に含み、灰茶褐色。	0.9	内堀内墳丘寄り出土。
28	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ、接合痕残る。タガは偏平な「M」字形。	砂粒を含み、茶褐色	2.0	墳裾出土。
29	〃	〃	荒砂を含み、内外黄褐色。断面は灰～茶灰色。	1.9	〃
30	〃	外面タテハケメ、内面はやや左上りのヨコハケメ、部分的にナデ。タガは偏平な三角形。	砂粒、小石粒を含み、茶褐色。	1.5	〃
31	〃	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。接合痕残る。タガは偏平な「M」字形。	砂粒を含み、明るい茶色。	1.1	外堀覆土中出土。

番号	部位、種別	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成等の特徴	ハケメ（10本/cm）	備　　考
32	〃	外面は右に傾斜するタテハケメ、内面ヨコハケメ。タガは偏平な「M」字形。	砂粒を含み、茶褐色。	0.8	内堀内墳丘寄り出土
33	〃	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。 タガは偏平な三角形。	〃	1.1	墳裾出土。
34	〃	外面タテハケメ、内面はナデ。 タガは偏平な「M」字形。	荒砂を含み、茶褐色。	1.1	墳裾出土。
35	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。 タガは偏平な「M」字形。	荒砂、小石粒を含み、茶褐色を呈する。焼成堅緻。	1.0	内堀底墳丘寄り出土。
36	〃	スカシ部分の破片。外面タテハケメ、内面はナナメハケメ、タガは偏平な「M」字形。	砂粒を含み茶褐色。 焼成堅緻。	内0.8 外1.0	内堀内墳丘寄り出土。
37	〃	外面タテハケメ、内面ナデ、接合痕残す。 タガは偏平な「M」字形。	荒砂、小石粒を多量に含みもろい。茶褐色。	1.0	墳裾出土。
38	〃	外面はわずかに右に傾斜するタテハケメ、内面はヨコハケメ。タガは偏平な「M」字形。	荒砂を含み、茶褐色。	1.0	内堀覆土中（墳丘寄り）出土。
39	〃	外面はわずかに右に傾斜するタテハケメ、内面はやや左上りのヨコハケメ、タガは偏平な「M」字形。	〃 焼成堅緻。	1.0	墳裾出土。
40	〃	外面タテハケメ、内面ナデ、タガは偏平な「M」字形。	砂粒を含み内外面茶褐色。 断面は暗茶褐色。	1.1	〃
41	〃	外面タテハケメ、内面左上りのヨコハケメ。 タガは偏平な「M」字形。	内外面灰褐色、断面は灰色荒砂含む。	1.5～1.7	〃
42	〃	外面は左にわずかに傾くタテハケメ、内面はわずかに左上りのヨコハケメ。タガは偏平な三角形で、直上はヨコナデにより凹んでいる。	砂粒を含み、茶褐色。	1.4	内堀内墳丘寄り出土。
43	〃	外面は右に傾斜するタテテハケメ、内面はナデ。 タガは偏平な「M」字形で、稜の部分は鋭る。	内外面は茶褐色、断面は灰褐色。荒砂を含む。	1.3	墳裾出土。
44	〃	外面タテハケメ。内面は左よりのヨコハケメ。 タガは偏平な「M」字形。内面に接合痕残る。	砂粒を含み、内外面明茶褐色。断面は灰褐色。	1.5	〃
45	〃	外面タテハケメ、内面ナデ。タガは偏平な「M」字形。	荒砂を多量に含む。内外面茶褐色。断面は灰褐色。	1.1	墳裾出土。
46	〃	外面タテハケメ、内面は主にヨコ方向のナデ。 タガは偏平な「M」字形。	砂粒を含み茶褐色。	1.1	〃
47	〃	外面タテハケメ、内面は左上りのヨコハケメ。 タガは偏平で、くずれた「M」字形。	砂粒を多量に含み、茶褐色。	1.6	〃
48	〃	外面タテハケメ、内面はナデ及びナナメハケメ。 タガは下方の一辺がややつぶれた台形。	砂粒を含み、内外面茶褐色断面は茶灰色。	1.2～1.4	〃
49	〃	外面タテハケメ、内面はナデ。 タガは偏平な「M」字形。	砂粒を多量に含み、茶褐色。	1.1	〃
50	〃	外面はタテハケメ、内面は左上りの短か目でやや粗雑なナナメハケメ。 タガはごく偏平な「M」字形。	灰色（還元色）で、部分的に黄灰色。	内1.4 外1.9	墳裾出土。

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成等の特徴	ハケメ(10本/cm)	備　　考
51	〃	外面はタテハケメ、内面はナデ、部分的に右上りのハケメが残る。タガはごく偏平で低い。	外面は赤褐色。内面は黄褐色。砂粒含む。	1.1	墳裾出土。
52	〃	外面はやや右に傾くタテハケメ、内面はナデ。 タガはごく偏平な「M」字形。	荒砂を含み、茶褐色。	1.1	内堀内墳丘寄り。
53	〃	外面はタテハケメ、内面は左上りのヨコハケメ。 タガは下方がややつぶれたようなくずれた台形。	荒砂を多量に含み、茶褐色。	内0.8 外1.5	墳裾出土。
54	〃	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。 タガは偏平な「M」字形。	荒砂、小石粒を含み、灰～灰褐色。	1.0～1.1	内堀底墳丘寄り出土。
55	〃	外面はタテハケメ、内面ヨコナデ、接合痕残す。 タガは偏平な台形。	内外明茶褐色、断面は灰色砂粒、小石粒含む。	1.3	内堀墳丘寄り出土。
56	〃	円形のスカシ部分。外面は左に傾くタテハケメ、内面はヨコないしナナメハケメ。 タガは偏平な「M」字形。	細砂を含み内外茶褐色、断面灰褐色。	1.2～1.3	墳裾出土。
57	〃	外面はタテハケメ、内面はヨコハケメ、タガは偏平でくずれた三角形、直上はヨコナデのため凹む。	砂粒を含み内外茶褐色、断面は暗茶褐色。	1.0～1.1	墳裾出土。
58	〃	外面タテハケメ、内面はヨコハケメ及びナデ。タガは下方がややつぶれた、くずれた台形、直上はヨコナデにより凹む。	砂粒を含み茶褐色。	1.2	内堀内墳丘寄り出土。
59	〃	スカシ部分の破片。外面はタテハケメ、内面はナナメハケメ。 タガは偏平な「M」字形。	荒砂を含み茶褐色～灰黄褐色。	2.0	内堀底墳丘寄り出土。
60	〃	内外の調整は59と同様。タガは偏平な三角形で直上は強いヨコナデのため凹む。	砂粒、小石粒を含み、茶褐色。	1.2～1.4	墳裾出土。
61	〃	外面はタテないしナナメハメ、内面はヨコにナデ。 タガは稜の突がった偏平な「M」字形。	荒砂、小石粒を多量に含み茶褐色。	1.3	〃
62	〃	外面はタテハケメ、内面はヨコないしナナメハケメ。 タガはくずれた、偏平な「M」字形。	砂粒を含み茶褐色。	1.0	〃
63	〃	円形のスカシ部分の破片で、スカシは穿孔後内側をナデ。外面タテハケメ、内面ナデ及びナナメハケメ。タガはくずれて、偏平な「M」字形。ハケメは粗い。	荒砂を多量に含み内外面は茶～黄褐色。断面は灰褐色。	2.8	〃
64	〃	外面タテハケメ、内面比較的丁寧なナデ。 タガは偏平な「M」字形。	砂粒を含み、内外黄褐色、断面灰色。	0.8	〃
65	〃	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。 タガは偏平な「M」字形。	砂粒を含み、内外茶褐色。断面は灰色。	内1.4 外1.0	〃
66	〃	外面タテハケメ、内面はナナメハケメ。 タガはごく偏平な「M」字形。	砂粒を含み、灰褐色。	1.6～1.8	内堀中堤寄り出土。
67	〃	外面はタテハケメ。部分的に刀子で削ったような痕跡がある。内面はナデ。 タガはごく偏平な「M」字形。	砂粒を多量に含み、茶～黄褐色。	1.1	外堀覆土。
68	〃	基底部から3段目部分にかけての破片。円形のスカシが認められる。外面はタテハケメ、内面は右上りのナナメハケメ各所に接合痕残る。下部はオサエ痕残る。底面には棒状の圧痕残る。タガはごく偏平な「M」字形。	砂粒、小石粒を含み、茶褐色。	1.0	墳裾、内堀墳丘寄りのものが接合。

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成等の特徴	ハケメ（10本/cm）	備　　考
69	〃	基底部分の破片。外面はタテハケメ、内面は左上りのナナメハケメ。底面には棒状の圧痕が残る。タガは偏平な「M」字形で、極めて低い位置に付けられる。	荒砂、小石粒を含み、茶褐色。	1.8	内堀中堤寄り出土。
70	〃	外面はタテハケメ、内面はナデ。タガは断面「M」字形で巾が狭い。	荒砂を含み、内外茶褐色、断面は茶灰色。	1.0	墳裾出土。
71	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ及びナデ、下部はオサエ痕残る。底面部分はやや丸味があり、タガは偏平でくずれた台形。	荒砂、小石粒を含み、茶褐色。	1.5	〃
72	〃	外面タテハケメ、内面はナデ。底面に棒状の圧痕あり。タガは巾のやや狭い偏平な「M」字形。外面にへらで削ったような痕跡がある。内外磨滅。	荒砂、小石粒を含み、外面茶褐色、内面黄茶褐色。	1.0	墳裾出土。
73	〃	外面タテハケメ、内面はナナメハケメ及びナデ、最下部はオサエ。 タガは超偏平な「M」字形。	砂粒を多量に含み、内外茶褐色。	1.1	〃
74	〃	外面タテハケメ、内面はヨコにナデ。タガはやや巾の狭い「M」字形。底面に棒状の圧痕あり。	多量の荒砂と小石粒を含み茶褐色。	1.0	〃
75	〃	外面タテハケメ、内面はヨコハケメ、最下部はユビによりナデており指紋が残されている。タガは偏平でくずれた三角形。底面に棒状の圧痕あり。	〃	0.9	〃
76	〃	69と同様の調整。タガは稜のやや鋭い「M」字形で、取付位置は69と同様、極めて低い位置にある。	荒砂を含み、茶褐色。 堅緻に焼成される。	1.1～1.2	〃
77	〃	外面ヨコハケメ、内面ヨコハケメ及びナデ、最下部はユビオサエ。外方に湾曲する。タガはくずれた台形。	荒砂、小石粒を含み、茶褐色。	1.2	〃
78	〃	外面タテハケメ、内面はナナメハケメ及びナデ、下位はユビオサエ及びナデで、わずかに外反気味。タガは低い位置に付けられ、偏平でくずれた「M」字形。	砂粒を含み茶褐色。 焼成堅緻。	1.3	
79	〃	やや厚手の作りで、底面は外側が上方に上がっており棒状の圧痕が残る。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ及びナデ、最下部はユビオサエ。接合痕残す。	荒砂、小石粒含み、茶～黄褐色。	1.4～1.6	墳裾出土。
80	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な「M」字形で、低い位置に付けられる。	砂粒含み焼成堅緻。 内外灰褐色、断面は灰色。	1.0	〃
81	〃	端部はわずかに外反する。外面タテハケメ、内面はヨコハケメ、最下部はナデ、タガは偏平でくずれた三角形。内面磨滅する。	荒砂、小石粒含み、内外茶褐色、断面灰色。	1.0	〃
82	〃	端部は内外が面取りされたように丸味を持つ。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ及びナデ。底面に棒状の圧痕残る。	細砂を含み、内外茶褐色。 断面は暗褐色。	1.2	〃
83	〃	外面タテハケメ、内面ナデ（ハケメも認められる）。 タガは偏平でくずれた「M」字形。	砂粒を多量に含み、茶褐色。	2.4	〃
84	〃	外面はタテハケメ、内面ヨコハケメ。タガは偏平な台形。	細砂を含み、灰褐色。	1.0	
85	〃	外面タテハケメ、内面ナデ。タガは偏平な「M」字形。底面には棒状の圧痕あり。内面磨滅する。	内面灰黄褐色。外面、断面茶褐色。砂粒を含みもろい	1.0	墳裾出土。

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成等の特徴	ハケメ (10本/cm)	備　　考
86	〃	外面タテハケメ、内面はヨコにナデ、下位はオサエにより湾曲する。 タガは偏平な「M」字形。	内面黄褐色、外面、断面は黄灰色。荒砂を含みもろい。	1.0, 2.0	内堀墳丘寄り出土。
87	須恵器　甕	口頸部（体部境部分）の破片。大形品のもので、断面くずれた方形の凸帯を有する。	白色の荒砂を含み、内外黒灰色、断面はセピア色で堅緻。	——	
88〜92	〃	体部破片。外面は平行（91）又は格子風タタキ（その他）、内面は同心円タタキ。	胎土は89が荒砂、小石粒を含み、他は細砂をわずかに含む。色調は内外灰色〜明灰色、断面はセピア色をするもの（89、91）がある。焼成はいずれも堅緻。	——	88、92は墳裾出土、90、91は内堀覆土（墳丘寄り）出土、89は内堀覆土中堤寄りから出土。
93	須　恵　器	小形の壺の口縁部下位の破片。外面には上部に沈線、その下に櫛描波状文が認められる。内外ヨコナデ。	内外灰黒色で外面は光沢あり。断面セピア色。	——	墳裾表土中出土。

後円部東側調査区出土遺物観察表

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成等の特徴	ハケメ (10本/cm)	備　　考
1	円筒埴輪 中位〜底部	復原底径約29cm。下から2段目と3段目の間及び4段目の上に円形のスカシがあけられている。径は約5cmで、外面周囲は、はみ出た粘土をナデで仕上げている。外面はタテハケメ、内面は最下部をオサエ、ナデ、以上の部分はナナメ〜ヨコハケメで部分的にヨコ〜ナナメのナデ。接合痕の残る部分あり。タガは偏平でくずれた「M」字形で貼付位置が上下する部分があり、やや粗雑な作り。	細砂を含み、外面は茶味を帯びた灰色ないし黄茶褐色、内面は黄灰〜茶褐色を基調とする。	1.8	外堀底、調査区西部中堤寄りから、転落し、潰れた状況で出土。
2	円筒　口縁部	ゆるやかに外反し開く。端部は内側にわずかに突出し、凹んだ端面を形成する。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ及びナデ。	細砂を含み内外黄褐色、断面は灰色。	2.4	覆土下層出土。
3	〃	外反気味に開くが、端部付近ではわずかに内湾気味。端面わずかに凹む。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。	細砂を多量に含み、内外共明るい茶色、断面は灰色。	1.2〜1.4	〃
4	〃	ゆるく外反気味に開き、端部付近では屈曲気味で直下内面は凹む。端面も凹む。外面は左に傾斜するタテハケメ、内面はヨコハケメ。	砂粒を含み内外明褐色。断面は茶灰色。	1.9〜2.1	墳裾付近耕作土中出土。
5	〃	端部直下がくびれるような状況である以外4と略同様。	細砂含み内外茶褐色。断面は暗褐色。	1.7〜2.0	耕作土中出土。
6	〃	外反気味に開き、端面は凹む。外面タテハケメ、内面は左上りのナナメハケメ。	砂粒を含み、茶褐色。	2.9〜3.3	墳裾付近耕作土中出土。
7	〃	6と略同様。	〃	2.4	耕作土中出土。
8	〃	端部付近はやや厚手で、端面はゆるやかに凹む。	砂粒を多量に含み、内外明茶褐色、断面は茶灰色。	1.0	覆土下層出土。
9	〃	端面の外側部分がやや角ばる以外、断面の形態は2と略同様。外面左傾するタテハケメ、内面ヨコハケメ。	砂粒を含み、茶褐色。	1.9〜2.0	覆土上層出土。
10	〃	端部はゆるく、外方に屈曲し、端面は平らで、両端は面取りがされたようにナデられる。外面左に傾くタテハケメ、内面ヨコハケメ。内外やや磨滅。	砂粒を多量に含み、茶褐色。断面は灰色。	2.0	覆土下層出土。

番号	種別、部位	形態、調整技法、第の特徴	胎土、色調、焼成等の特徴	ハケメ(10本/cm)	備　　考
11	〃	やや薄手の作り。断面は6と略同様。外面タテハケメ。	砂粒を含み、茶褐色、断面は灰色。	1.3	
12	〃	端部はやや肥厚気味で、端面は凹み、その両端は丸く仕上げる。外面タテ、内面ヨコないしナナメハケメ。	細砂多量に含み、茶褐色。	1.8、2.1	覆土下層出土。
13	〃	3と略同様。	黄～灰褐色、断面は灰色。	1.6～1.8	〃
14	〃	ゆるく外反し開く。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ、内面に接合痕残る。	細砂を多量に含み、内外黄褐色、断面は灰色。	1.2～1.5	〃
15	〃	ゆるく外反し開く。わずかに凹む端面を形成する。外面タテハケメ、内面左上りのヨコハケメ。	細砂を含み、内外黄褐色、断面は灰色。	1.0～1.3	〃
16	〃	14と略同様。内面磨滅。	細砂含み、内外黄褐色。断面は暗い灰色。	1.1～1.3	〃
17	〃	10と略同様。内面磨滅。	内外明黄褐色、断面黄灰色。	2.0	耕作土中出土。
18	〃	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。	茶褐色。	1.0	覆土下層出土。
19	〃	やや薄手の作りで、断面は12に近い。外面は左に傾くタテハケメ、内面左上りのヨコハケメ。内外磨滅。	細砂含み、黄褐色、断面は灰色。	内1.7 外2.3	〃
20	〃	ゆるく外反気味に開き、端面に凹凸が見られる。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。	内外茶褐色、断面は茶灰色	2.0～2.1	耕作土中出土。
21	〃	断面は13と略同様。外面は左に傾くタテハケメ、内面はヨコハケメ。	内外茶褐色、断面は暗褐色。	1.8	中堤寄り覆土下層出土。
22	〃	2と略同様。	内外茶褐色、断面は灰色。	2.0	覆土下層出。
23	〃	ゆるく外反気味に開き、厚さの割に端面は狭い。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。	荒砂を多量に含み、内外暗茶褐色、断面は暗褐色。	2.1	耕作土中出土。
24	〃	ゆるく屈曲気味に開く。外面タテハケメ、内面右上りのヨコハケメ。	内外茶褐色、断面は灰色。	1.2	覆土上層出土。
25	〃	屈曲気味に開く。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ及びナデ。	砂粒を多量に含み、外面は茶褐色、内面、断面は明黄褐色。	1.2	中堤寄り覆土上層出土。
26	〃	ごくゆるく外反気味に開く。外面は左に傾くタテハケメ、内面左上りのヨコハケメ及びナデ。端面はわずかに凹み、端部はくずれて丸い。	内外面茶褐色、断面は灰茶色。細砂を含む。	1.7～2.3	覆土上層出土。
27	〃	断面は2と略同様。外面タテハケメ、仕上げのヨコナデが強い。内面ヨコハケメ。	細砂を含み、内外褐色。断面は灰色。	1.2～1.3	覆土下層出土。
28	〃	薄い作りで、端面はわずかに凹み、その両端は丸く仕上げる。外面はタテハケメ、内面ヨコハケメ。	細砂を多量に含み、内外茶褐色、断面は灰色。	1.8～2.0	〃
29	〃	端面わずかに凹む。外面タテ、内面ヨコハケメ。	内外茶褐色。断面は灰茶。	1.2	耕作土中出土。
30	〃	端面わずかに凹む。外面タテ、内面ナナメハケ。	内外黄褐色、断面は灰色。	1.8～2.2	〃
31	〃	端面わずかに凹む。外面は左に傾斜するタテ、内面左上りのナナメハケメ。	外面茶褐色、内面灰褐色。	1.2～1.3	覆土上層出土。
32	〃	端面は凹み、その両端はやや突出気味。外面タテハケメ、内面はヨコハケメ及びナデ。	砂粒を多量に含み、内外黄褐色、断面は灰色。	1.4	〃
33	〃	端面はわずかに凹む。外面タテ、内面ヨコハケメ。	荒砂含む。内外茶褐色。	2.5	覆土下層出土。

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成等の特徴	ハケメ(10本/cm)	備　　考
34	〃	端面は凹み、その両端は鈍く突出気味。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。	砂粒をほとんど含まず、内外黄褐色、断面灰色。	1.7～2.0	ＳＤ003内出土。
35	〃	わずかに屈曲気味に開き、端面はわずかに凹み、その内側端部は鈍く突出している。	内外褐色、断面は灰色。	1.2～1.3	ＳＤ001内出土。
36	〃	屈曲気味に外方に開く。端部はわずかに凹む。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ、部分的にヨコにナデ。	砂粒を多量に含み、内外黄～明灰褐色、断面は灰色。	1.1	ＳＤ013内出土。
37	〃	薄手の作りで端面はわずかに凹み、外方端部は鈍く突出気味。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。	細砂多量に含む。内外茶褐色、断面は暗茶褐色。	2.0～2.1	ＳＤ001内出土。
38	円筒　体部	ハケメは太くて浅く鈍い。外面はタテ、内面は弧を描くように施され、ナデを加える。タガは平坦部があまり凹まない、偏平な「M」字形。	荒砂多量に含む。色調は36と同様。	2.9	覆土上層出土。
39	〃	円形のスカシ部分。外面タテ、内面ナナメハケメ。	内外茶褐色、断面暗茶褐色。	1.4	耕作土中出土。
40	〃	外面タテ、内面ヨコ、ナナメハケメ、部分的にナデ、接合痕残る。タガは偏平な「M」字形。	細砂多量に含み、内外褐色、断面茶灰色。	1.7	墳裾付近耕作土中出土。
41	〃	外面タテハケメ、内面右上りのナナメハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	内外褐色、断面は灰色。	1.1～1.3	覆土上層出土。
42	〃	外面やや右に傾くタテハケメ、内面ナナメハケメ及びナデ。タガは偏平な「M」字形。	砂粒を多量に含みややもろい。内外黄褐色、断面灰色。	1.4	墳裾付近耕作土中出土。
43	〃	外面やや左に傾くタテハケメ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な「M」字形。	荒砂を含み、内外褐色、断面は灰色。	2.1	覆土上層出土。
44	〃	外面タテハケメ、内面磨滅。	内外黄褐色、断面灰色。	1.9	耕作土中出土。
45	〃	外面タテハケメ、内面はナナメハケメ及びナデ。タガは偏平でくずれた「M」字形。下側のナデツケは不十分。	砂粒はほとんど含まず。内外茶褐色。断面は灰色。	1.2	〃
46	〃	外面わずかに右に傾くタテハケメ、内面左上りのヨコハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	砂粒を多量に含み、内外褐色、断面暗褐色。	1.1～1.4	覆土下層出土。
47	〃	外面左に傾くタテハケメ、内面ナナメハケメ。タガはごく偏平な「M」字形。	茶褐色。	1.9～2.1	耕作土中出土。
48	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な「M」字形。	外面茶灰色、内面褐色、断面灰色。	1.8～2.3	〃
49	〃	外面タテハケメ、内面右上りのナナメないしヨコハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	砂粒を多量に含む。内外茶褐色、断面灰色。	1.9～2.2	〃
50	〃	タガは偏平な三角形。	内外茶褐色、断面灰色。	2.0	覆土下層出土。
51	〃	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。	茶～黄褐色、断面は灰色。	1.5	覆土上層出土。
52	〃	外面タテ、内面左上りのヨコハケメ。タガは上辺がわずかに凹む偏平な「M」字形（台形に近い）。	内外褐色、断面灰色。砂粒を含み堅緻。	1.0	覆土下層出土。
53	〃	外面タテハケメ、内面ナデ。タガはごく偏平でくずれた台形。	内外黄褐色、断面は灰色。多量の砂粒を含む。	1.5	覆土上層出土。
54	〃	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。タガはごく偏平な「M」字形。	内外暗茶褐色、断面は暗褐色。	1.3～1.4	
55	〃	〃	内外褐色、断面は暗褐色。	1.3	耕作土中出土。

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成等の特徴	ハケメ(10本/cm)	備考
56	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な台形。	内外褐色、断面は灰色。	0.7，2.5	耕作土中出土。
57	〃	外面左傾するタテハケメ、内面ヨコないしナナメハケメ。タガは上辺がわずかに凹むくずれた台形。	内外黄褐色、断面は灰色。	1.2～1.4	覆土下層出土。
58	〃	円形のスカシ部分の破片。外面タテ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な「M」字形。	細砂を多量に含み、内外茶褐色、断面は灰色。	1.6～1.8	〃
59	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ、タガは偏平な「M」字形。	砂粒をあまり含まず。内外褐色、断面は茶灰色。	1.4	〃
60	〃	〃	内外黄褐色、断面は灰色。	1.4	〃
61	〃	円形のスカシ部分の破片。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ及びナデ。タガは偏平な「M」字形。	細砂を含み、内外茶褐色、断面は暗褐色。	1.6～1.8	覆土上層出土。
62	〃	内面ヨコハケメ、タガは偏平でくずれた「M」字形。	内外暗褐色、断面は灰色。	1.7～2.0	〃
63	〃	スカシ部分の破片。外面タテ、内面ヨコハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	内外褐色、断面は灰色。	2.0	耕作土中出土。
64	〃	外面左傾するタテハケメ。内面ナナメハケメ及びナデ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	内外褐色、断面は暗褐色。	2.0	覆土下層出土。
65	〃	スカシ部分の破片。タガは偏平な「M」字形。	内外茶褐色、断面は灰色。	2.3	耕作土中出土。
66	〃	外面右に傾くタテハケメ、内面ヨコハケメ、接合痕残る。タガは偏平な「M」字形。	内外明るい茶褐色、断面は灰色。	1.1～1.4	覆土上層出土。
67	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	内外茶褐色、断面は暗茶褐色。比較的堅緻。	1.1	耕作土中出土。
68	〃	スカシ部分の破片。外面タテ、内面ナナメハケメ。タガはごく偏平な「M」字形。	外面黄褐色、内面灰褐色、断面灰色。	1.6～1.8	覆土上層出土。
69	〃	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。タガは上辺の幅が狭い「M」字形。	内外茶褐色。	1.6～2.6	覆土下層出土。
70	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。タガはごく偏平な台形。	内外茶褐色、断面は茶味のある灰色。	1.4	墳裾付近耕作土中出土。
71	〃	スカシ部分の破片。外面やや左に傾くタテハケメ、内面ヨコハケメ。タガは偏平な「M」字形。	砂粒を多量に含み、内外褐色、断面灰色。	1.2	覆土下層出土。
72	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。タガはごく偏平で上側は強くヨコナデされ凹む。	内外黄褐色、断面は灰色。	1.2～1.3	
73	〃	スカシ部分の破片。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	内外茶褐色、断面は灰色。	1.1～1.2	覆土上層出土。
74	〃	スカシ部分の破片。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。タガは偏平な「M」字形。	細砂を含み、黄灰褐色。	1.9～2.1	耕作土中出土。
75	〃	スカシ部分の破片。タガは三角形。	内外黄灰色、断面は灰色。	2.0	〃
76	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ、タガは偏平でくずれた「M」字形。	茶褐色。	1.8～2.0	〃
77	〃	内面ナナメハケメ。タガは偏平な「M」字形。	内外灰褐色、断面灰色。	1.8	〃
78	〃	〃	外面灰褐色、内面褐色、断面は暗い茶味のある灰色。	1.1～1.2	覆土下層出土。

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成等の特徴	ハケメ(10本/cm)	備　　考
79	〃	外面左傾するタテハケメ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な「M」字形で上側部分は強くヨコナデ。	内外黄褐色、断面は灰色。	2.2～2.8	覆土上層出土。
80	〃	スカシ部分の破片。外面わずかに左傾するタテハケメ、内面ナデ。タガは台形。	内外茶褐色、断面暗茶褐色。	1.9～2.5	耕作土中出土。
81	〃	スカシ部分の破片。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ、タガは偏平な「M」字形。	〃	1.0～1.2	墳裾付近耕作土中出土。
82	〃	スカシ部分の破片で、断面の形状から朝顔型円筒の可能性あり。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ、指オサエ痕残る。タガは偏平な台形。	内外黄褐色、断面は灰色。	1.8～2.6	耕作土中出土。
83	〃	外面左傾するタテハケメ、内面はナナメハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	内外褐色、断面は灰色。	1.3	覆土下層出土。
84	〃	ハケメは83と同様。タガはごく偏平で粗雑な作り。	内外灰褐色、断面茶灰色。	1.8	耕作土中出土。
85	〃	スカシ部分の破片。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な「M」字形。	内外茶褐色、断面灰茶色。	1.9～2.1	覆土下層出土。
86	〃	スカシ部分の破片。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。タガは偏平な「M」字形。	細砂多量に含む。外面赤褐色、内面灰褐色、断面灰色。	1.8	耕作土中出土。
87	〃	円形のスカシ部分の破片。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ及びヨコ方向のナデ。タガはごく偏平。	外面黄褐色、内面及び断面は灰色。	2.1	上、下層出土のものが接合。
88	〃	円形のスカシ部分の破片。内面ナナメハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	内外茶褐色。断面は灰色。	2.0	覆土下層出土。
89	〃	外面タテハケメ内面ナナメハケメ、ユビオサエ痕残る。タガは偏平な「M」字形。	内外茶褐色、断面は暗褐色。	1.8～2.5	耕作土中出土。
90	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。タガはややくずれた三角形。	砂粒を多量に含みもろい。内外茶褐色、断面灰色。	2.0	〃
91	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。タガはごく偏平でくずれた「M」字形。	胎土、色調は89と同じ。	1.2～1.3	〃
92	〃	円形のスカシ部分。外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。タガは偏平な「M」字形。	細砂多量に含む。内外明褐色、断面は灰褐色。	1.2～1.3	覆土上層出土。
93	〃	円形のスカシ部分の破片。タガはごく偏平でくずれた「M」字形。	細砂多量に含む。茶～暗茶褐色。	2.0	覆土下層出土。
94	〃	円形のスカシ部分の破片。タガはごく偏平。	外面明褐色。内、断面灰色。	1.5～1.7	覆土上層出土。
95	〃	外面タテハケメ、内面ヨコ、ナナメハケメ。タガは上辺がわずかに凹む、偏平な台形。	細砂多量に含む。茶～灰褐色、断面は茶味のある灰色。	1.2～1.3	耕作土中出土。
69	〃	タガは偏平でくずれた「M」字形。	明～黄灰褐色、断面灰色。	1.7～2.4	〃
97	〃	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ。タガはごく偏平。	茶褐色。	1.2～1.3	覆土下層出土。
98	〃	タガはくずれた「M」字形。	黄～灰褐色。	1.1～1.3	〃 上層出土。
99	〃	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ及びナデ。タガはごく偏平でくずれた「M」字形。	外面は黄灰褐色、内面は黄色味のある灰色。	1.9	〃 下層出土。
100	〃	スカシ部分の破片。外面タテ、内面ナナメハケメ。	内外茶褐色。断面黄灰色。	1.9	耕作土中出土。
101	〃	円形のスカシ部分。タガは偏平な「M」字形。	内外茶褐色。断面灰色。		覆土下層出土。

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成等の特徴	ハケメ(10本/cm)	備　　考
102	〃	円形のスカシ部分。タガは偏平な「M」字形。	荒砂多量に含みもろい。茶褐色。	2.9	耕作土中出土。
103	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。	砂粒を多量に含む。外面灰褐色、内面茶灰色。	1.2	SD001内出土
104	〃	円形のスカシ部分。外面タテ、内面ナナメハケメ及びナデ、接合痕残る。タガは偏平な「M」字形。	砂粒を多量に含む。外面茶褐色、内、断面明灰茶色。	1.3	〃
105	〃	外面タテハケメ、内面はヨコ及びナナメハケメ。タガは偏平でくずれた「M」字形。	荒砂多量に含み、内外茶褐色、断面は灰色。	2.0	〃
106	〃	円形のスカシ部分。タガは偏平な「M」字形。	荒砂を多量に含み、茶褐色	1.7～1.8	〃
107	〃	外面タテハケメ、内面ヨコハケメ及びナデ。タガはくずれた台形。	荒砂を多量に含む。内外茶褐色、断面暗褐色。	2.3	SD003内出土。
108	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ、部分的にナデ。タガはごく偏平。	内外茶褐色。断面暗灰色。	1.3	SD001内出土。
109	〃	円形のスカシ部分。外面タテ、内面ヨコハケメ。	内外褐色、断面灰茶色。	1.2～1.5	SD003内出土。
110	〃	外面タテハケメ、内面ナデ。タガは偏平な「M」字形。	砂粒多量に含み、茶褐色。	2.4	SD001内出土。
111	円筒　底部	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。底面に棒状の圧痕残る。	小石粒、多量の砂粒含む。内外黄褐色、断面灰色。	1.7～2.0	覆土上層出土。
112	〃	外面最下部はヨコにナデ、内面はユビオサエ。底面はやや丸味があり、棒状の圧痕が残る。	砂粒を多量に含む。	1.5	覆土下層出土。
113	〃	端部から7cmのところに偏平でくずれた「M」字形のタガがある。内面は最下位をナデ。底面に棒状の圧痕あり。	細砂を多量に含む。内外黄褐色、断面は灰色。	1.7	覆土上層出土。
114	〃	端部から5.5cmのところに偏平な「M」字形のタガがある。底面に棒状の圧痕残る。	荒砂を含み、褐色。	2.2	墳裾付近耕作土中出土。
115	〃	端部に向い裾が広がるように肥厚する。	内外黄灰色、断面灰色。	0.9	覆土下層出土。
116	〃	外面タテ、内面ナナメハケメ。	内外褐色、断面茶褐色。	2.3～2.4	耕作土中出土。
117	〃	内面最下位はナデ及びオサエ。底面に棒状の圧痕。	内外明褐色、断面暗褐色。	1.9	〃
118	〃	内面最下位は突出するように肥厚する。	内外茶褐色、断面暗茶褐色。	2.1～2.2	〃
119	〃	内面最下位ナデ。底面に棒状の圧痕。	〃	1.9～2.0	〃
120	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。	内外褐色、断面暗褐色。	2.2	覆土下層出土。
121	〃	底部にしては薄手で外反気味。外面は左傾するタテハケメ、内面ユビオサエ。タガは偏平な「M」字形。	細砂を多量に含み茶褐色、断面は暗茶褐色。	0.9～1.3	覆土上層出土。
122	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。	内外褐色、断面は茶褐色。	1.4	耕作土中出土。
123	〃	外面タテハケメ、内面ナデ、底面に棒状の圧痕残る。	外面黄～茶灰色、内面及び断面は灰色。	2.3	墳裾付近耕作土中出土。
124	〃	外面わずかに左傾するタテハケメ、内面は弧を描くようなヨコ方向のハケメ、最下位はユビオサエ。接合痕残る。タガは端部から4.5cmのところに付けられ、偏平でくずれた「M」字形。底面に棒状の圧痕残る。	小石粒及び多量の荒砂を含む。内外茶褐色、断面は暗褐色。	2.6	覆土下層出土。
125	〃	端部に向い裾が広がるように肥厚する。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ、最下位はヨコにナデ。タガはごく偏平な「M」字形。底面に細い棒状の圧痕あり。	砂粒を多量に含む。内外、断面共灰色。	0.8～0.9	〃

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成等の特徴	ハケメ(10本/cm)	備　　考
126	〃	端部から5cmのところに偏平でくずれた「M」字形のタガがある。内面最下位はユビオサエ。	荒砂を多量に含み、内外茶褐色、断面は灰茶色。	2.1	覆土下層出土。
127	〃	端部にかけて外反気味で、7cmのところにタガがある。内面最下位はユビオサエ。	内外黄褐色、断面茶褐色。	1.8	耕作土中出土。
128	〃	最下部は肥厚する。内面はナナメハケメ及びナデ、オサエ。	荒砂多量に含み、内外茶褐色、断面は暗茶褐色。	1.9	〃
129	〃	外面タテハケメ、内面ナナメハケメ。底部に棒状の圧痕残る。	荒砂多量に含む。内外茶褐色、断面は灰茶色。	1.8～1.9	耕作土中出土。
130	〃	端部から5cmのところに偏平でくずれた「M」字形のタガが付く。内面は主にナデ。	荒砂を多量に含み、もろい。茶褐色。	2.8	覆土上層出土。
131	〃	端部わずかに外反気味。底面に棒状の圧痕。内面はヨコにナデ。	荒砂多量に含む。内外黄褐色、断面黒茶色。	2.1	〃
132	〃	内面最下部は鈍く突出する。外面タテハケメ、内面は剝落目立つ。下部はユビオサエ。底面に棒状の圧痕。	内外茶褐色、断面灰色。	1.2	〃
133	〃	内面主にユビオサエ。タガは下端から4cmの位置に付けられる。底面に棒状の圧痕残る。	内外黄褐色。断面茶褐色。	1.8	覆土下層出土。
134	〃	タガは下端から7cmの位置に幅の狭い、偏平な「M」字形のものが付けられる。	砂粒多量に含む。内外茶褐色、断面暗褐色。	1.9～2.3	SD001内出土。
135	〃	内面は裾広がりに肥厚。タガは端部から5.5cmの位置にごく偏平でくずれた「M」字形のものが付けられる。底面には棒状の圧痕残る。	細砂多量に含む。内外黄～茶褐色、断面は暗褐色。	1.8	SD003内出土。
136	〃	端部から6cmの位置にごく偏平なタガが付けられる。内面はナナメハケメ及びナデ。底面に棒状の圧痕。	内外明灰褐色、断面灰色。	1.0～1.1	SD001内出土。
137	〃	端部から4.5cmの位置に偏平な「M」字形のタガが付けられる。内面ヨコハケメによる段が付く。下位はナデ。底面に棒状の圧痕残る。	荒砂を多量に含む。内外茶褐色、断面暗褐色。		SD003内出土。
138	朝顔　頸部	外面タテハケメ、内面ナデ、一部にハケメ。タガはごく偏平。	荒砂を多量に含み、外面褐色、内面、断面は黄灰色。	0.8	内堀出土。
139	朝顔　肩部	外面タテハケメ、内面は上位がナデ、下位ヨコハケメ。タガはくずれた台形。	明茶褐色を呈し、堅緻。	2.0	SD003内出土。
140	〃	タガは「M」字形。	砂粒を多量に含む。内外褐色、断面は明茶色。		外堀出土。
141	形　　象	上方がくびれる円筒形を呈し、紐を結んだような形態の部分があるが脱落している。外面はヨコナデ、ナデで仕上げるが、ハケメが残る。内面はナデ。	明るく茶味のある灰色を呈する。		
142	土師器　杯	所謂「須恵器模倣杯」の小破片。体部と口縁部は段差で画され、外反気味に開く。口縁径約16.5cm、高さは約5.5cm程度と思われる。体部外面がヘラケズリされる以外はヨコナデにより仕上げる。	細砂を少量含み、明るく茶味のある灰色を呈する。堅緻。表面赤味があり、赤彩されていた可能性あり。	——	後円部東側の内堀底から出土。
143	〃	142と同様の杯の小破片。口縁径約16cm、高さは約5.5cm程度と思われる。	茶褐色。砂粒を僅かに含み堅緻。	——	〃
144	須恵器　杯	蓋杯の身の受部の小破片。口縁径は13.5cm程度と思われる。体部下位は回転ヘラケズリ、他の部分は内外共ヨコナデで仕上げる。	淡青灰色を呈し堅緻。	——	

番号	種別、部位	形態、調整技法、等の特徴	胎土、色調、焼成等の特徴	ハケメ（10本/cm）	備　　考
145	須恵器　甕	中型の甕の口縁部破片。端部に面を形成し、外面直下に断面三角形の小さな凸帯をめぐらす。	暗い灰色で、堅緻、やや粗雑な作り。	——	内堀覆土中出土。
146〜165	〃	甕の体部破片。147は頸部直下のもの。外面は平行タタキのもの（146、163等）、格子風タタキのもの（147、157、164、等）があるが、タタキメの上にさらに横走する平行沈線を施すもの(146、158、161）や、カキメを施すもの（148、151、152、154）がある。 内面には例外なく同心円タタキが残るが、ナデのあるものも認められる（155)。	荒砂を含むものもあるが、大部分が内外明〜暗灰色。断面セピア色を呈するものもある（146、151、153)。	——	

V まとめ

鉄砲山古墳の昭和五四、五八、両年度の調査は、いずれも周堀部分の調査で小規模なものであったが、周堀及び埴輪などについて新たな知見が得られた。詳細は前章のとおりであり、以下調査により生じた問題点や、今後の課題等を提示しておきたい。

周堀

本古墳の周堀は、昭和五四年度の調査で、二重周堀であることが判明した。さらに昭和五八年度の調査区は、周堀が盾形であるなら、後円部の円弧に合わせ、湾曲があってしかるべき部分を含むが、確認された中堤と外堀は直線的で、長方形の平面形態と考えられるものであった。

前方部西側調査区では、後円部東側調査区と比較できるのは、中堤の幅だけだが、その基部の幅は約七・五㍍と、後円部東側調査区の一〇・四～一一・〇㍍という数値と掛け離れている。外堀底は中堤付近でなだらかに浅くなる傾向があり、中堤の崩壊も考えられ、本来的な状況をとどめていない可能性もある。

周堀の深さについては、後円部東側調査区、前方部西側調査区で、ローム検出面からでは数値に差があったが、標高では、後円部東側調査区内堀で約一七・一㍍、前方部西側調査区でもほぼ同様であった。また、後円部東側調査区の墳裾で確認した旧表土上面の標高は約一八・六㍍で、約一・五㍍の差があり、古墳築造時には周堀は約一・五㍍前後の深さがあったものと考えられる。そして、後円部東側の周堀覆土の珪藻分析の結果から、浅深の程度については不明だが、水を湛える環境下にあったことが判明した。

さて、長方形の周堀を有する前方後円墳は、全国でもあまり類例は多くない。こうした周堀を有する前方後円墳の最初の発見例は、千葉県芝山町殿塚古墳(註1)であったが、その後、同県神崎町舟塚原古墳(註2)も同様の周堀を有することが判明した。埼玉古墳群内の前方後円墳では、稲荷山古墳(註3)に続き、愛宕山古墳(註4)も長方形の二重周堀が確認され、二子山古墳(註5)もその可能性が高い。

前方後円墳の長方形周堀について、その希少性に注目した市毛勲氏は、その例に殿塚古墳や舟塚原古墳を挙げ、その可能性の高いものとして、鳥取県石馬谷古墳、群馬県総社二子塚古墳、奈良県城山古墳を指摘した(註6)。

さらに最近では、奈良県西殿塚古墳をはじめ、数基の前方後円墳が、長方形の周堀を持つと考えられているようだが(註7)、前方後円墳の場合、周堀の比較的広い面積の調査例に乏しいことにもよろうが、確実な長方形周堀の例は全国でも数例であり、推定のものでも十指に満たない。

鉄砲山古墳の周堀は以上のように希少性を有するものだが、その系譜等については、比較する例も少なく、調査面積も小範囲であり、これ以上の言及は避けるが、今後は各部分の具体的状況を明らかにするとともに、前方部南～南西に近接し所在する中の山古墳、奥の山古墳の周堀との係わりについても明らかにする必要があろう。

その他の遺構

周堀以外の遺構では、溝及び土壙があるが、周堀の開削と相前後すると思われる溝（SD003、004、006、011、012）が後円部東側調査区内堀底から発見されたがその性格については、不明である。こうした溝以外は

全て近年の耕作、開墾に係るものと判断されるものであった。

遺物

出土遺物の中で、多数を占めるのは埴輪、とりわけ円筒埴輪であるが、いずれも原位置にとどまるものではなく、破損して墳丘上方、あるいは中堤上から転落したと思われる破片ばかりであった。全容を窺えるまでに復元できたものはなかったが、両調査区で各一個体、ある程度の形態が判明するもの（第10図1、第16図1）があった。両者は色調やハケメの施し方等に差異があり、酷似する形態とは思われないが、段数やスカシ孔の位置に規格性を考えるならば、七～八本のタガを持ち、器高も1尺を越える大型品と推定され、円筒埴輪片も湾曲の程度から同様の大きさと思われる。

外面のハケメについては傾斜するものもあるが、基本的に全てタテハケメであり、タガについては偏平な「M」字形を主体とし、偏平な台形、三角形を呈するものもあり、底部に近い、低い位置に付けられるものもある。スカシは認めうる限り、全て円形で、底部調整の施されるものはない。

このように、鉄砲山古墳の円筒埴輪は、埼玉古墳群中の大型前方後円墳の中では、二子山古墳の円筒埴輪[註9]に後出する様相を持ち、川西編年[註10]のV期に属するものだが、その後半期と考えるのが妥当であろう。

埴輪では他に、朝顔形円筒埴輪や種類は不明だが形象埴輪片も出土した。

土師器及び須恵器も、全体の器形が判明したものはない。しかし、ある程度推定復元し得た土師器杯（142、143）は須恵器を模倣したもので、盛期の鬼高式である。同じく小破片の、須恵器杯（144）は田辺編年[註11]のⅡ期後半のもので、円筒埴輪の年代観と矛盾せず、古墳の年代の一端を示すものであろう。

（杉崎　茂樹）

註1　滝口宏、久地岡榛雄　『はにわ』　日本経済新聞社　昭和三八年

註2　市毛勲、安藤鴻基、多宇邦雄　『千葉県香取郡神崎町舟塚原古墳第一次発掘調査概報』　千葉県教育委員会　昭和四七年

註3　栗原文蔵、田部井功「稲荷山古墳・丸墓山古墳周堀発掘調査概要」『資料館報No.5』　埼玉県立さきたま資料館　昭和四九年

註4　昭和五六年度に行田市遺跡調査会が実施した後円部東側の市道域の調査で、外堀のコーナー部を確認している。

註5　栗原文蔵、田部井功「天王山・梅塚古墳他周堀発掘調査概要」『資料館報　No.6』埼玉県立さきたま資料館　昭和五〇年

註6　小川良祐、今泉泰之、中島　宏「二子山古墳外堀範囲確認調査概要」『資料館報No.12』　埼玉県立さきたま資料館　昭和五六年

註7　市毛　勲「前方後円墳における長方形周溝について」『古代学研究　No.71』古代学研究会　昭和四九年

『季刊考古学　第10号』の中で河上邦彦氏の大和の古墳の編年図表では西殿塚古墳を始め西乗鞍古墳等の周堀を破線または実線で示し、長方形周堀を想定しているようである。　雄山閣出版　昭和六〇年

註8　柳田敏司、他　『埼玉稲荷山古墳』　埼玉県教育委員会　昭和五五年

註9　杉崎茂樹　「二子山古墳の埴輪および須恵器」　『資料館報　No.14』　埼玉県立さきたま資料館　昭和五八年

註10　川西宏幸　「円筒埴輪総論」　『考古学雑誌　第64巻第2号』　日本考古学会　昭和五三年

註11　田辺昭三　「須恵器生産の展開」　『須恵器大成』　角川書店　昭和五六年

図

版

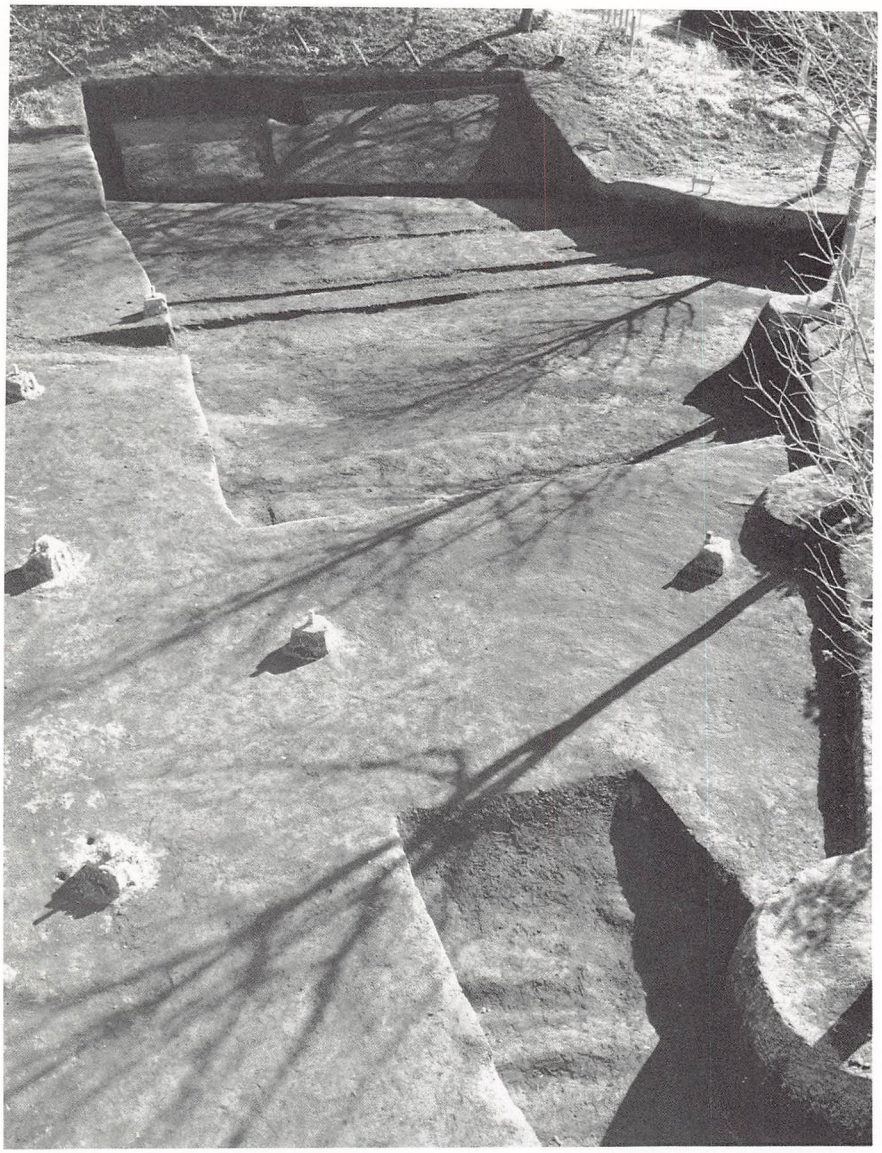
図版一

鉄砲山古墳の埼玉古墳群内の位置　（昭和57年３月撮影）

1　鉄砲山古墳近影（南から）

2　鉄砲山古墳近影（東方上空から、昭和58年11月撮影）

図版三



1　前方部西側調査区
　全　景　（北から）

2　同　　上
　全　景　（南から）

図版四

1　前方部西側調査区　内堀全景　（西から）

2　同　　上　（西から）

図版五

1　前方部西側調査区　墳裾　（西から）

2　前方部西側調査区　中堤　（南から）

図版六

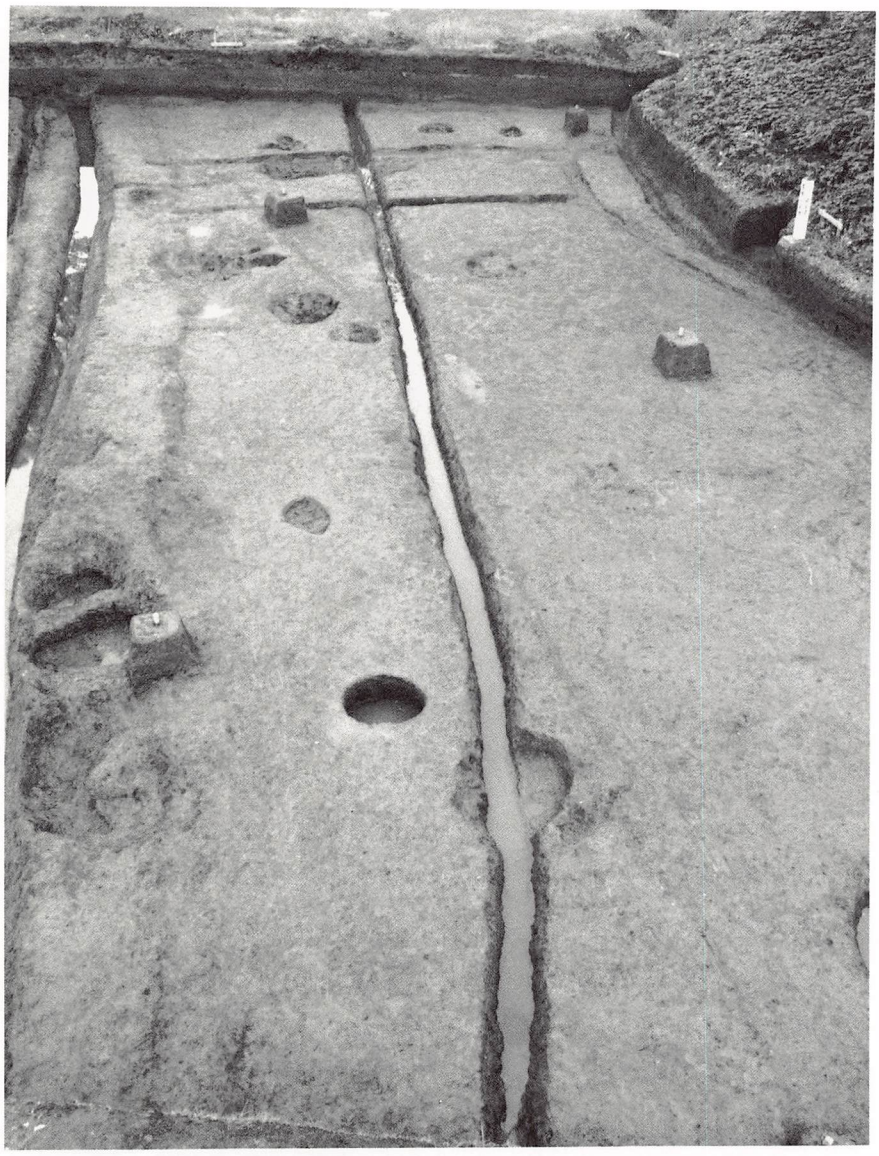
1　後円部東側調査区　全景　（東方上空から）

2　同　　上　　（東南から）

1　後円部東側調査区　全景　（後円部墳丘上から）

2　同上調査区　内堀　（東から）

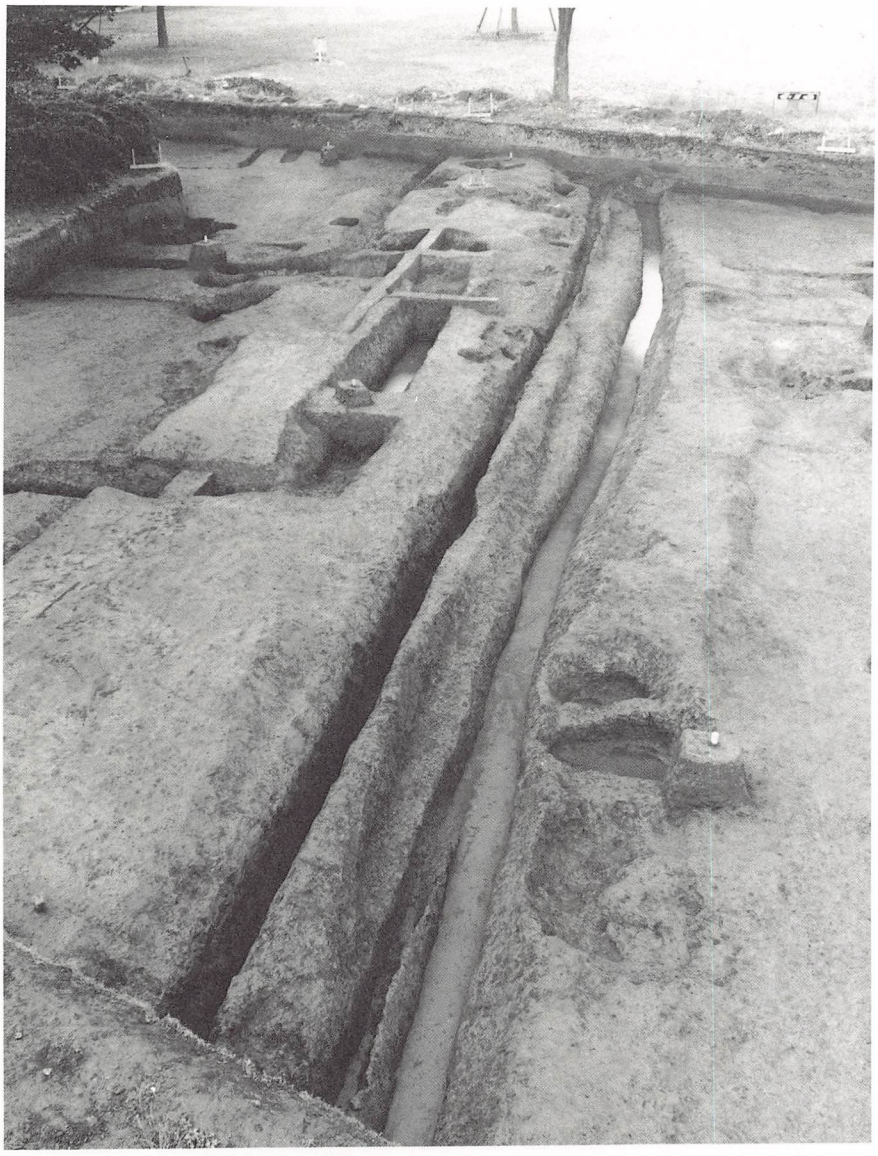
図版八



1　後円部東側調査区
内堀底（北東から）

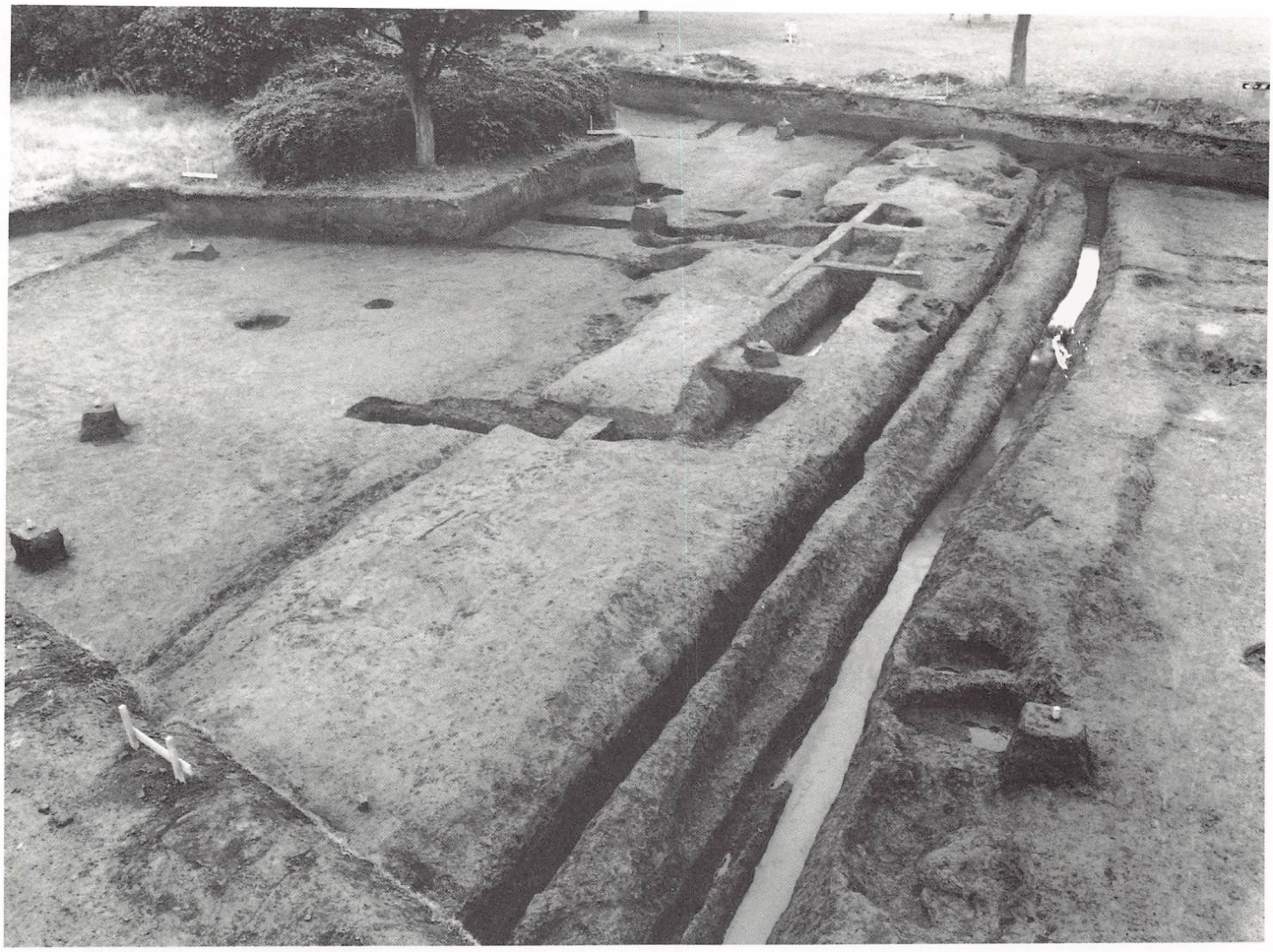
2　同上調査区
内堀底西部（北西から）

図版九

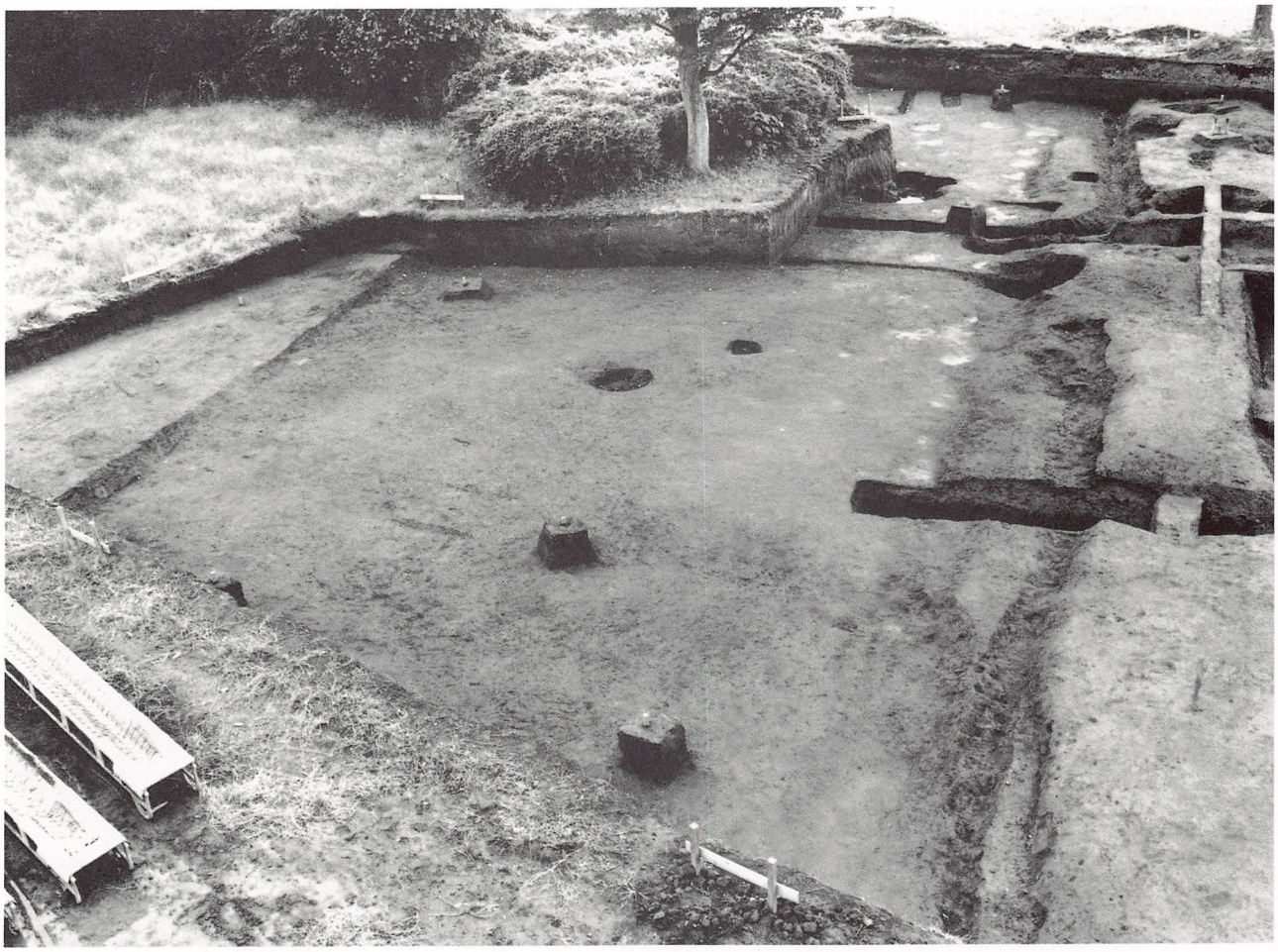


1　後円部東側調査区
内堀中堤側立上り及び
中堤肩部（北から）

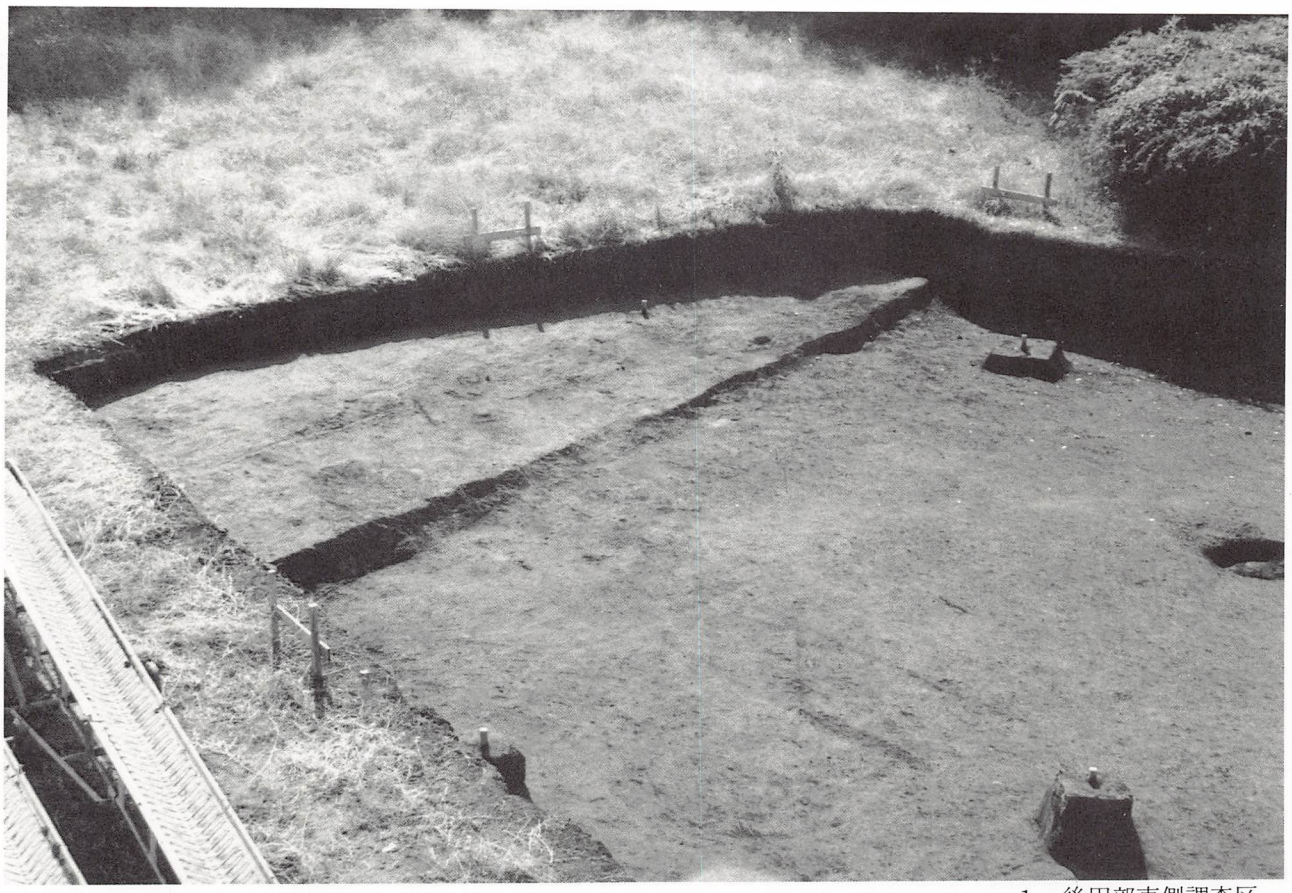
2　同上調査区
内堀中堤側立上り（北から）



1　後円部東側調査区　中堤　（北から）



2　後円部東側調査区　外堀全景　（北から）

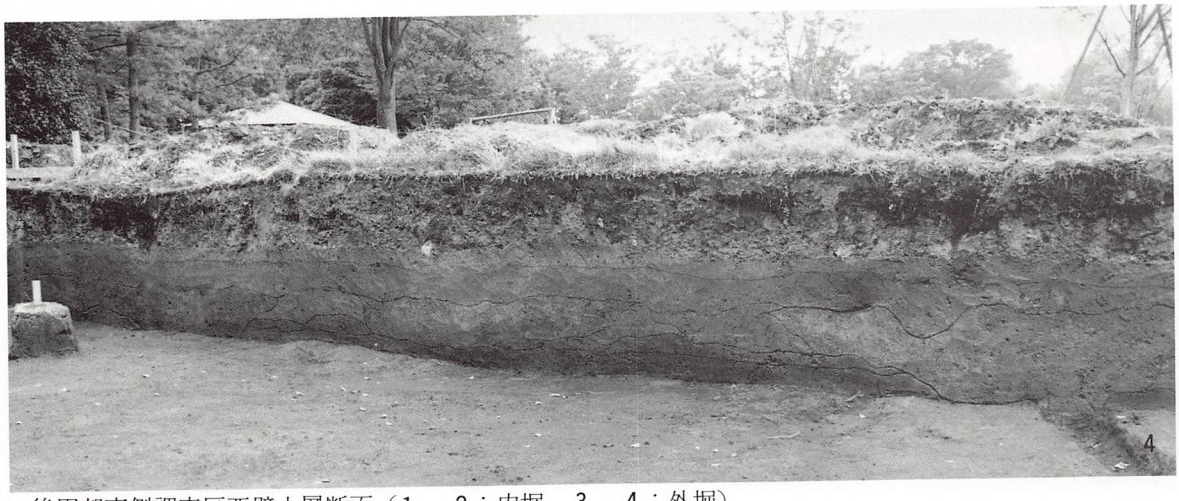


1　後円部東側調査区
外堀東部（北から）

2　同　上　調査区
外堀外側立上り

1　後円部東側調査区　外堀南部　（西から）

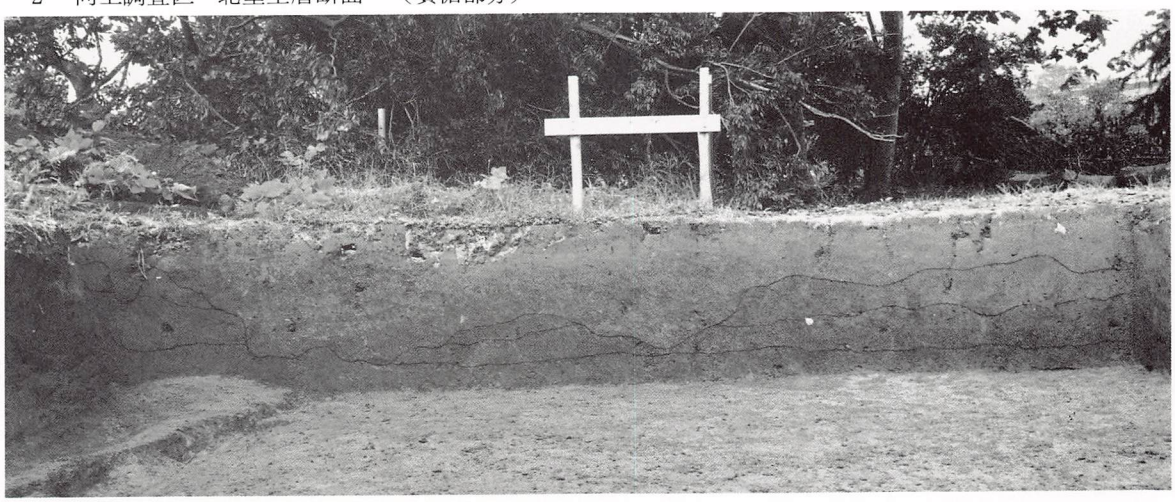
2　後円部東側調査区　外堀底円筒埴輪出土状況



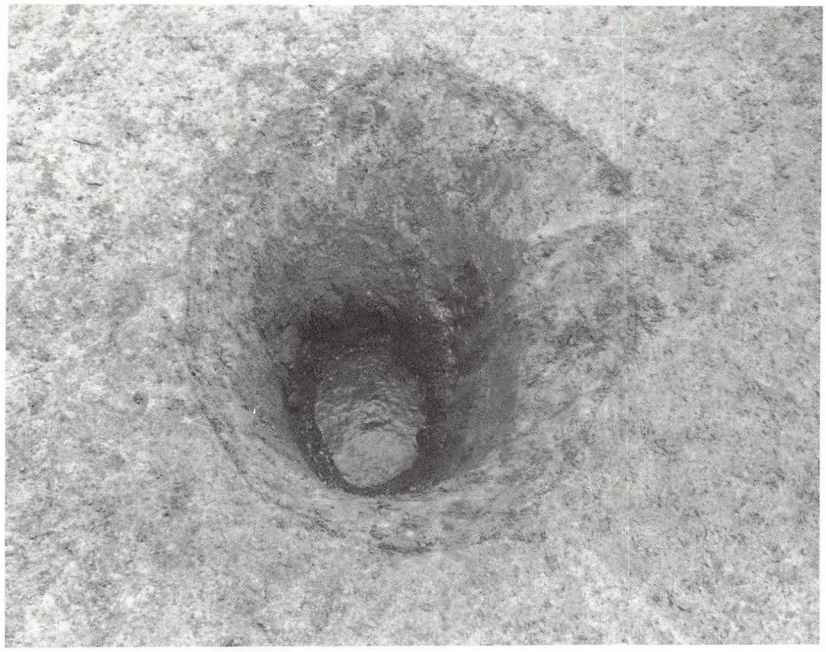
後円部東側調査区西壁土層断面（1，2：内堀、3，4：外堀）

1　後円部東側調査区　西壁土層断面　（墳裾部分）

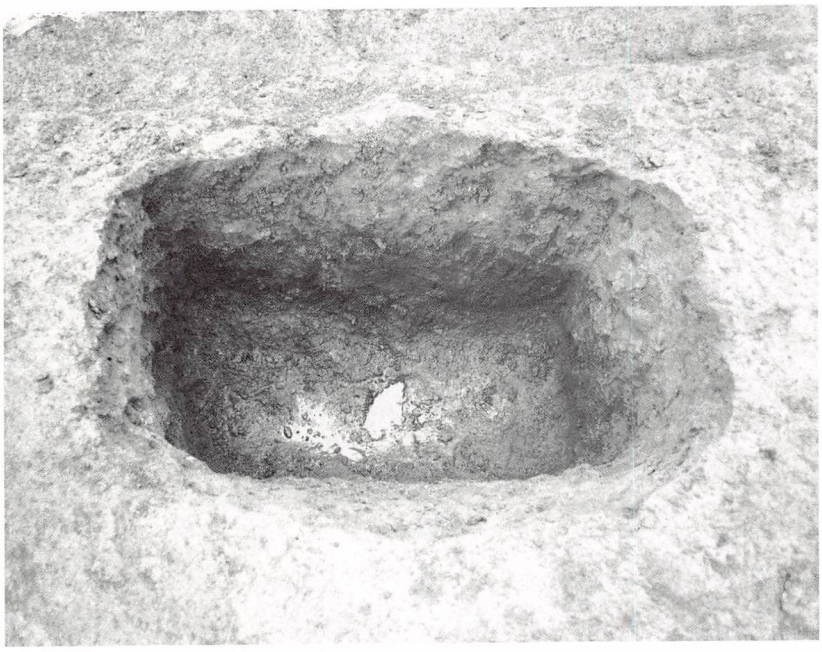
2　同上調査区　北壁土層断面　（墳裾部分）



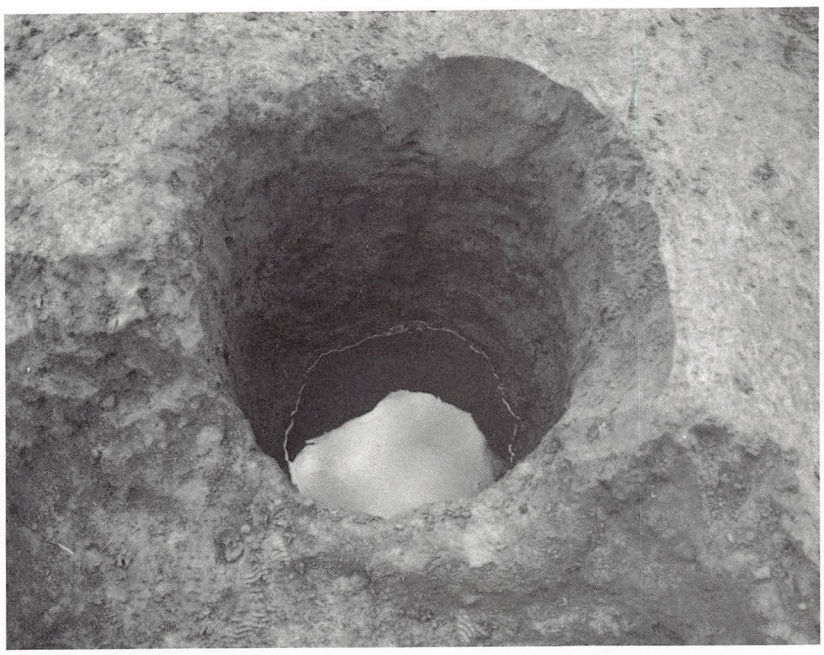
3　同　　上



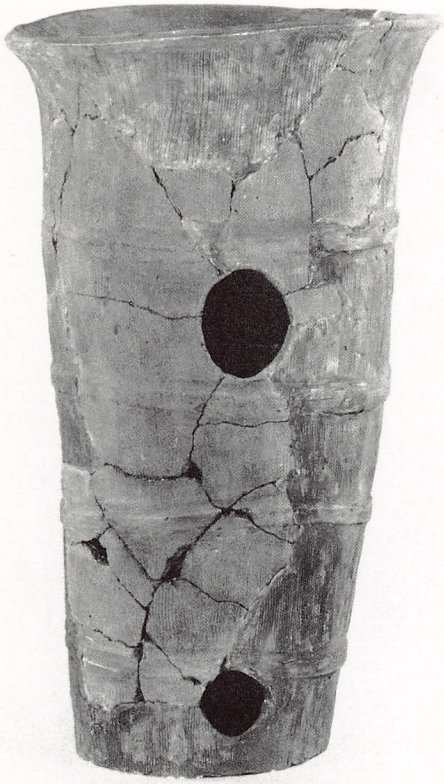
1　後円部東側調査区
ＳＨＯ11

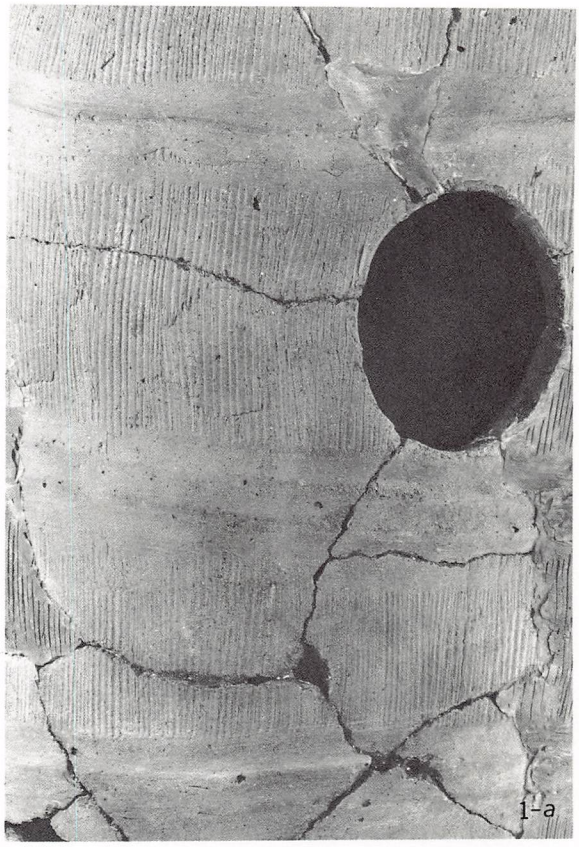


2　同　　上
ＳＨＯ33

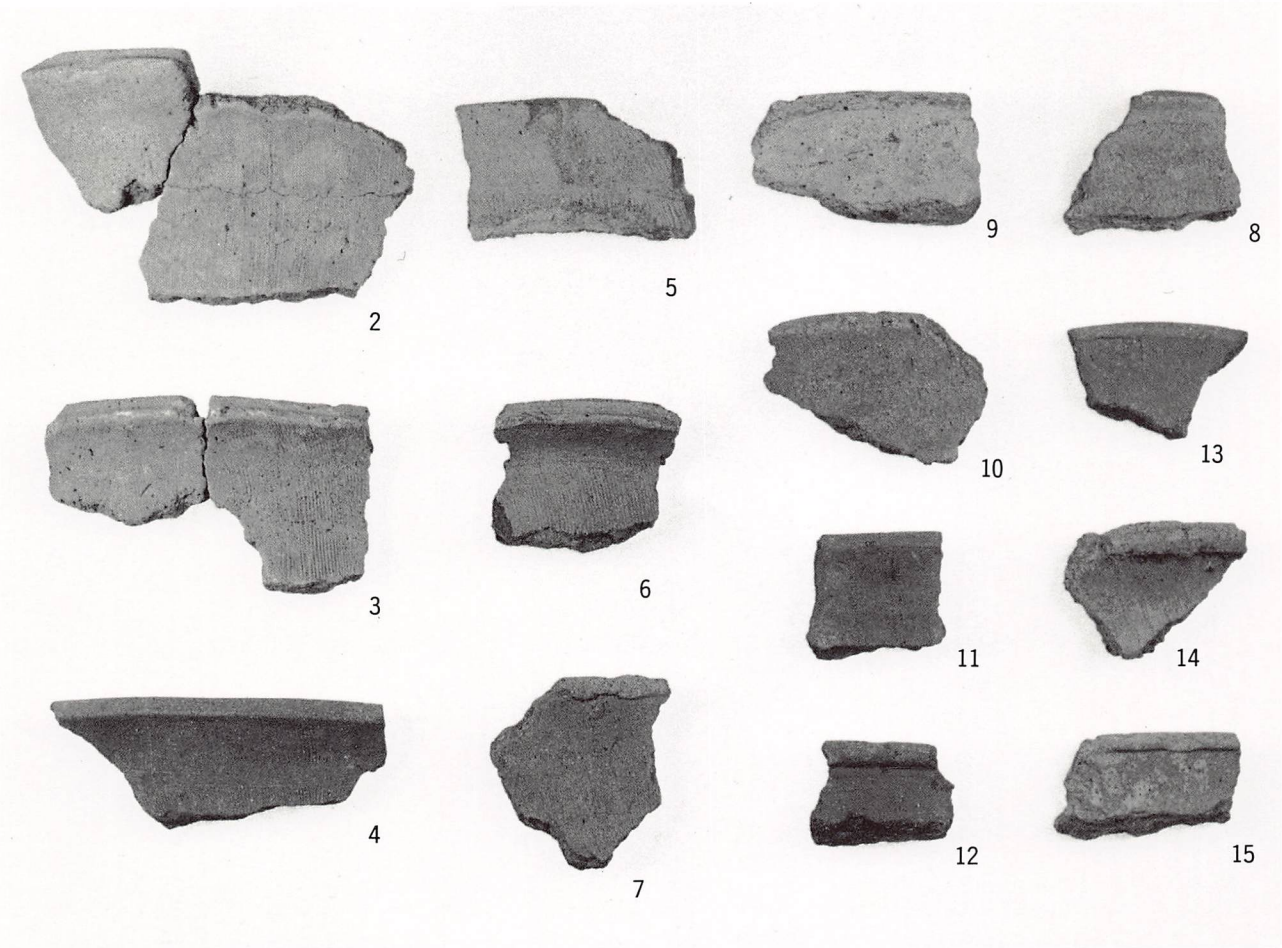


3　同　　上
ＳＨＯ35

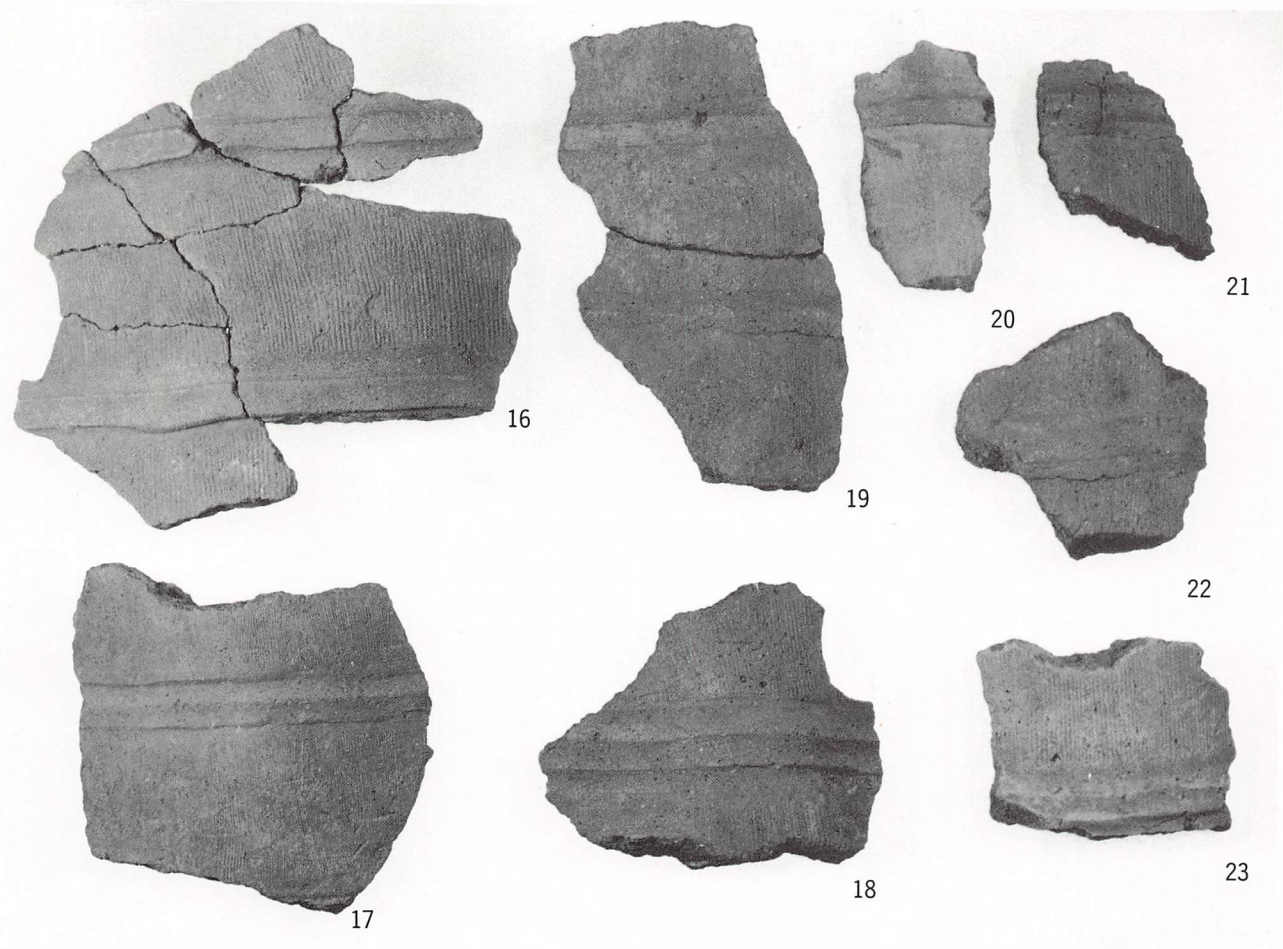




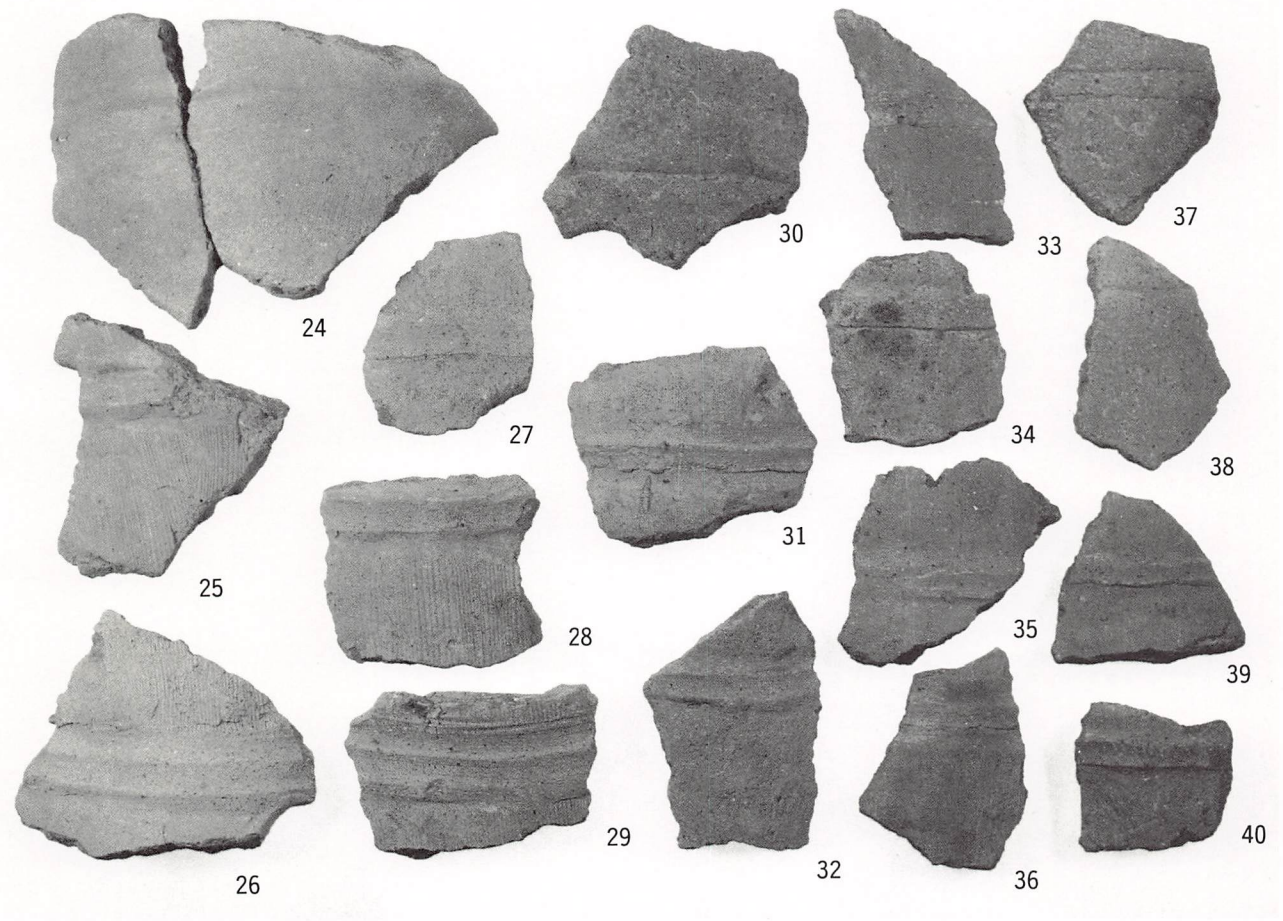
1　前方部西側調査区出土遺物１（1，*a*：スカシ付近の体部）



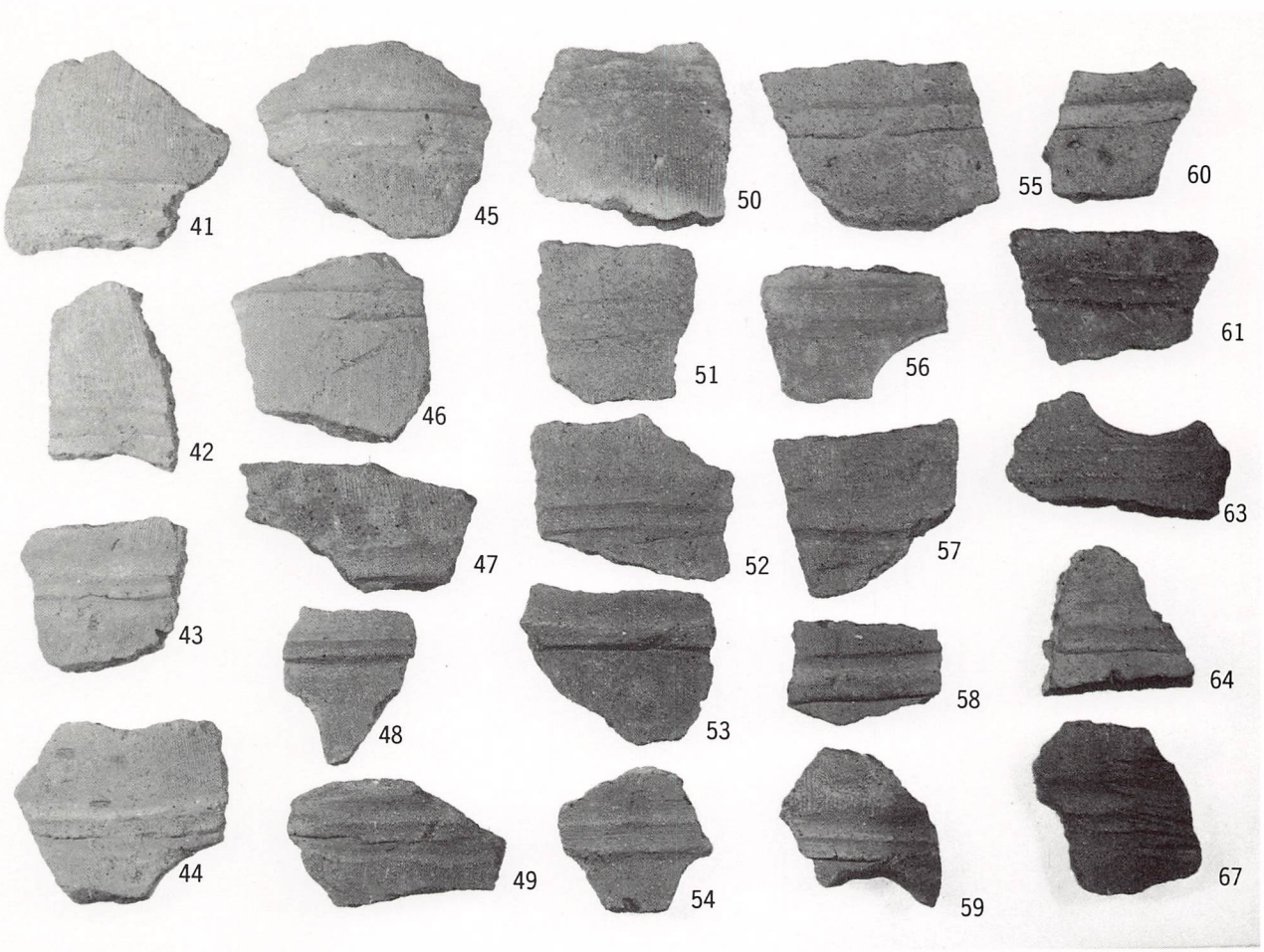
2　同　　上　　2（2～15）



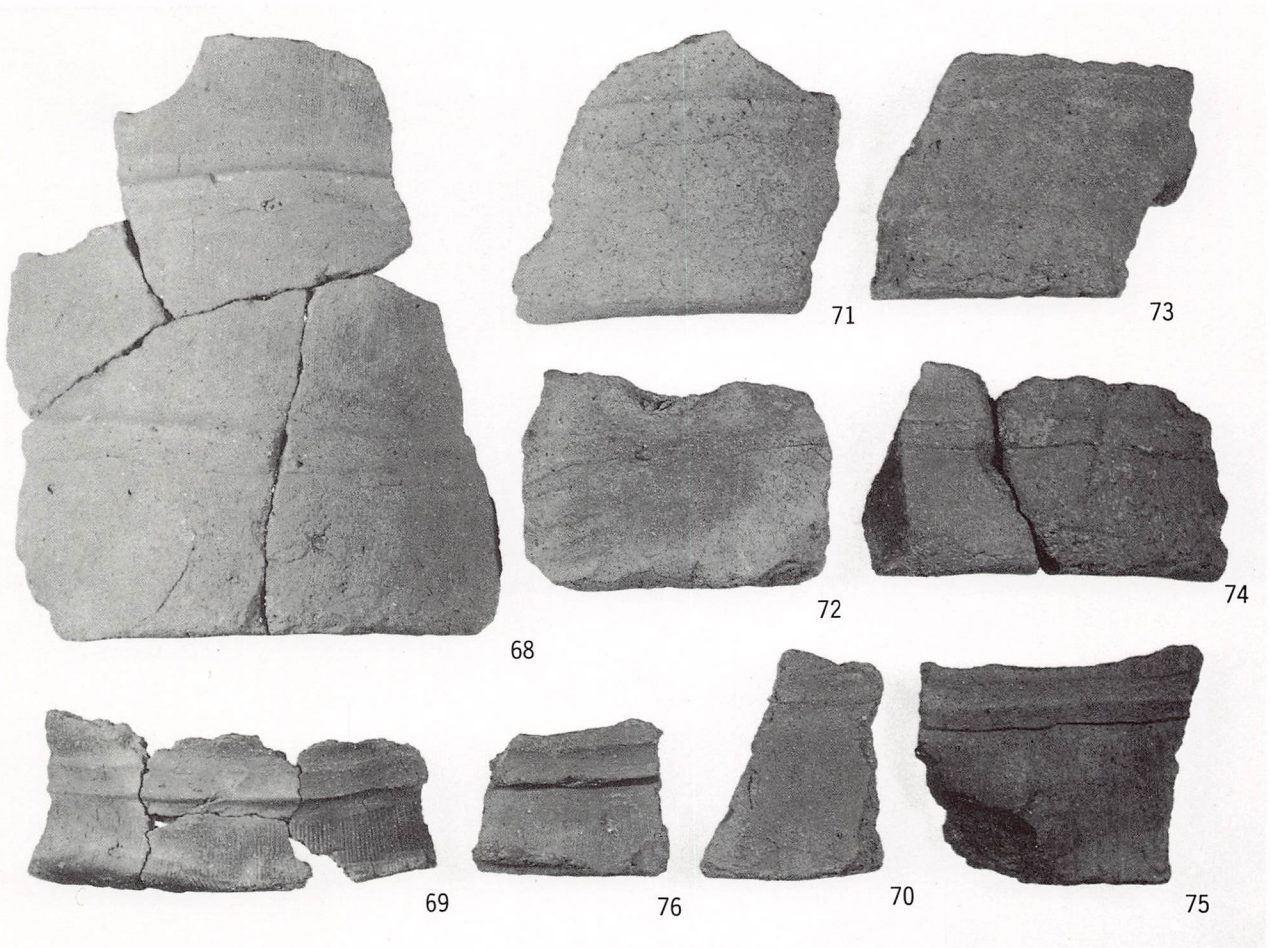
1　前方部西側調査区出土遺物　3（16～23）



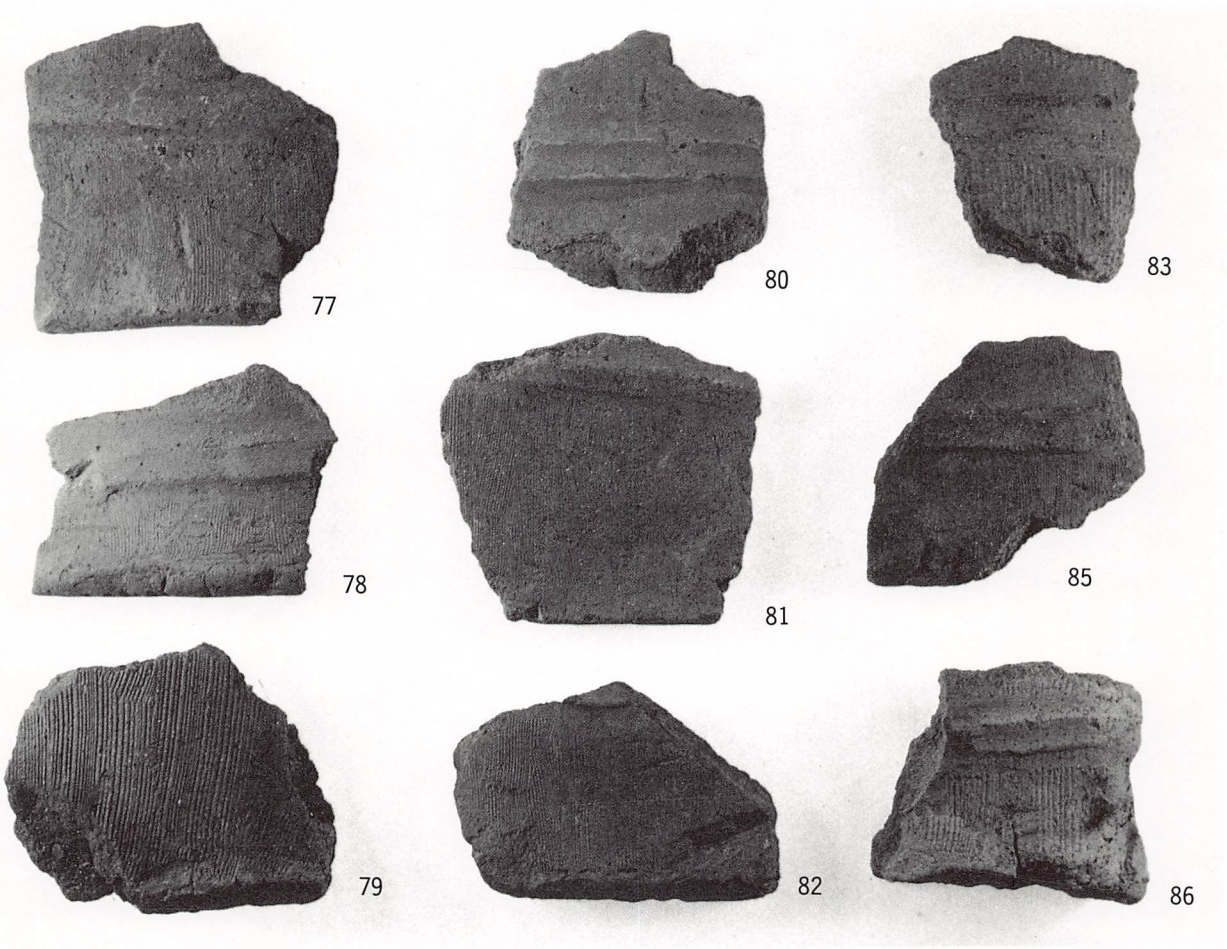
2　同　　上　　4（24～40）



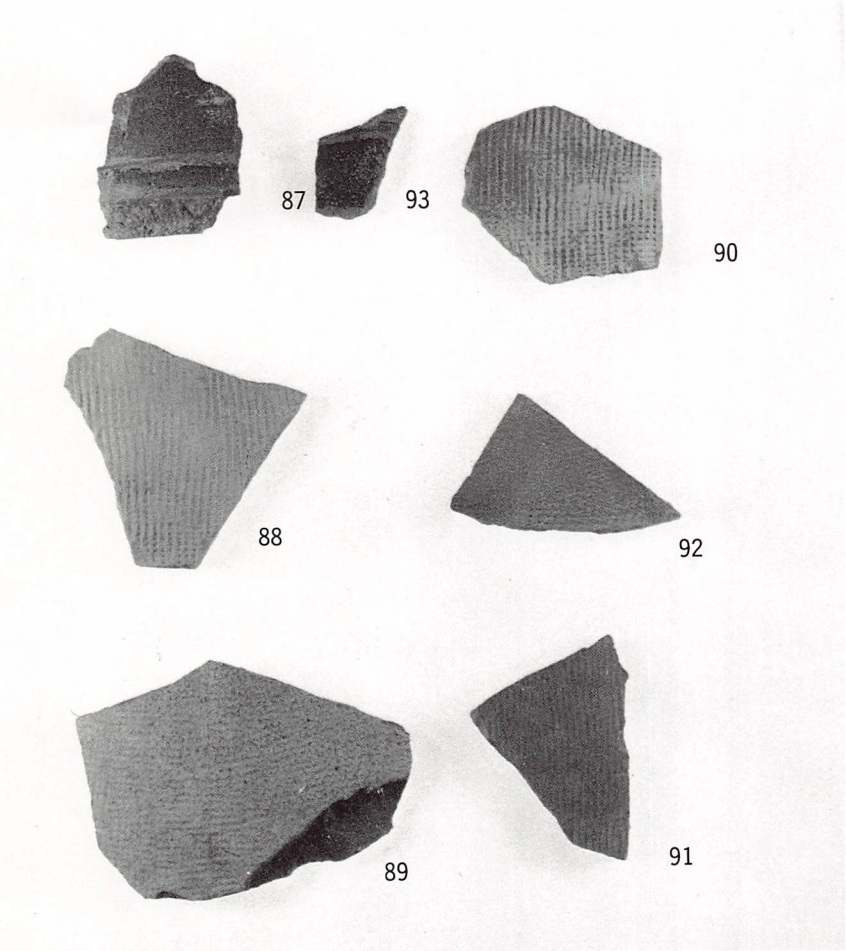
1　前方部側調査区出土遺物　5（41～67）



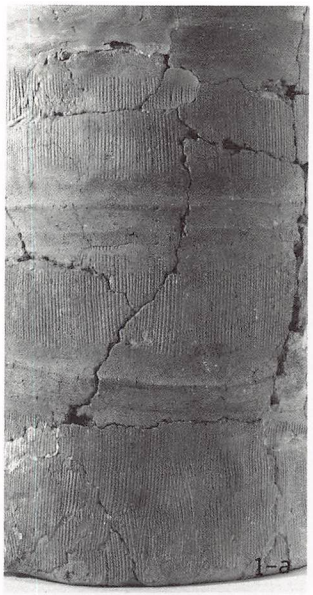
2　同　　上　　6（68～75）

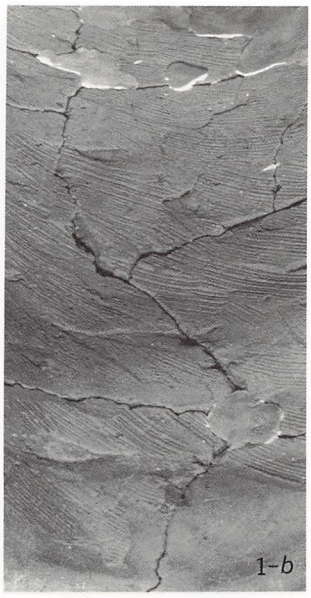


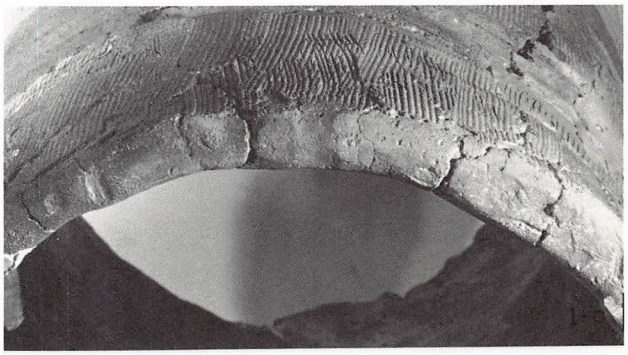
1　前方部西側調査区出土遺物　7（77～86）



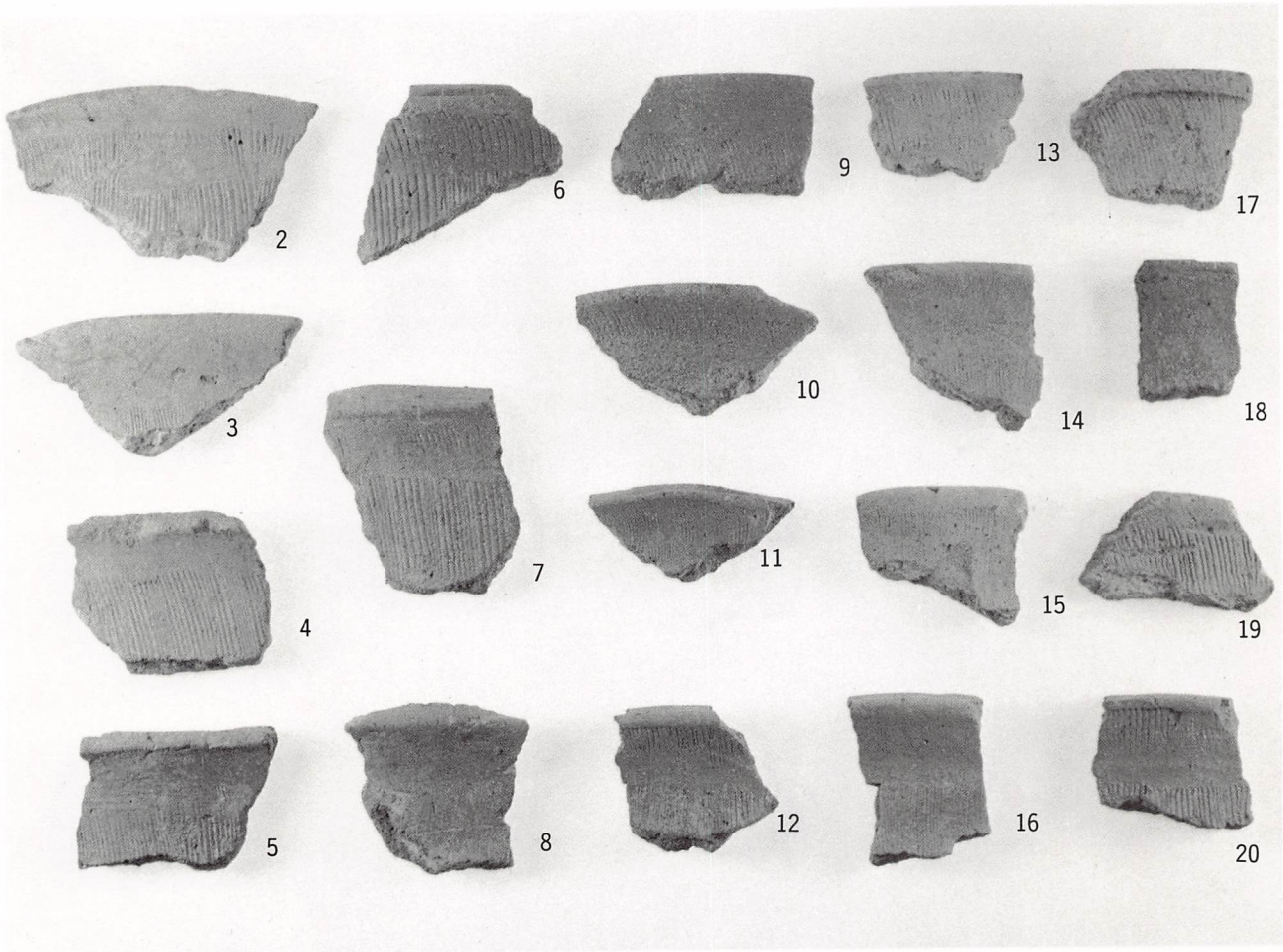
2　同　　上　　8（87～93）



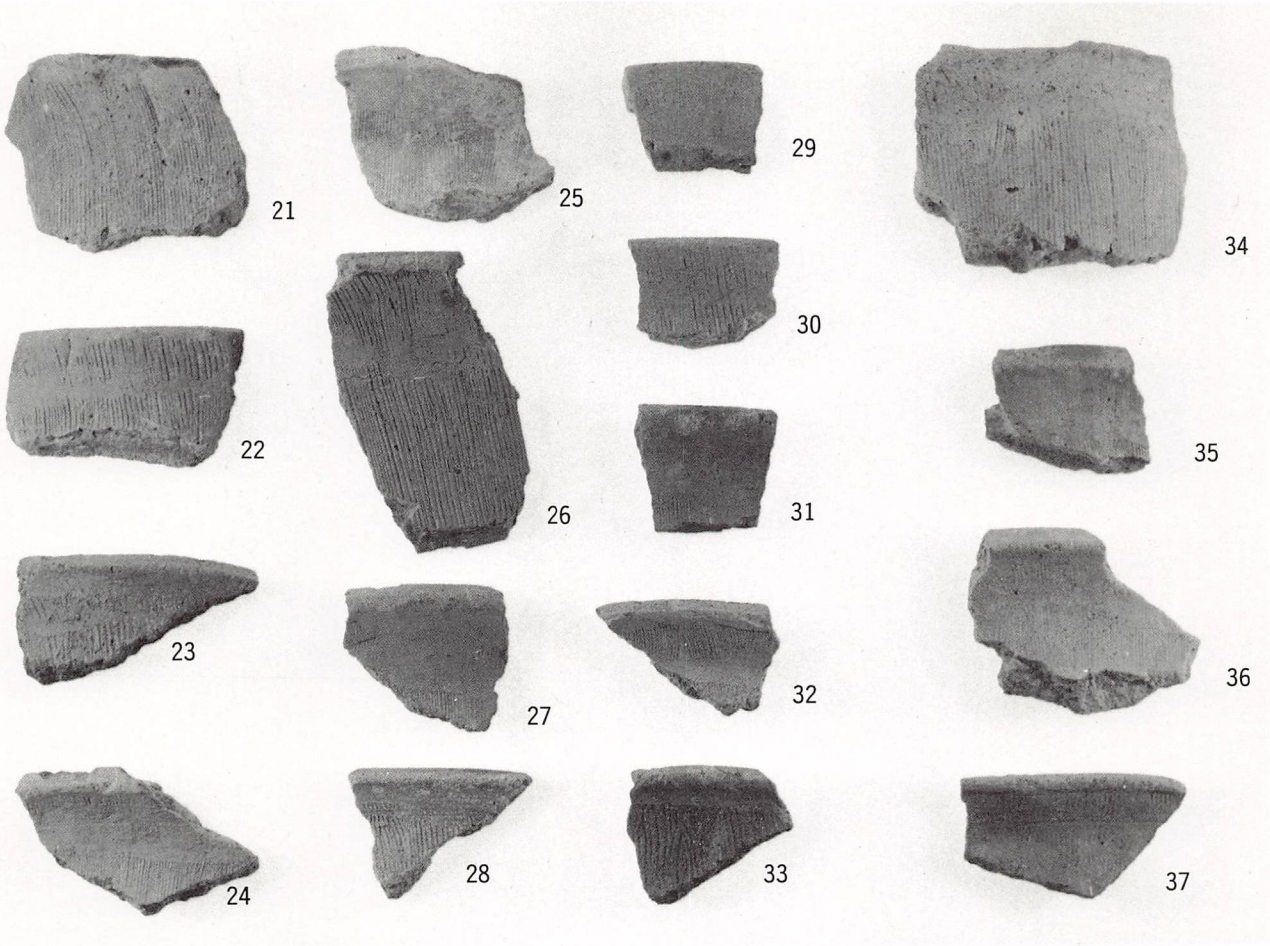




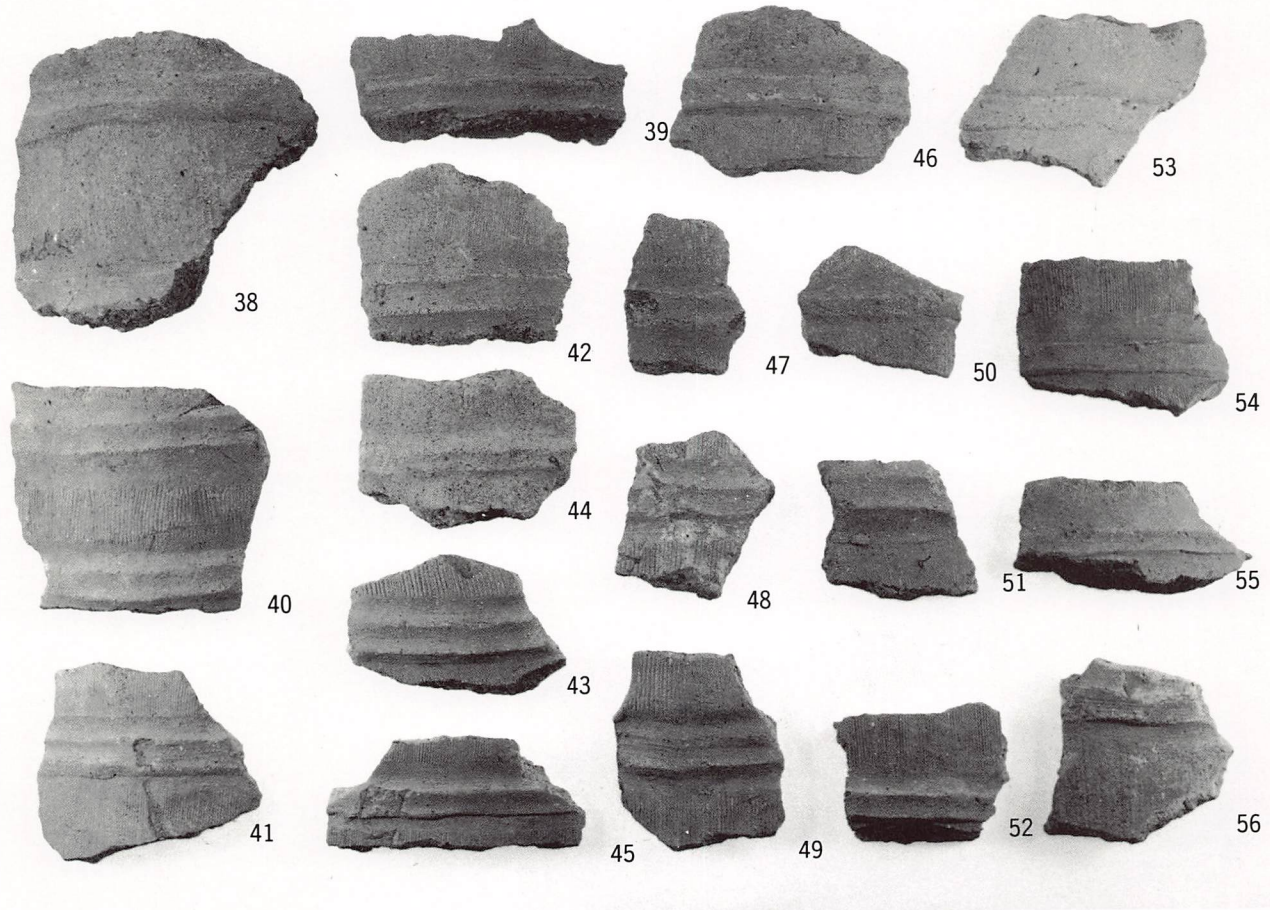
1　後円部東側調査区出土遺物　1（1，a：体～底部外面，b：体～底部内面，c：底面）



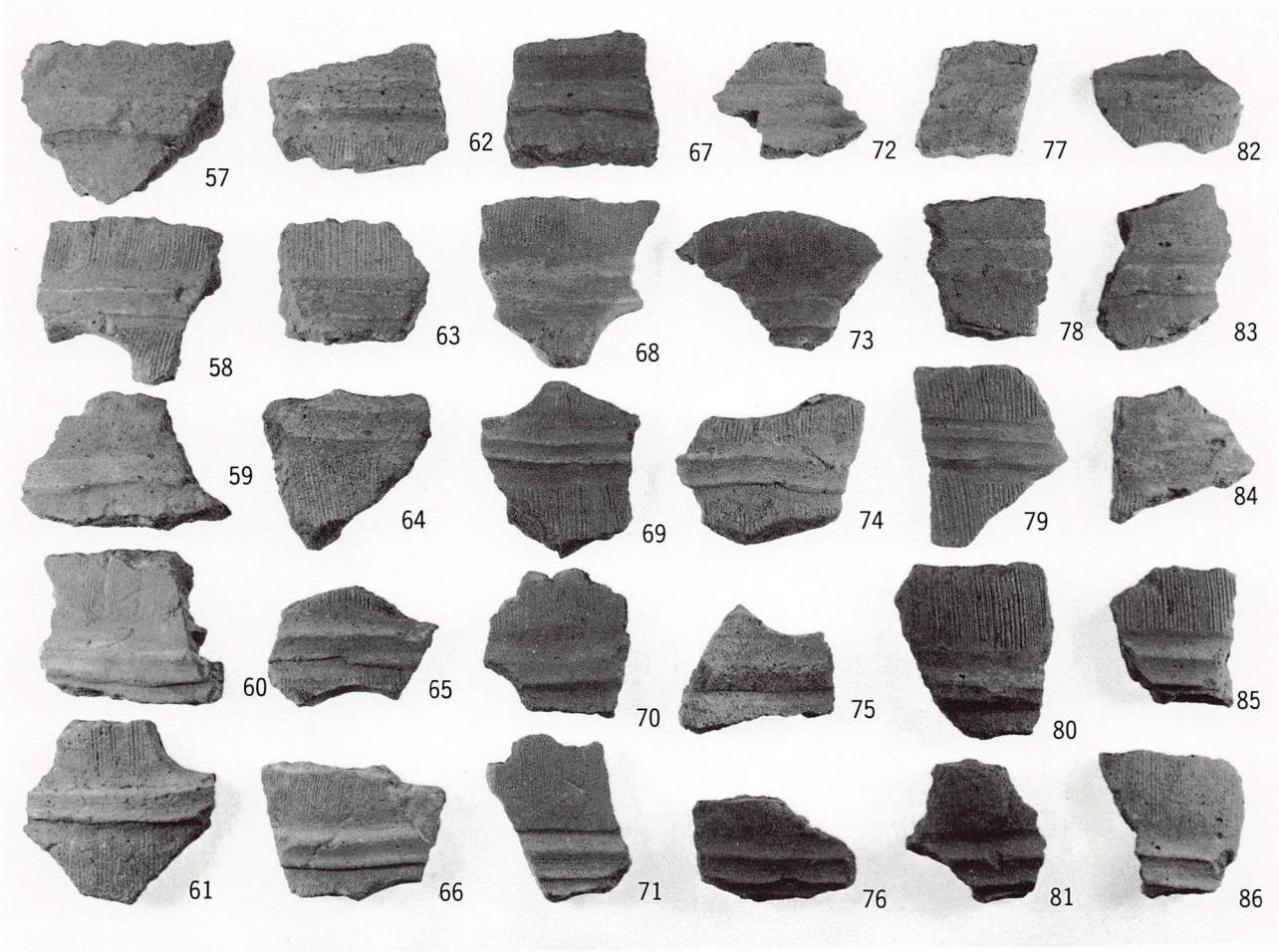
2　同　　上　2（2～20）



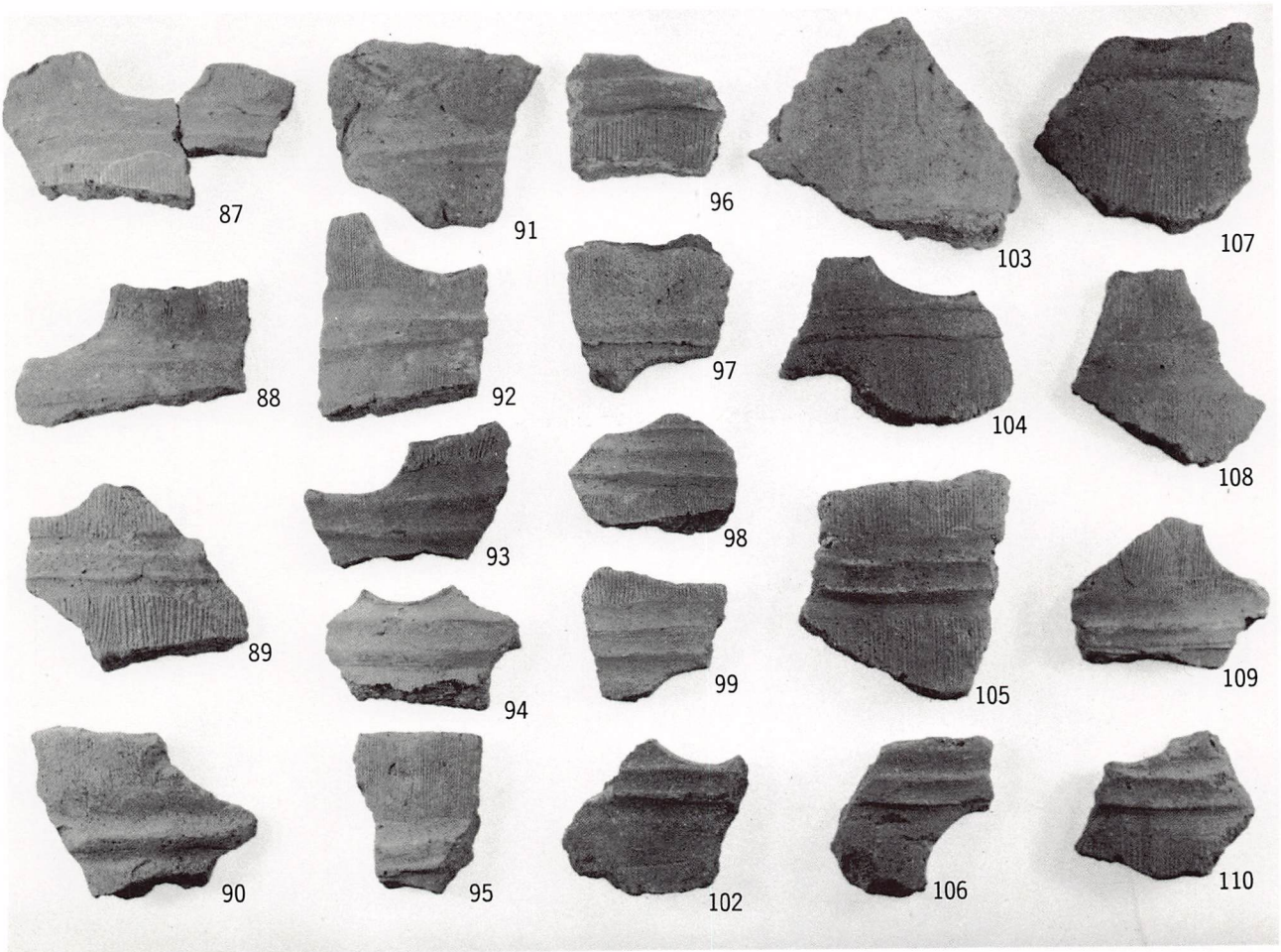
1　後円部調査区出土遺物　3（21～37）



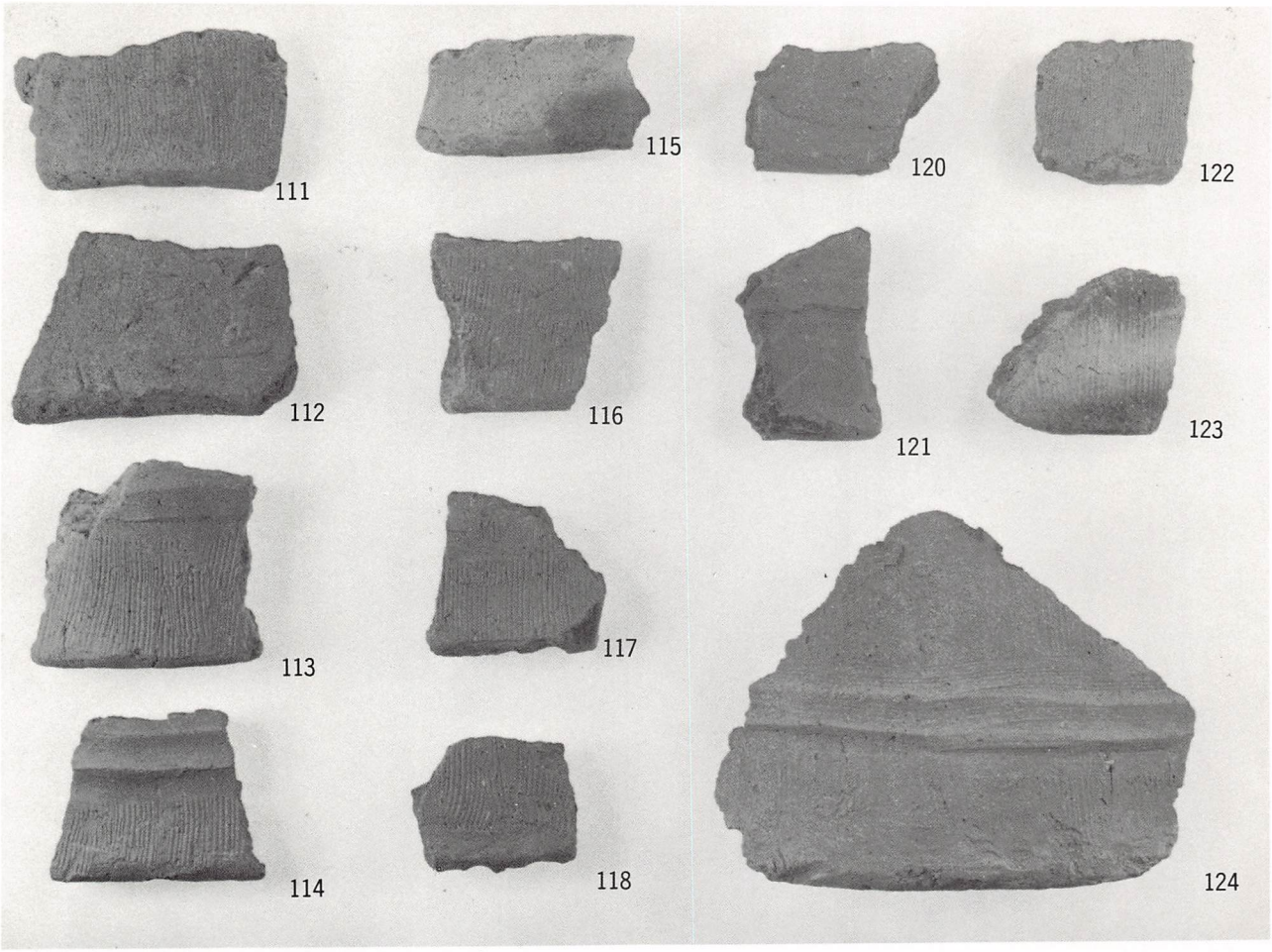
2　同　　上　4（38～56）



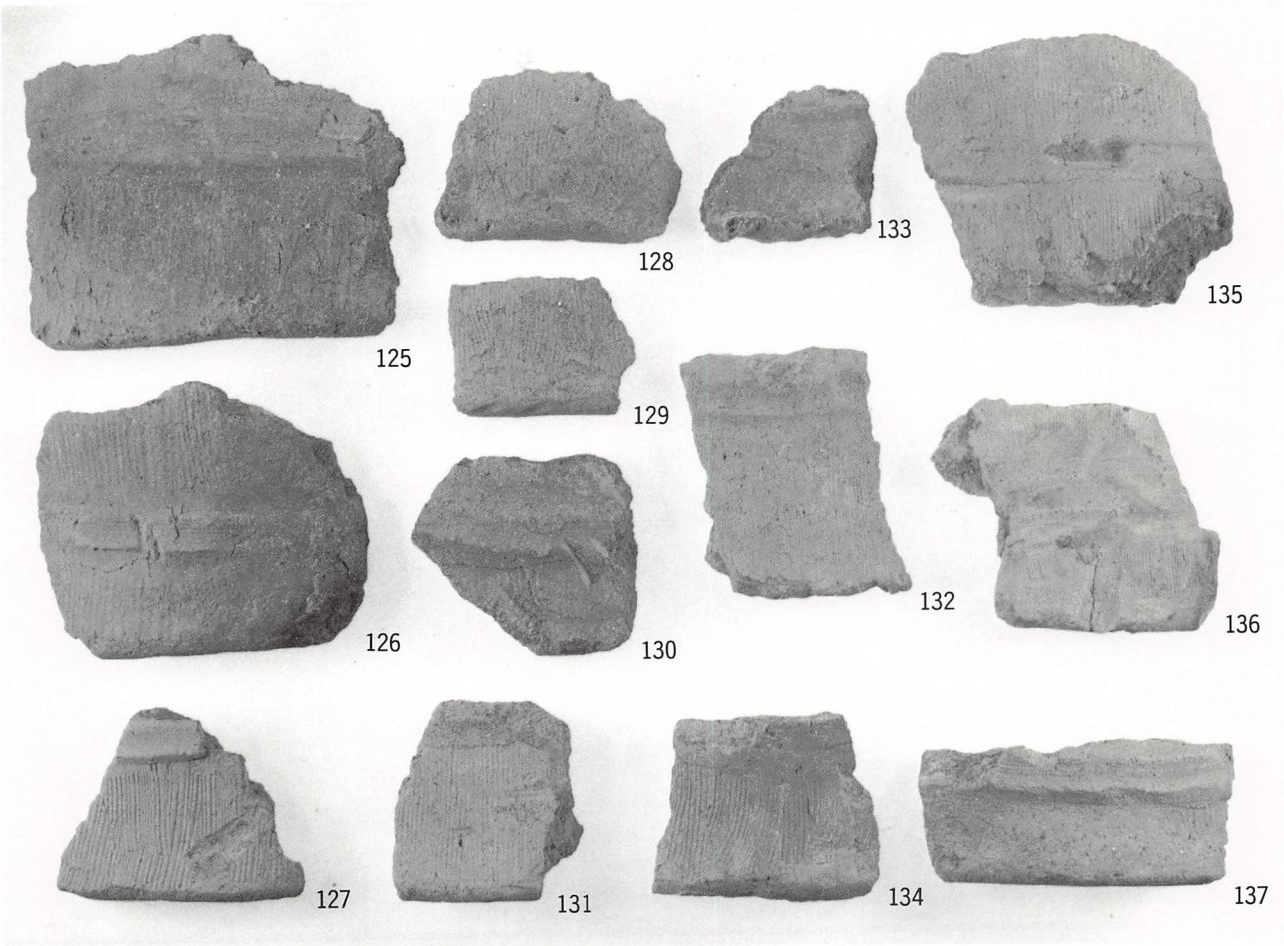
1　後円部東側調査区出土遺物　5（57～86）



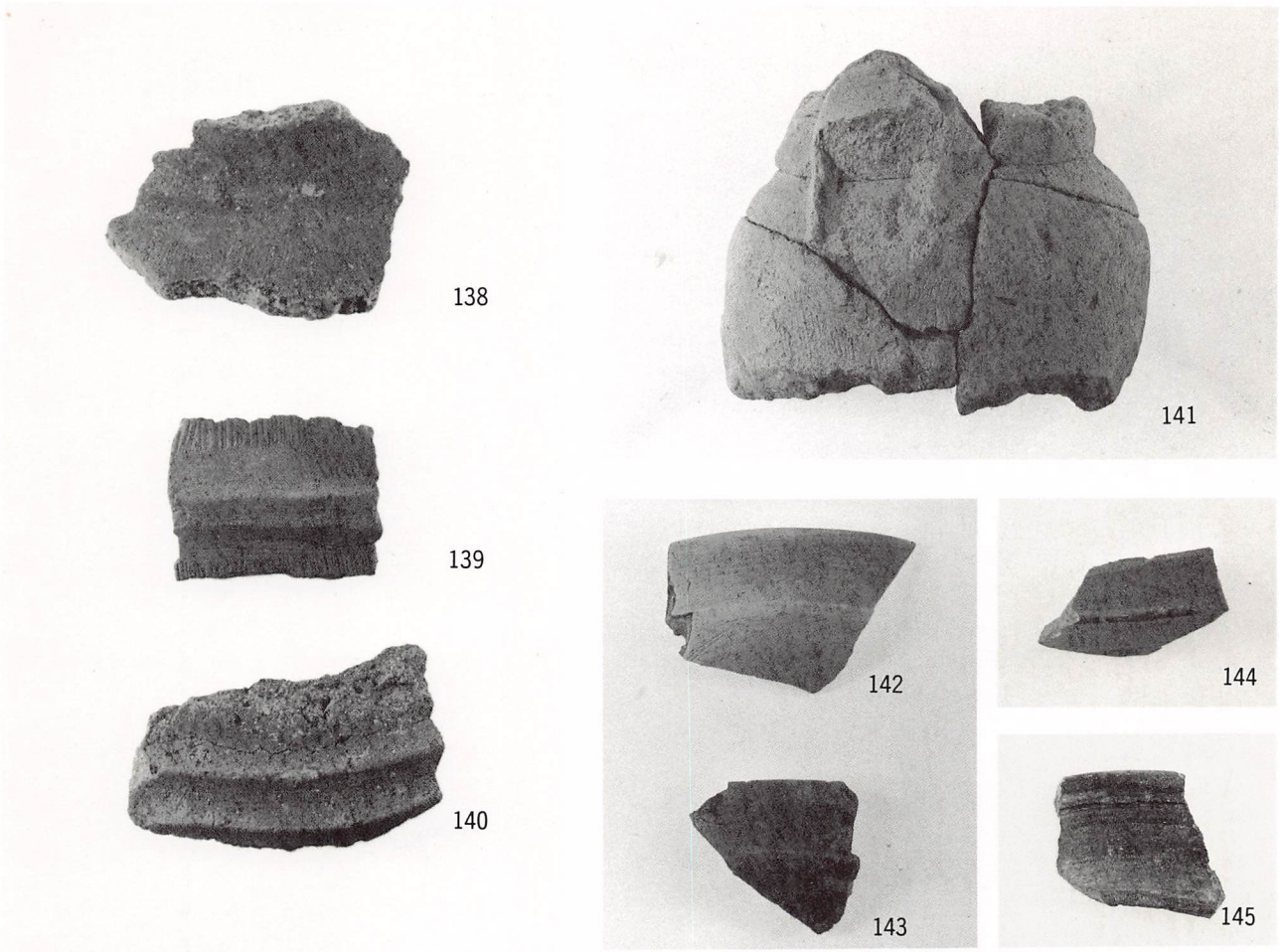
2　同　　上　　6（87～110）



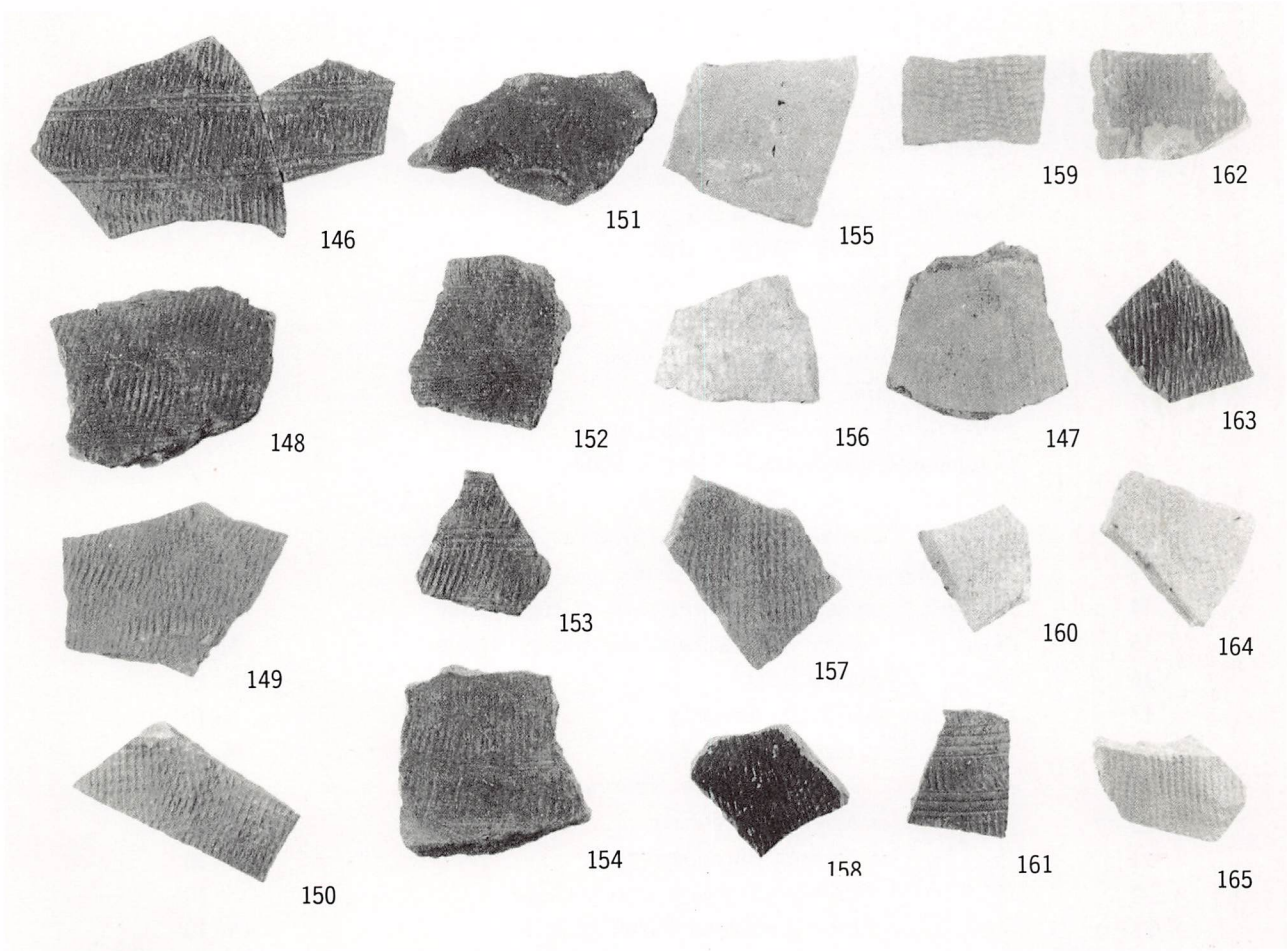
1　後円部調査区出土遺物　7（111～124）



2　同　　上　8（125～137）



1　後円部調査出土遺物　9（138～145）



2　同　　上　10（146～165）

埼玉古墳群発掘調査報告書　第二集

鉄砲山古墳

昭和六十年三月二〇日　印刷
昭和六十年三月三〇日　発行

編集　埼玉県立さきたま資料館
発行　埼玉県教育委員会
印刷　アサヒ印刷株式会社